

平成22年度

雲井遺跡第33次発掘調査報告書

2010

神戸市教育委員会

平成22年度

雲井遺跡第33次発掘調査報告書

2010

神戸市教育委員会

# 序

神戸市の主要ターミナルとなる三ノ宮駅前の民間再開発は、新たな繁華街の形成と、街に活気を取り戻すことを期待される事業であり、早期の完成が待たれるところです。

当該事業に伴う発掘調査は、平成20年度から行なわれました。調査の結果、縄文時代早期の土器や石器、縄文時代後期の耳栓（耳飾り）、弥生時代中期前半の玉作り関連の建物と遺物、武器形青銅器の鋳型など、多くの遺構と遺物が出土しました。これらの調査成果は、雲井遺跡第28次発掘調査報告書が刊行され、記録保存が行なわれています。

本書は、当該事業地に残された未調査部分について平成22年度に調査を行い、その報告を行なうものです。

民間再開発により、街の様子がさらに変化を遂げます。しかしながら、当地には、土地利用の変遷が埋没しており、それらを調査し、後世に伝えることが現代を生きる私たちの責務と考えています。

最後に、発掘調査および本報告書を作成するにあたり、ご協力いただきました関係諸機関ならびに関係者各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成22年12月

神戸市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、神戸市中央区旭通4丁目に所在する、雲井遺跡第33次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、旭通4丁目地区第一種市街地再開発事業に伴うもので、旭通4丁目地区市街地再開発組合より委託を受けて神戸市教育委員会が調査主体として実施した。また、現地発掘作業の一部、航空写真の撮影、測量、遺構図に関しては、事業主と契約した株式会社大林組が、調査主体である神戸市教育委員会に提供し、実施する形態となった。
3. 現地での調査は、平成22年5月31日～平成22年6月21日まで実施し、神戸市西区に所在する神戸市埋蔵文化財センターにて出土遺物の整理、発掘調査報告書の作成を行った。調査面積は、200m<sup>2</sup>である。
4. 現地での調査と本書の編集は、神戸市教育委員会文化財課学芸員 川上厚志が担当した。
5. 第3章の第28次調査に伴う土器の実測、浄書については、神戸市教育委員会文化財課学芸員 西岡誠司が行なった。
6. 玉及び関連遺物に関しては、大賀克彦氏からご教授いただきました。記して、深謝いたします。
7. 遺物写真撮影は杉本和樹氏（西大寺フォト）が行った。
8. 本書に使用した方位・座標は世界測地系第V系座標、標高は東京湾平均海水面（T.P.）で表示した。
9. 本書に記載した遺跡の位置図は、国土地理院発行の25,000分の1地形図「神戸首部」を、調査地点の位置図は、神戸市建設局発行2,500分の1地形図「三宮」を使用した。
10. 発掘調査の実施ならびに本書の刊行に際しては、事業主である旭通4丁目地区市街地再開発組合ならびに、施工主である株式会社大林組に多大なる協力をいただいた。

# 本文目次

第1章 はじめに.....	1
第1節 遺跡の立地と歴史的環境.....	1
(1) 遺跡の立地.....	1
(2) 遺跡の歴史的環境.....	2
第2節 雲井遺跡の既往の調査.....	5
第3節 調査に至る経緯と経過.....	7
(1) 調査に至る経緯.....	7
(2) 発掘調査の経過.....	7
(3) 調査日誌抄.....	9
(4) 発掘調査組織.....	10
第2章 発掘調査の成果.....	11
第1節 第1遺構面(弥生時代後期末～古墳時代前期) .....	11
第2節 第2遺構面(弥生時代中期) .....	14
第3節 第3遺構面(弥生時代前期末～中期前半) .....	23
第3章 第28次発掘調査流路に伴う弥生時代の遺物 .....	25
遺物観察表.....	45
第4章まとめ.....	49

# 挿図目次

fig.1 雲井遺跡の位置 .....	1	fig.24 第28・33次調査 弥生時代中期遺構面全体図 .....	25
fig.2 雲井遺跡周辺の遺跡 .....	3	fig.25 2区 SR303出土遺物 .....	26
fig.3 雲井遺跡の調査地点位置図 .....	5	fig.26 2区 SR303出土石鏸 .....	27
fig.4 調査範囲と調査区の設定 .....	8	fig.27 2区 SR303出土石庖丁 .....	28
fig.5 SK103・SD101出土遺物 .....	11	fig.28 4区 SR405第1・2層出土遺物 .....	29
fig.6 第1遺構面・遺構全体図 .....	12	fig.29 4区 SR405第3層a出土遺物 .....	30
fig.7 SB101遺構図 .....	13	fig.30 4区 SR405第3層b出土遺物 .....	31
fig.8 SB101出土遺物① .....	13	fig.31 4区 SR405第3層c・d出土遺物 .....	32
fig.9 SB101出土遺物② .....	14	fig.32 4区 SR405出土石鏸 .....	33
fig.10 第2遺構面・遺構全体図 .....	15	fig.33 4区 SR405出土石庖丁 .....	34
fig.11 SK201遺構図 .....	16	fig.34 4区 SR405出土石斧 .....	35
fig.12 SK201出土遺物 .....	16	fig.35 1区 SR202出土遺物 .....	36
fig.13 SK203・204・209出土遺物 .....	17	fig.36 1・2区SR401出土遺物 .....	37
fig.14 SB201遺構図 .....	18	fig.37 1区 SR202・401出土遺物 .....	38
fig.15 SB201出土遺物 .....	18	fig.38 第4遺構面 流路内出土 石錐 .....	39
fig.16 SB202遺構図 .....	19	fig.39 第4遺構面 流路内出土 石庖丁 .....	40
fig.17 SB202出土 玉作り関連遺物 .....	20	fig.40 第4遺構面 流路内出土 スクレーパー .....	40
fig.18 SB202出土遺物 .....	21	fig.41 第28次調査出土 三角刺突施文土器 .....	41
fig.19 SB203遺構図 .....	22	fig.42 第28・33次調査 弥生時代中期遺構面全体図 .....	42
fig.20 SB203出土遺物 .....	22	fig.43 第5遺構面 流路内出土 土器 .....	43
fig.21 第3遺構面・SD201遺構図 .....	23	fig.44 第5遺構面 流路内出土 石庖丁 .....	43
fig.22 SD201断面図 .....	23	fig.45 第5遺構面 流路内出土 石鏸 .....	44
fig.23 SD201出土遺物 .....	24	fig.46 第5遺構面 流路内出土 石錐 .....	44

## 写真目次

写真1	空から見た雲井遺跡と六甲山	4	写真5	土壤水洗・選別作業風景	9
写真2	地下室内の状況	7	写真6	空中写真撮影作業風景	9
写真3	国際マーケットの名残をとどめる建物	7	写真7	遺物整理作業風景	10
写真4	人力掘削作業風景	9	写真8	遺物実測作業風景	10

## 表 目 次

表1	雲井遺跡発掘調査一覧	6	表4	遺物観察表3	47
表2	遺物観察表1	45	表5	遺物観察表4	48
表3	遺物観察表2	46			

## カラー写真図版目次

カラー図版1	1. 第1遺構面全景(西北から)		カラー図版2	1. 第3遺構面SD201(西北から)	
	2. 第2遺構面全景(北から)			2. SB202出土玉未製品	
				3. SB202出土碧玉剥片	
				4. SB202出土石針・未製品	
				5. SB202出土珪化木剥片	

## 写真図版目次

図版1	1. 第1遺構面全景(西北から)		図版6	1. 4区SR405第2層出土杓子形土製品	
	2. 第1遺構面全景(南から)			2. 4区SR405第3層出土土器集合	
	3. SB101(西から)			3. 4区SR405第3層b出土土器	
図版2	1. 第2遺構面全景(北から)			4. 4区SR405第3層c出土土器	
	2. 第2遺構面全景(北西から)			5. 4区SR405出土石斧	
	3. SB201(南東から)		図版7	1. 4区SR405出土石鏃	
図版3	1. SB202(西から)			2. 4区SR405出土石庖丁	
	2. SB203(南東から)		図版8	1. 1区SR202出土土器集合	
図版4	1. 三角刺突文 広口壺 口縁部内面			2. 第4遺構面流路内出土石錐	
	2. 三角刺突文 広口壺 口縁部側面			3. 1区SR202・401出土石鏃	
	3. SK201出土土器		図版9	1. 第4遺構面流路内出土石庖丁	
	4. SK201出土石庖丁			2. 第4遺構面流路内出土スクレーパー	
	5. 2区SR303出土水差形土器		図版10	1. 三角刺突文土器①	
	6. 2区SR303出土石鏃			2. 三角刺突文土器②	
図版5	1. 2区SR303出土土器①			3. 三角刺突文土器③	
	2. 2区SR303出土土器②			4. 4区SR504出土土器	
	3. 2区SR303出土石庖丁				

# 第1章 はじめに

## 第1節 遺跡の立地と歴史的環境

### (1) 遺跡の立地

雲井遺跡は、六甲山南麓の平野部に立地している。六甲山南麓における平野部は、南北方向には約2km前後と狭く、東西方向に細長く広がっている。南北方向の比高差は大きく、山裾の段丘面と海岸部では、約50m～100mの差がある。このため、扇状地を経て沖積地へと流れ出た中小の河川は、一気に大阪湾へと注がれている。洪水の際に流路の両側に自然堤防と呼ばれる微高地を形成していく。雲井遺跡は、六甲山系から流れ出た旧生田川などの河川により形成された複合扇状地の末端に近い緩斜面地（北限では標高20m、南限では標高10m）に立地している。現状では、南北約500m、東西約700mの範囲に広がっていると推定されており、現在の住居表示では、東は中央区旭通2丁目、西は中央区雲井通7丁目、北は中央区琴ノ緒町1丁目～5丁目、および二宮町2丁目～4丁目の南側にかけて所在している。

六甲山地周辺の基盤層は、火山活動に伴う地殻変動によりつくりだされており、花崗岩質マグマに由來した花崗岩類で構成されている。花崗岩が風化すると、真砂土と呼ばれる粘土質と粗い粒子の混じった山砂になり、流出しやすく、土砂災害を何度も繰り返す地域である。

以上のように、雲井遺跡が位置している六甲山南麓は、温暖な気候に恵まれ、風光明媚な場所であるが、常に、土砂災害や地震などの自然災害の脅威に直面している地域でもある。

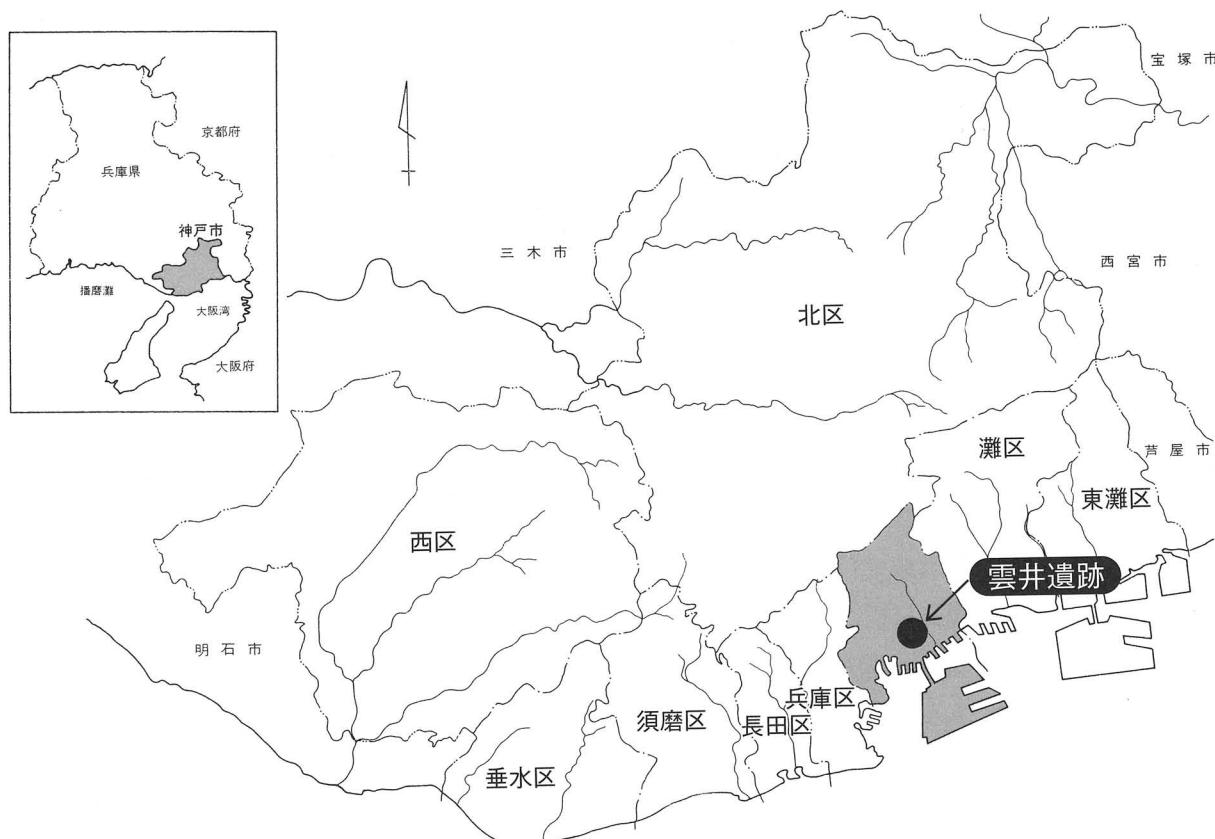


Fig.1 雲井遺跡の位置

## (2) 遺跡の歴史的環境

### 縄文時代

熊内遺跡では、早期前半の大川式に属する竪穴住居が2棟検出されており、ネガティブな押型文土器と石鏃・石錐・削器などが出土している。また、中期末の北白川C式～後期中葉の元住吉山I式にかけての遺構・遺物が検出されている。宇治川南遺跡では、関東地方の堀ノ内I・II式（後期初頭）や東北地方の大洞式（晩期）の特徴を持つ土器をはじめ、早期前半～晩期の土器が出土している。また、土偶や石棒、大分県姫島産と考えられる黒曜石などが出土している。生田遺跡では、後期後葉の一乗寺K式、元住吉山I～II式、後期末葉の宮滝式の土坑・落ち込みが検出され、縄文土器・石器や日本海側からの搬入品と考えられる珪質頁岩製石鏃、新潟県糸魚川流域で産出されたと考えられるヒスイ製の小玉、東海地方を中心に分布する「今朝平タイプ」の土偶などが出土している。二宮東遺跡では、早期前半の神並上層式の土坑・ピット・落ち込みが検出され、押型文土器・石器が出土している。また、楠・荒田町遺跡では、後期の宮滝式に属する土坑が検出されている。

### 弥生時代

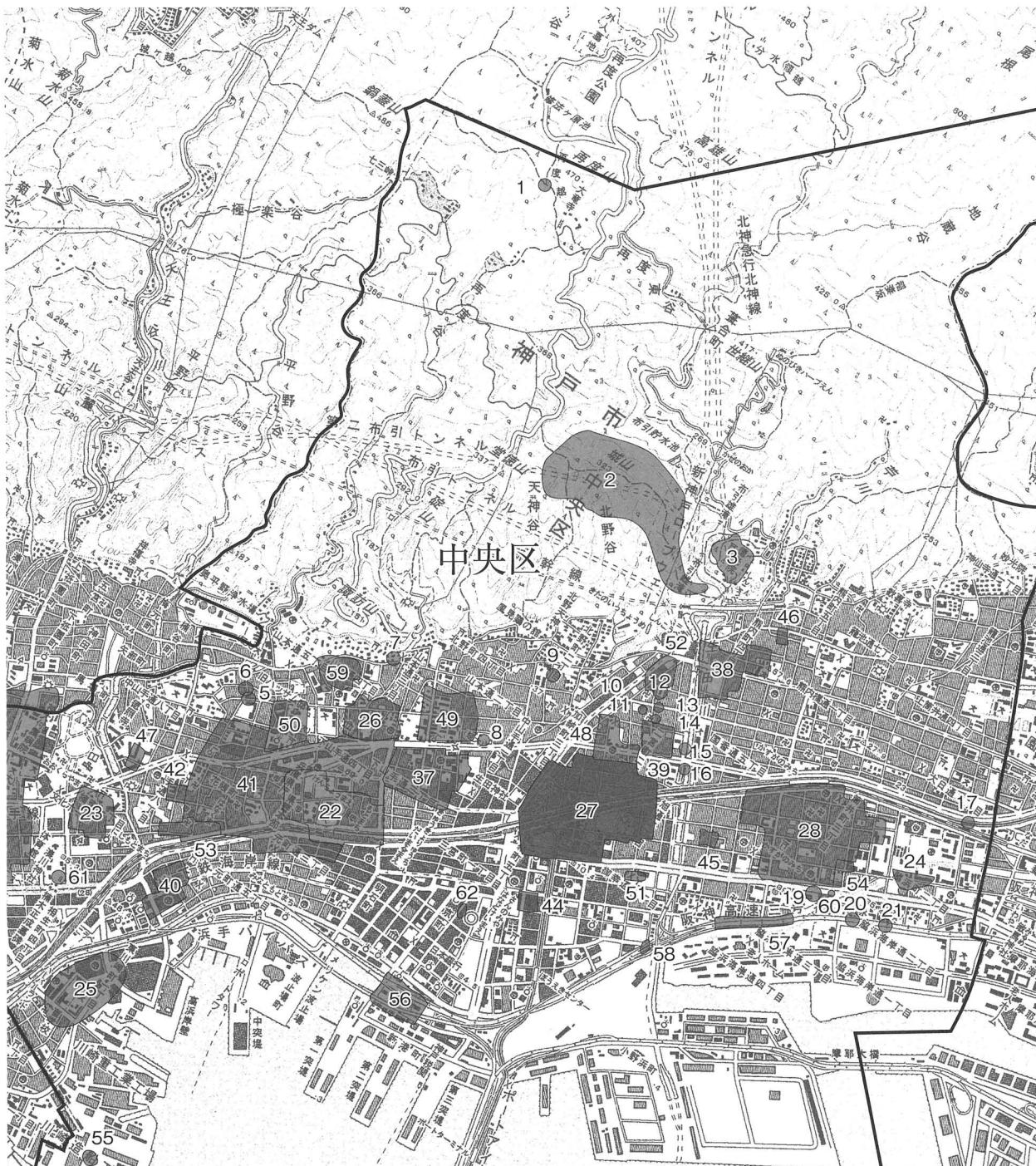
宇治川南遺跡では、旧河道内から、前期前半～前期後半の遺物が出土している。楠・荒田町遺跡では、前期末～中期初頭の貯蔵穴をはじめ、中期前半～中期中葉の竪穴住居、中期後半の掘立柱建物、中期後半の方形周溝墓・木棺墓などが検出されている。貯蔵穴は40基以上検出されている。生田遺跡では、中期中葉の竪穴住居と中期後葉の方形周溝墓、後期の土坑などが検出された。熊内遺跡では、後期の竪穴住居・掘立柱建物を囲むように、二重の環濠が検出され、住居の埋土より銅鏃が出土している。また、後期の壺棺が検出されている。日暮遺跡では、後期末の竪穴住居が検出されている。中山手遺跡では、後期末の土坑・ピット・溝が検出され、弥生土器が出土している。旧三ノ宮駅構内遺跡は、昭和3（1928）年の旧三ノ宮駅（現在の元町駅周辺）解体工事中に、福原潜次郎によって発見された。発掘調査で、弥生時代の土坑が検出されている。

### 古墳時代

熊内遺跡では、前期の竪穴住居と後期の木棺墓と土壙墓が検出されている。宇治川南遺跡では、前期後半の溝が検出されている。日暮遺跡では、前期と中期の竪穴住居が検出されている。生田遺跡では、中期中頃～後期の竪穴住居、後期の掘立柱建物、後期の溝などが検出された。竪穴住居や柱穴などから、滑石製の紡錘車・有孔円板・白玉が出土しており、同時期の祭祀に関するものと考えられている。楠・荒田町遺跡では、後期の竪穴住居と掘立柱建物が検出されている。二宮東遺跡では、後期の流路と柱穴が検出されている。下山手遺跡では、後期頃の遺構面で掘立柱建物が検出されている。中山手西遺跡では、後期頃と考えられる掘立柱建物が検出されている。中宮黄金塚古墳は、直径約10mの円墳で、埋葬施設が全長4.5mの南南東方向に開口する横穴式石室である。割塚通1丁目にあった割塚古墳は、横穴式石室をもつ後期の円墳である。

### 飛鳥時代～奈良時代

二宮遺跡では、飛鳥時代の竪穴住居・掘立柱建物・旧河道とともに、鍛冶炉が、数か所で検出された。下山手北遺跡では、飛鳥時代前半の柱掘形の規模が直径0.5～1m前後で、大きいものは1.3mを測る掘立



1 大竜寺梵字石	13 中央区No.13	25 東川崎町	45 吾妻	56 海軍操練所跡
2 滝山城跡	14 中央区No.14	26 中山手	46 中央区No.46	57 神戸臨港鉄道南本町架道橋台跡
3 布引丸山	15 中央区No.15	27 雲井	47 下山手北	58 神戸臨港鉄道小野浜町下水道跡
5 中宮古墳	16 中央区No.16	28 日暮	48 二宮	59 城ヶ口
6 中宮黄金塚古墳	17 割塚古墳	37 生田	49 花隈城向城跡	60 神戸臨港鉄道脇浜町隧道跡
7 中央区No.7	19 中央区No.19	38 熊内	50 中山手西	61 楠木正成墓碑
8 中央区No.8	20 脇浜西	39 二宮東	51 小野柄	62 旧神戸外国人居留地
9 三本松古墳	21 中央区No.21	40 元町	52 生田町古墳群	
10 中央区No.10	22 旧三の宮駅構内	41 花隈城跡	53 北長狭	
11 中央区No.11	23 宇治川南	42 下山手	54 脇浜	
12 中央区No.12	24 脇浜町	44 磯上	55 湊川砲台跡	

fig.2 雲井遺跡周辺の遺跡 (S=1:50,000)

※番号については、神戸市教育委員会編「神戸市埋蔵文化財分布図」2010に準じている。

柱建物群が検出されている。中には、総柱建物もある。日暮遺跡では、飛鳥時代の掘立柱建物をはじめ、土坑・ピットが検出されている。奈良時代の遺跡としては、二宮遺跡で、流路内から、奈良時代の土器とともに、土馬が出土している。その他、奈良時代の遺跡としては、旧三宮駅構内遺跡、日暮遺跡、中山手西遺跡、楠・荒田町遺跡などがある。

#### 平安時代以降

平安時代の遺跡としては、下山手北遺跡で、平安時代前期の園池と掘立柱建物が検出されている。皇朝十二銭の一つである「長年大宝」(初鋳年:848年)が計59枚出土しており、その内の39枚は数珠繋ぎにした「差銭」の状態で検出された。楠・荒田町遺跡では、平安時代末頃の壕が検出され、福原遷都時の仮御所とされた平頼盛邸に関連すると推定されている。青白磁・青磁・白磁などの貿易陶磁をはじめ、京都系土師器・瓦器・瓦・須恵器・陶磁器などが出土している。日暮遺跡では、平安時代の掘立柱建物・土坑・溝・地鎮遺構が検出された。また、生田遺跡では、平安時代の掘立柱建物が、吾妻遺跡では、平安時代の土壙墓が検出されている。戦国時代には、天正年間に織田信長の命令により、荒木村重が築城した花熊(花隈)城がある。周辺の発掘調査で、外堀の一部と考えられる堀状遺構を検出した。下山手遺跡では、幕末～明治時代にかけての遺構・遺物が検出された。また、神戸臨海鉄道(臨港線)の敷地内で架道橋台が工事中に発見され、発掘調査の結果、明治40(1907)年までに築造されたレンガ造の重力式架道橋台であることが明らかになった。平成21年度に神戸市危機管理センター建設に伴い発見された、旧神戸外国人居留地遺跡においては、レンガを伴う建物が検出された。

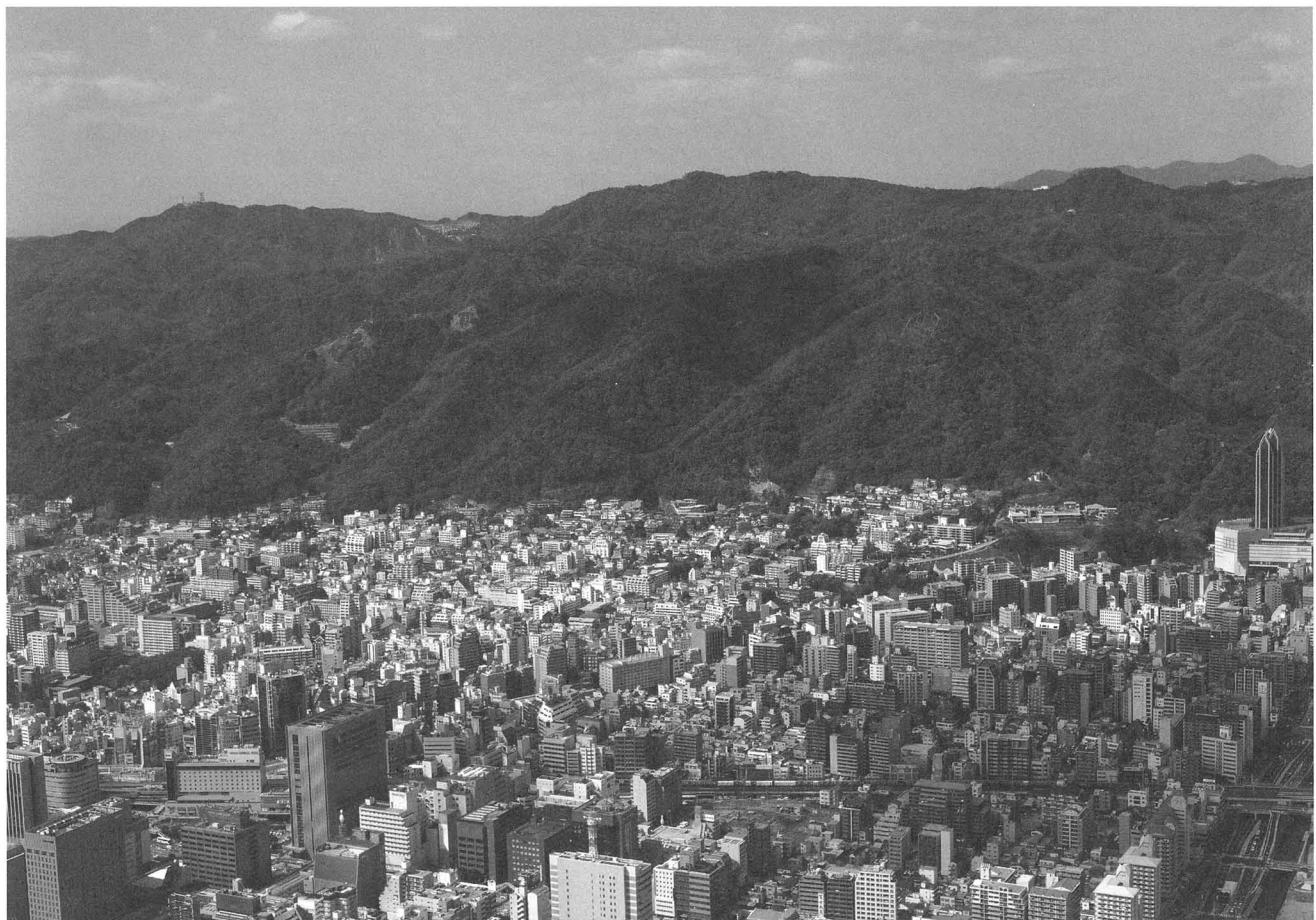


写真1 空から見た雲井遺跡と六甲山

## 第2節 雲井遺跡の既往の調査

雲井遺跡は、昭和62年3月に、雲井通6丁目地区市街地再開発事業における再開発ビル建設に先立ち、試掘調査を実施したところ、弥生時代中期の土器が出土し、新たな埋蔵文化財包蔵地として、周知されることとなった。雲井遺跡では、現在までに32次におよぶ発掘調査が実施されており（表1参照）、縄文時代早期～中世にかけての遺構・遺物が検出されている。既往の調査については、「平成20年度 雲井遺跡第28次発掘調査報告書」に詳しく掲載しているため、第28次調査以降の調査について記述する。

第29次調査は、第28・33次調査地の西隣の街区にあたる。狭小な面積と後世の搅乱により遺構面の残存状況は良くなかったが、弥生時代中期頃の溝が検出されており、遺構の広がりが西にも続くことが確認できた。また、下層断ち割りにより、砂礫層が存在していることから、大きな流路により縄文時代の遺構面は無いことが確認されている。

第30次調査は、第28・33次調査地の東隣の街区にあたる。古墳時代後期と弥生時代中期後半の遺構面が確認された。第1次調査で発見された周溝墓を営む集落の存在は不明であったが、同時期の竪穴住居が発見されたことが注目される。

第31次調査は、当該地区の2ブロック東の街区の南端部に位置した地点である。個人住宅に伴う調査であり、狭小な調査範囲であるため、調査範囲の北半で古墳時代後期のピット1基と溝1条を検出したのみである。

第32次調査は、二宮商店街に位置する地点である。6面以上の遺構面が確認された。特に、縄文時代中期～後期にかけての遺構と遺物が多く出土しており、同時期の中心が当地点であったものと考えられる。

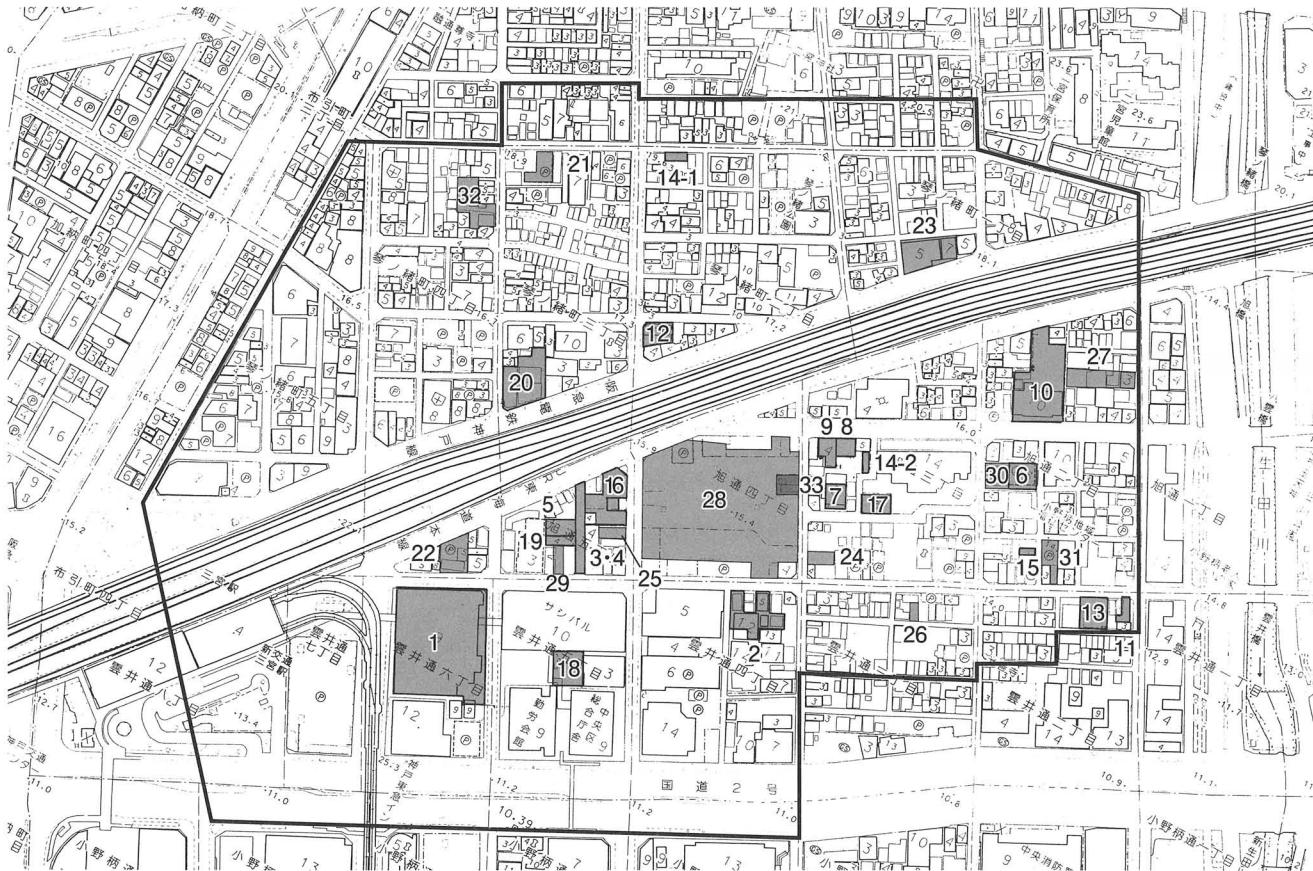


fig.3 雲井遺跡の調査地点位置図 (S=1 : 2,500)

次数	年度	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査主体	調査内容
1	S62	870602~880209	4,200	神戸市教育委員会	縄文時代前期の炉跡・集石遺構、縄文時代晚期~弥生時代前期の土坑・柱穴、弥生時代中期の周溝墓群・木棺墓
2	H元	890808~891014	947	雲井遺跡調査団	縄文時代後期~弥生時代前期の土坑・ピット、古墳時代の流路
3	H3	910401~910419	80	神戸市教育委員会	縄文時代早期の土器
4	H3	910722~911127	960	神戸市教育委員会	縄文時代早期の集石土坑・土坑、弥生時代前期後半の土坑・溝・ピット
5	H4	920415~920427	83	神戸市教育委員会	縄文土器、弥生時代の溝、中世の土坑・ピット
6	H6	940423~940604	268	(財)神戸市スポーツ教育公社	弥生時代中期の溝・流路、古墳時代後期の溝・ピット・噴砂
7	H7・8	960308~960408	288	神戸市教育委員会	縄文時代中期~後期の土坑、弥生時代前期の溝・土坑、弥生時代中期の掘立柱建物・溝、古墳時代前期の溝
8	H8	961210~970120	170	神戸市教育委員会	弥生時代前期後半の溝、古墳時代後期~奈良時代の柱穴
9	H8・H9	970227~970404	150	神戸市教育委員会	縄文時代中期~弥生時代の溝、弥生時代前期の溝、弥生時代中期の土坑、鎌倉時代の溝
10	H8・H9	970317~970526	800	神戸市教育委員会	古墳時代後期の竪穴住居・掘立柱建物・溝・ピット
11	H12	001011~001024	60	神戸市教育委員会	弥生時代中期の溝・ピット
12	H12・13	010326~010410	172	神戸市教育委員会	弥生時代中期の竪穴住居、古墳時代後期の竪穴住居
13	H13	020226~020318	145	神戸市教育委員会	古墳時代後期の溝
14-1	H14	020722~020917	320	神戸市教育委員会	弥生時代前期の祭祀遺構(溝)
14-2	H14	020722~020917	130	神戸市教育委員会	弥生時代中期の竪穴住居、平安時代の掘立柱建物・集石遺構
15	H14	020725~020802	15	神戸市教育委員会	遺構なし、土器の小片が出土
16-1	H14	020828~020909	55	神戸市教育委員会	縄文時代の土器・サヌカイト片、弥生時代前期の土坑・ピット
16-2	H14	021118~021205	400	神戸市教育委員会	弥生時代前期の土坑、弥生時代中期の方形周溝墓、平安時代の掘立柱建物
17	H14・15	030303~030414	212	神戸市教育委員会	弥生時代前期の土坑・ピット、古墳時代後期のピット
18	H16	040614~040618	100	神戸市教育委員会	基礎部分のみ発掘調査 遺構なし、弥生土器の小片が出土
19	H16	040624~040702	60	神戸市教育委員会	弥生時代前期の土坑、弥生時代中期後半の方形周溝墓、古墳時代後期の柱穴
20	H16・17	050325~050425	440	神戸市教育委員会	縄文時代晚期の土坑、古墳時代後期の掘立柱建物、時期不明の竪穴住居
21	H17	050622~050706	115	神戸市教育委員会	弥生時代中期~後期の竪穴住居・土坑・溝・柱穴
22	H17	051003~051026	249	神戸市教育委員会	縄文時代中期末~後期の流路、弥生時代前期の溝・土坑・ピット
23	H17	051206~051216	160	神戸市教育委員会	弥生時代後期の溝・土坑・ピット、古墳時代後期の竪穴住居・落ち込み
24	H18	061020~061110	80	神戸市教育委員会	鎌倉時代前半の溝
25	H18	061206~070205	200	神戸市教育委員会	縄文時代早期の集石土坑、弥生時代前期の土坑
26	H18	070123~070130	45	神戸市教育委員会	古墳時代後期の溝・土坑・落ち込み・ピット
27	H20	080519~080606	135	神戸市教育委員会	弥生時代中期頃の土坑・溝・ピット、奈良時代以降の溝
28	H20	080902~090331	7,085	神戸市教育委員会	縄文時代早期の遺物、縄文時代後期の土坑・遺物、弥生時代中期初頭の貯蔵穴、中期前半の竪穴建物群と玉作り関連遺物、武器形青銅器鋲型、磨製石剣
29	H20	081002~081015	78	神戸市教育委員会	弥生時代中期頃の溝
30	H20	081208~090323	200	神戸市教育委員会	弥生時代中期後半の竪穴住居・柱穴群・溝、古墳時代後期の鋤溝・柱穴
31	H21	090812~090813	25	神戸市教育委員会	古墳時代後期のピット・溝
32	H21	100308~100326	135	神戸市教育委員会	縄文時代後期の土坑・ピット・流路・中世の流路

表1 雲井遺跡発掘調査一覧

### 第3節 調査に至る経緯と経過

#### (1) 調査に至る経緯

旭通4丁目地区では、通称「国際マーケット」と呼ばれる戦後の闇市から形成された商店街の近代化を図るため、昭和56年7月に旭通4丁目地区市街地再開発準備組合（以下、市街地再開発準備組合と呼称する）が設立された。その後、バブル経済の崩壊によるデベロッパーの撤退や震災等により事業化に長時間を要してきたが、平成19年8月に都市計画決定がなされた。

当該地は、雲井遺跡の範囲内にあるため、昭和63年10月と平成15年10月に埋蔵文化財試掘調査を実施した。その結果、弥生時代～中世の遺物が確認されていたため、調査に際し、事業者である市街地再開発準備組合（平成21年1月、再開発組合として認可公告）と埋蔵文化財発掘調査にかかる契約を締結した。費用についても事業者の協力を得た。発掘調査の一部の作業については、神戸市教育委員会が主体となる発掘調査に、提供する形態となった。平成20年9月より7,082m<sup>2</sup>を対象に雲井遺跡第28次発掘調査が実施され、平成21年3月に現地での調査を終了した。今回の調査は、同じ街区の中で取り残されていた地区について、既存建物の解体後、発掘調査を開始することとなった。事業地の周辺は、すでに第28次調査の終了に伴い建設工事が開始されており、調査範囲の周囲5mを残して、掘削工事が行なわれるのと同時に発掘調査を行なった。

#### (2) 発掘調査の経過

調査地は、既存建物が残されていたため、再開発の施工者により、家屋の解体と地下構造物の撤去作業が行なわれることとなった。既存家屋は2棟あり、南側の建物床面には、地下室が設けられていたため、解体前に内部調査を行なった。床面には、木製の蓋が被されていたが、内部には垂直に降りる鉄製の梯子が造りつけられていた。内部は2畳ほどの広さがあり、成人が立つことも出来る空間が設けられている。周囲の壁は鉄筋コンクリート製であり、換気口が設けられている。第28次調査時には簡易防空壕が多く見られたが、構造からは同類の簡易な防空壕とは考えられないが、頑丈に作られた防空壕を地下倉庫として転用した可能性もある。その北側に隣接して立っている建物は、かつて国際マーケットとして商店街が形成されていた時代の建物である。間口一間の細長い2階建物構造である。

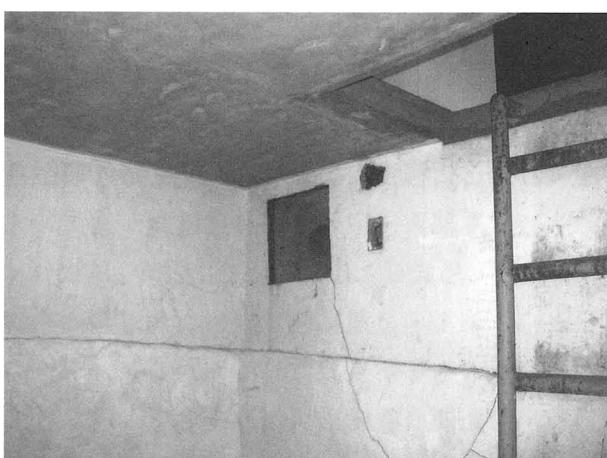


写真2 地下室内の状況



写真3 国際マーケットの名残をとどめる建物



fig.4 調査範囲と調査区の設定 ( $S=1:1,000$ )

今回の調査は、事業、調査対象地共に第28次調査と同じであるが、年度を隔てて調査を行なうために、次数を変えて第33次調査として実施することとした。今回の調査地は、事業地の東端中央部に位置しており、南側が第28次調査の3区に接し、西を4区南、北を4区北に接する地区である。

施工上の問題から、既存建物と地下構造物の除却作業終了後、事業地の東辺にケーシングオーガによりH鋼杭の打ち込み作業が行われた。その後、発掘調査作業業者による重機により、盛土や搅乱の掘削作業を行った。人力による遺物包含層の掘削、遺構検出、遺構掘削作業を実施した。重機による掘削土は、施工業者により場外搬出した。また、人力掘削により生じた残土については、その都度、調査対象地周辺の施工地区に落としこみ、基礎掘削作業の一環として施工業者が残土処分を行なった。

遺構の記録作業については、測量業者により基準点・水準の取り付けと、弥生時代の遺構面に関しては、ラフタークレーンによる空中写真撮影を行い、第28次調査地とのモザイク作業を行なった。遺構平面図 ( $S = 1/20$ ) については、人による図化作業を行った。写真撮影は大型カメラと小型カメラ・デジタルカメラを使用した。遺構面の名称については、遺構面ごとに、上層から検出した順に、第1遺構面、第2遺構面としている。第28次調査では、第1遺構面が中世、第2遺構面が奈良時代、第3遺構面が古墳時代前期、第4遺構面が弥生時代中期、第5遺構面が弥生時代前期末～中期、第6遺構面が縄文時代後期、第7遺構面と第8遺構面を縄文時代早期（神宮寺式～神並上層式期）としていた。しかしながら、本調査地においては、第28次調査における4区の調査成果から、第1・2遺構面は削平されており、第5遺構面より下層については、縄文時代の遺構、遺物は存在しないことが確認されていたことから、第28次調査の遺構面名や遺構名の付け方を踏襲せず、新たに検出した順に遺構面名と遺構名をつけた。

### (3) 調査日誌抄

平成22年5月11日 既存地下施設の事前視察

5月14日 既存地下施設の除却工事立会

5月27日 発掘資材搬入

5月28日 発掘調査開始事前立会

5月31日 重機掘削開始

6月1日 重機掘削終了・人力掘削開始

6月2日 第1遺構面精査

測量杭打設

6月3日 第1遺構面遺構掘削及び記録作業

6月4日 第1遺構面全景写真撮影

6月7日 第1遺構面平面図化終了

第2遺構面へ向け人力掘削

6月8日 第2遺構面検出・遺構検出作業

遺構掘削開始

6月9日 第2遺構面遺構掘削及び記録作業

6月10日 竪穴建物掘削開始

竪穴建物内の土壤水洗・選別作業開始

6月11日 竪穴建物内の土壤水洗・選別作業続行

6月14日 第2遺構面平面図化作業

遺構断面図化・写真撮影

6月15日 雨天のため、遺構保護作業

午前は、土壤水洗・選別作業

午後、降雨激しいため作業中止

6月16日 前日の降雨の復旧作業と

明日の全体撮影の清掃開始

6月17日 第2遺構面全景写真撮影

空中写真撮影作業

6月18日 最終断ち割り作業

土壤水洗・選別作業終了

現場発掘用資材撤収

発掘調査完了立会

6月21日 埋蔵文化財センターへ移動して

整理作業開始



写真4 人力掘削作業風景



写真5 土壤水洗・選別作業風景



写真6 空中写真撮影作業風景

#### (4) 発掘調査組織

発掘調査は、下記の調査組織によって実施した。

##### 調査関係者組織表（平成22年度）

###### 神戸市文化財保護審議会（史跡・考古資料担当）

工 楽 善 通	大阪府立狭山池博物館館長
和 田 晴 吾	立命館大学文学部教授

###### 教育委員会事務局

教 育 長	橋口秀志
社会教育部長	大寺直秀
参事(文化財課長事務取扱)	柏木一孝
社会教育部主幹	渡辺伸行
埋蔵文化財指導係長	丸山 潔
埋蔵文化財調査係長	千種 浩
文化財課主査	丹治康明・安田 滋・斎木 巍
事務担当学芸員	佐伯二郎・中谷 正
調査担当学芸員	川上厚志
保存科学担当学芸員	中村大介
遺物整理担当学芸員	西岡誠司

##### 整理作業

出土遺物の整理作業は、神戸市埋蔵文化財センターで実施した。

平成22年内に、水洗作業、ネーミング作業、接合・復元作業、金属器の保存処理、遺物実測、製図、遺物写真撮影、原稿作成などを実施した。



写真7 遺物整理作業風景

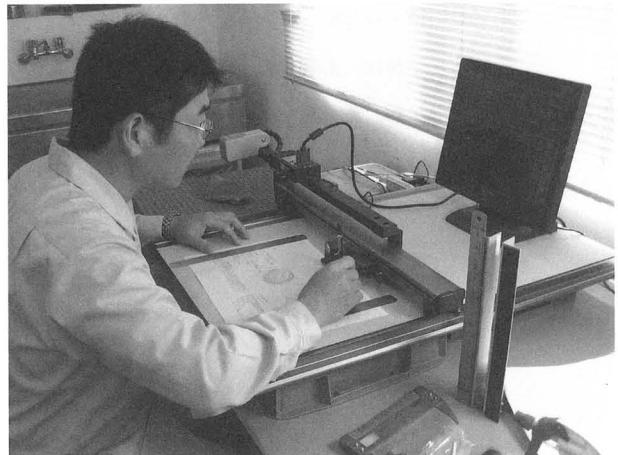


写真8 遺物実測作業風景

## 第2章 発掘調査の成果

### 第1節 第1遺構面（弥生時代後期末～古墳時代前期）

#### 第1遺構面の遺構と遺物（第28次調査第3遺構面に相当）

重機により盛り土、搅乱及び埋め土を掘削すると、第1遺構面が検出される。検出作業中には、第28次調査の時にも検出されたように、焼夷弾の痕跡が列状に地面に突き刺さっているのが無数に検出された。おそらく、建物の無い通路や空き地など、直接、投下されたものが着地した場所であり、列状に並んで検出されるところは通路部分であったと考えられる。

第1遺構面は、調査地のほぼ中央付近に近世以降と考えられる圃場に伴う溝と段落ちにより、搅乱が著しい遺構面である。搅乱土層を除却すると面的に削平を受けている中央部分については、第2遺構面と第3遺構面の遺構がすでに見えている状態であった。遺構面の検出レベルは、北側で13.65m、南側で13.30mを測る。

第1遺構面の遺構としては、方形の竪穴建物1棟、土坑、溝、ピットなどを検出した。

土坑は、調査地の北側で3基を検出した。SK101は長軸80cm、幅35cm、検出面からの深さ12cmの楕円形の土坑である。SK102は、南半部が搅乱により削平されているが、長軸90cm、幅50cm、検出面からの深さ19cmの楕円形の土坑である。SK103は、遺構面全体が削平により削られた場所で検出した。長軸60cm、幅45cm、検出面からの深さ2cmの長方形の土坑である。この土坑の中から、1の弥生時代前期の甕の口縁部が出土した。1は、口縁部が外反する甕で、頸部付近の外面に4条のヘラ描沈線文が施されている。

溝は、調査地の北端部のみで検出された。調査地を斜めに北から南に流れる溝で、幅90cm、深さ17cmを測る。断面形状は、幅広の蒲鉾状の断面をしている。埋土は、濁青灰色のマーブル状になった粘質土であり、第1遺構面で検出した溝と土坑の埋土は同様のものであった。

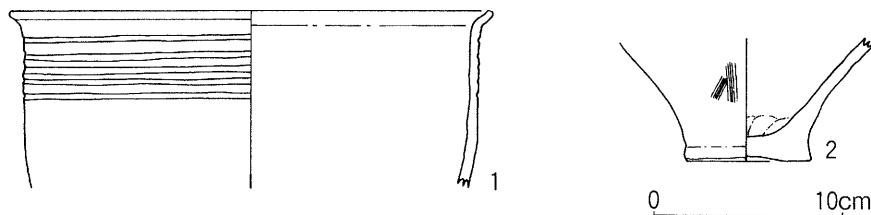


fig.5 SK103・SD101出土遺物

竪穴建物は、第28次調査の4区で検出したSB301の東半分を検出した。今回の調査により、第28次調査成果と照合することにより全体の規模と形状が判明した。南北5.3m、東西4.2mの深さ10～15cmを測る長方形の竪穴建物である。主柱穴は第28次調査SB301で2本、見つかっていたが、今回2本分の柱穴が見つかったことから4本柱であることが判明した。柱間の芯々距離は、南北方向2.2m、東西方向1.5mを測る。この建物の周囲には、幅20～30cm、深さ10～15cmの周壁溝が巡っている。西半に比べ東半は遺構面の面的な高さが保たれていることから、最も残りの良い検出面から、床面の段差は、37cmを測る。

建物内からの出土遺物は、図化できるものは、全て下層の遺構に伴う弥生時代の遺物である。3は広口壺の口縁部である。口縁の見込み部分に櫛の一端を突き刺し中心とし、半円を描く、扇状文が施されている。4は碧玉製品の破碎品である。表面を丁寧に仕上げており、直径4mmの孔が近接して穿たれている。但し、一方は表面が剥離したことにより穿孔しているが、もう一方は途中で穿孔することを中断

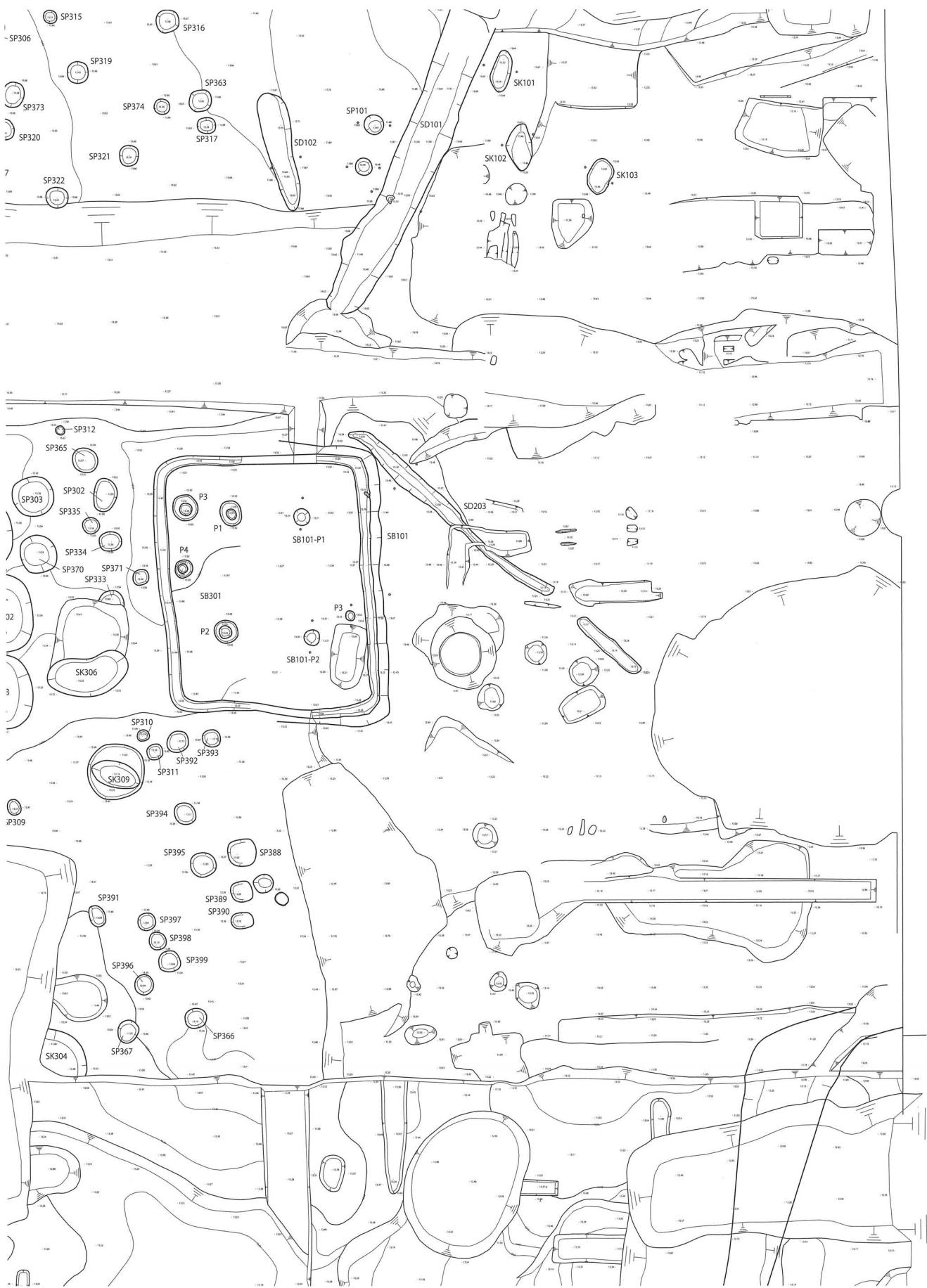


fig.6 第1遺構面・遺構全体図 (S=1:100)

したものと考えられる。全体の形状が把握できないため、種類は判然としないが、勾玉の穿孔部が剥離したものと類推される。5と6は、土製円板である。両方とも焼成前に成形したものではなく、土器を打ち欠いて製作された、いわゆる土器片転用円板である。7は、サヌカイト製の刃器である。三角形で二辺に両側から刃部を作り出している。8は、珪化木を使用して加工されたものである。丁寧に面を作り出しており、鑿のような形状をしているが、素材となっている珪化木が軟弱であるため、その使用方法については不明である。9は、結晶片岩製の石鋸である。長辺5.2cm、最大幅2.5cm、厚み0.4cmを測る。長辺の端面が、摺り切りにより平坦に面を持つ箇所があり、石鋸として使用した際の使用痕と考えられる。碧玉製破碎品や石鋸は、玉作り関連の遺物であり、下層に存在する弥生時代中期の玉作り工房と考えられる建物の遺物が混入したものと考えられる。

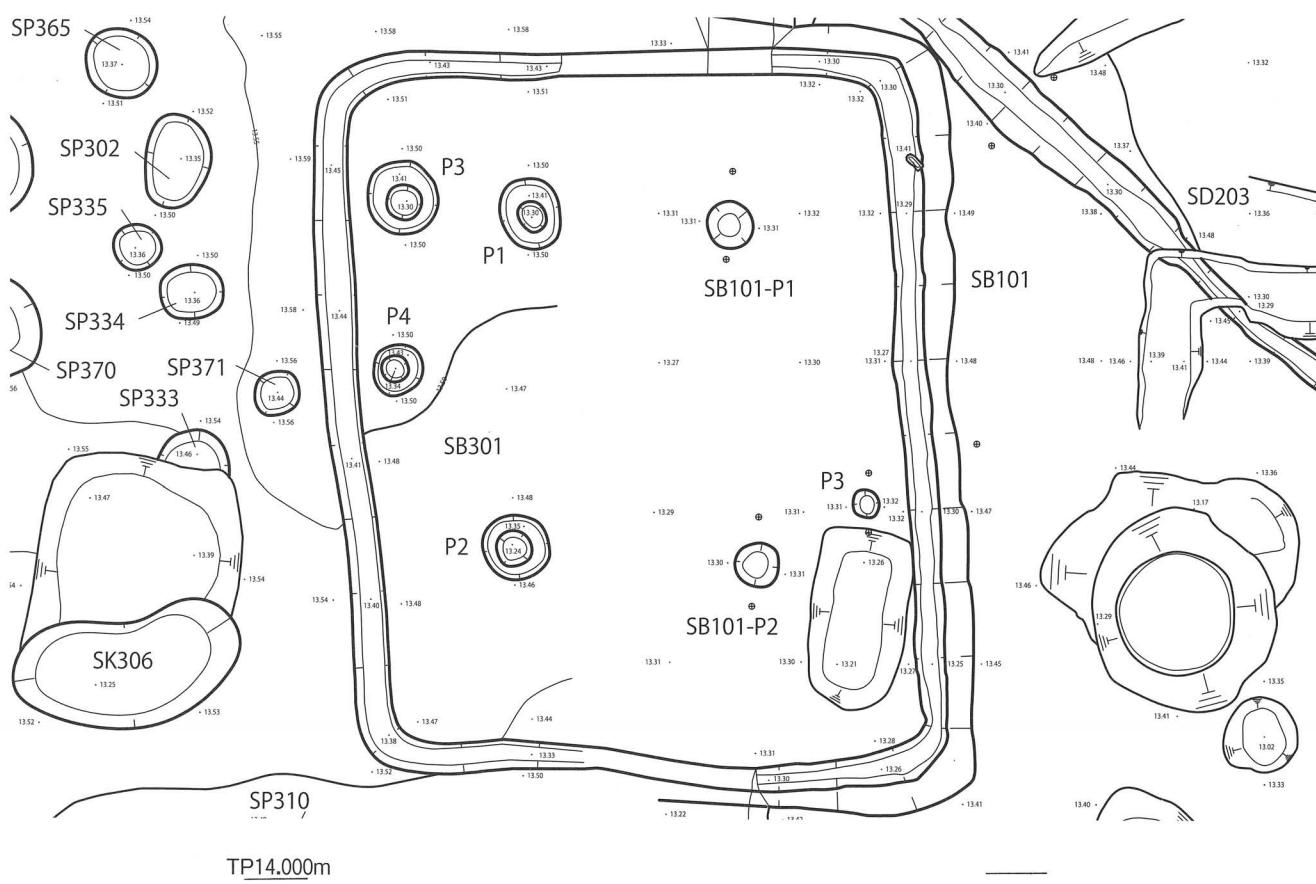


fig.7 SB101遺構図

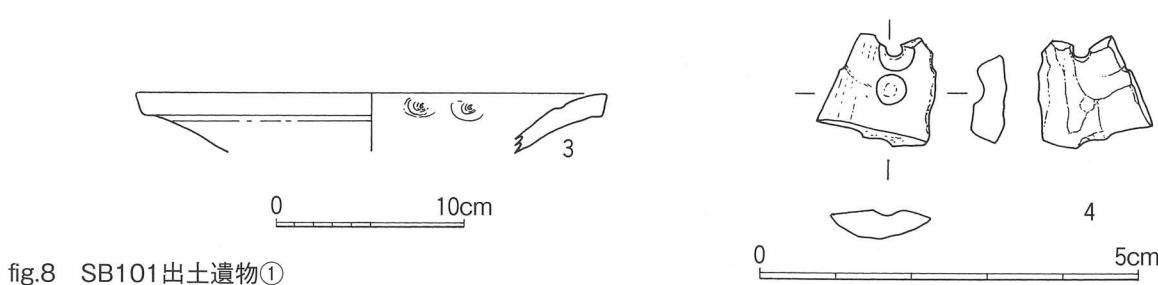


fig.8 SB101出土遺物①

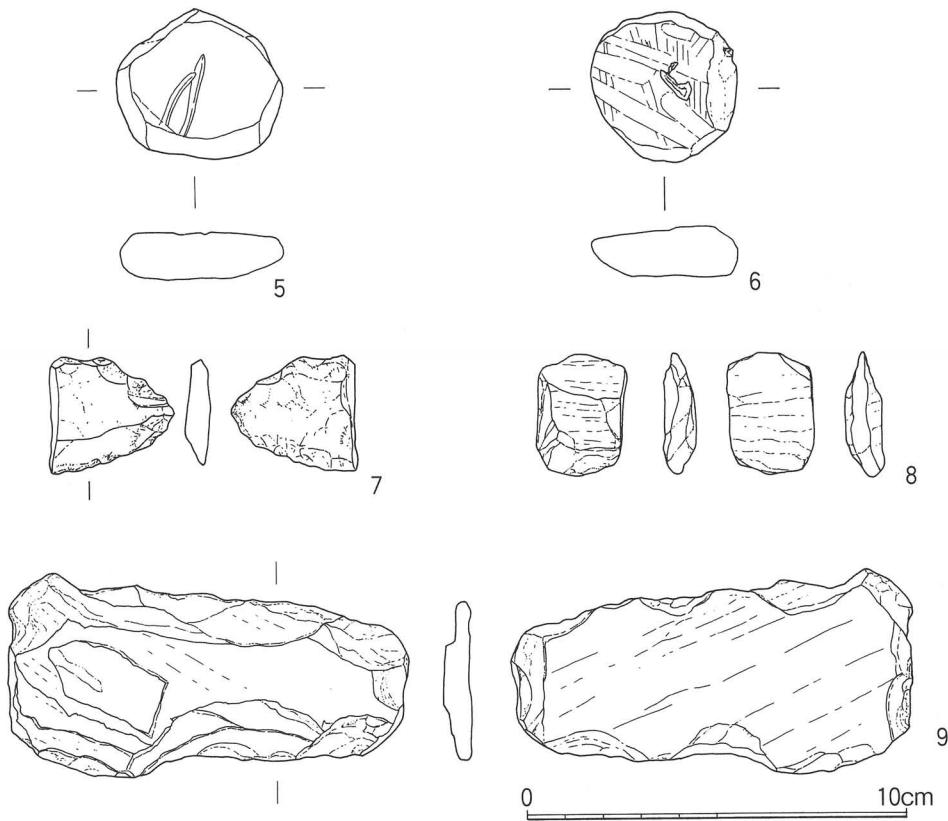


fig.9 SB101出土遺物②

その他の遺物は極小さな遺物が少量出土した程度であり、時期を決定するには、図化したものを基準とせざるを得ないが、第28次調査時に同一面で検出した遺構の時期から、SB101（第28次調査の4区SB301）の時期は、詳細な時期は不明であるが、庄内式併行期（弥生時代後期末～古墳時代前期）のものと考えられる。

## 第2節 第2遺構面（弥生時代中期）

### 第2遺構面の遺構と遺物（第28次調査第4遺構面に相当）

第2遺構面での遺構としては、竪穴建物3棟、土坑、溝、ピットなどを検出している。第28次調査の成果からも判るように、この時期の遺構の密度が最も多く、当遺跡の主体となる成果が得られた。

土坑であるSK201は、北西隅で検出された。東西1.1m、南北1mの円形で、断面観察による掘り込みは、遺構面近くで浅く開き、土坑の真ん中は深く落ち込む形状である。SK201からの出土遺物は、10～15である。10は甕の蓋のつまみ部である。外面は粗くナデ調整し内面はヘラによる調整が施されている。11は、甕の口縁部から体部の破片である。口縁径は復元すると18cm、残存高8cm、推定の全体高は16cm前後と考えられ、小型の甕になるものと考えられる。12は、口縁部に大きな抉りを設けている。この抉りの下には、直径3mmの穿孔がある。施文として3～4条、1条8本の櫛描文が抉りに沿うように施されている。緩やかに波状になっているが、いわゆる櫛描波状文とまでは言いがたい。口縁部は、やや外反気味に開くが、頸部から体部にかけてはやや下膨れた形状をしており、下半部が欠損しているため器種は判然としないが、瓢壺の口頸部である可能性が考えられる。13は、体部上半にあたる肩部の

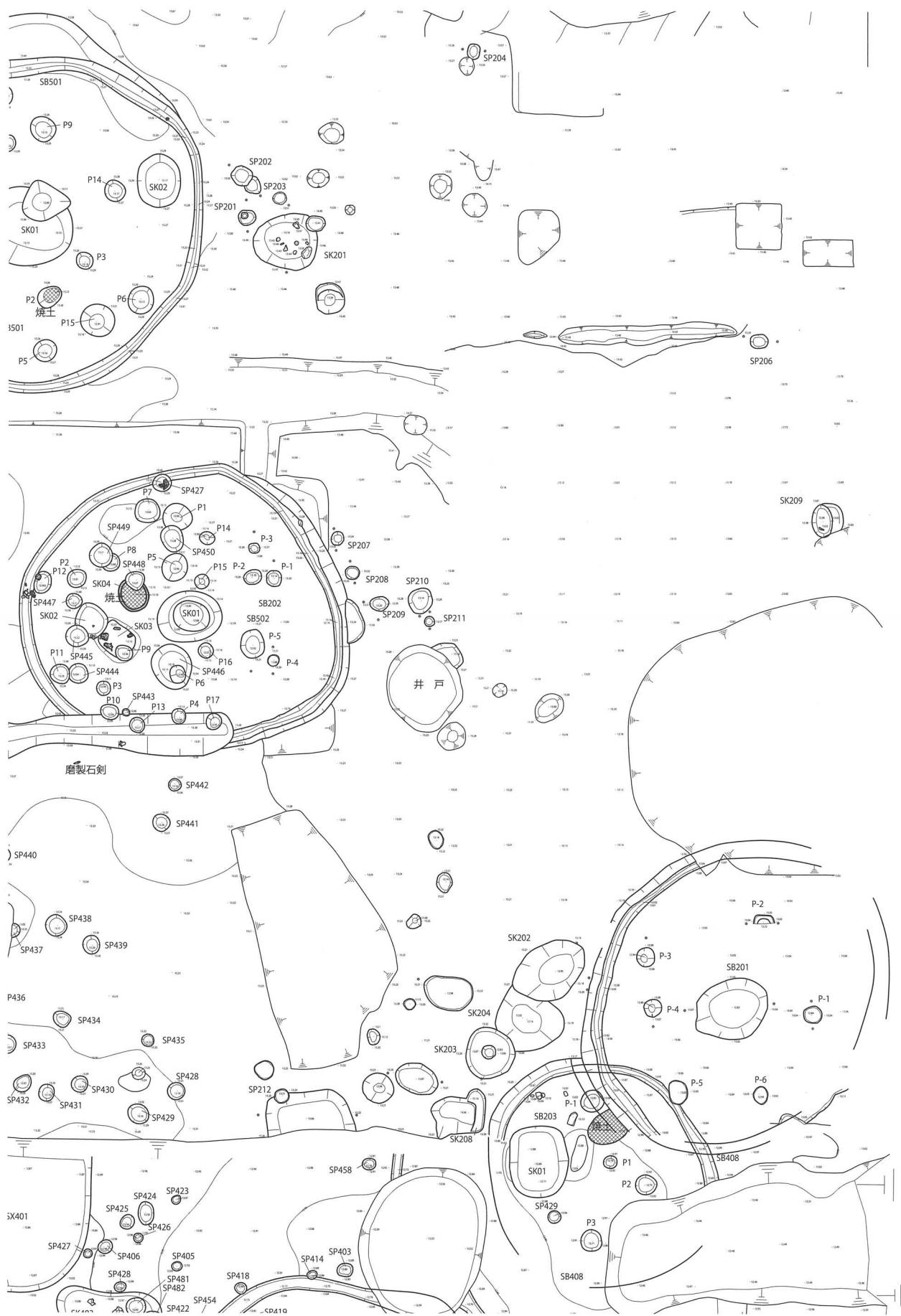


fig.10 第2遺構面・遺構全体図 (S=1: 100)

壺と考えられる。この肩部には、単帯構成の櫛描直線文が3帯巡らされている。14は、5分の1ほどを欠損しているが、残りの良い石庖丁である。真っ直ぐな刃部を設け、半月状に弧を描く背部であることから、弧背直線刃石庖丁である。直径7mmの紐通しの孔が2個が両側面から穿たれている。15は、サヌカイト製の石器である。対称な二側縁から調整を加え、矩形を呈している。刃部は、鋭さが無い事からも楔形石器と考えられる。

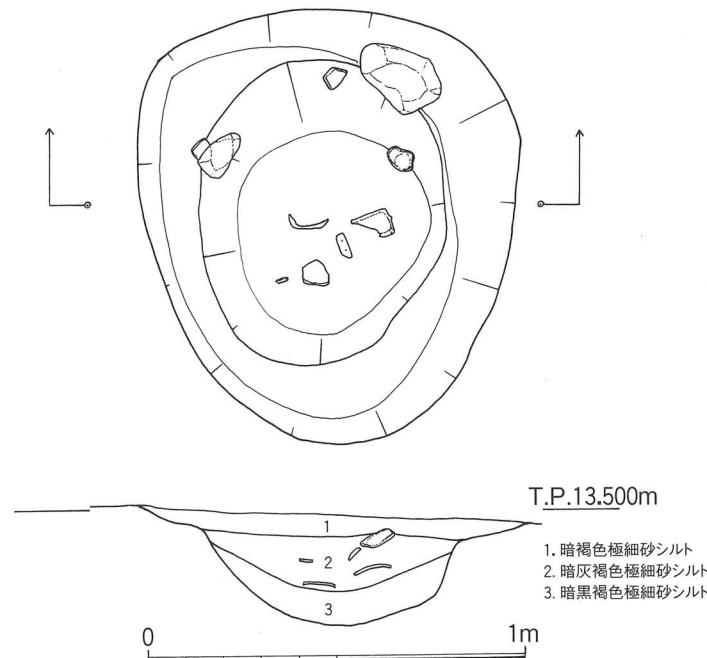


fig.11 SK201遺構図

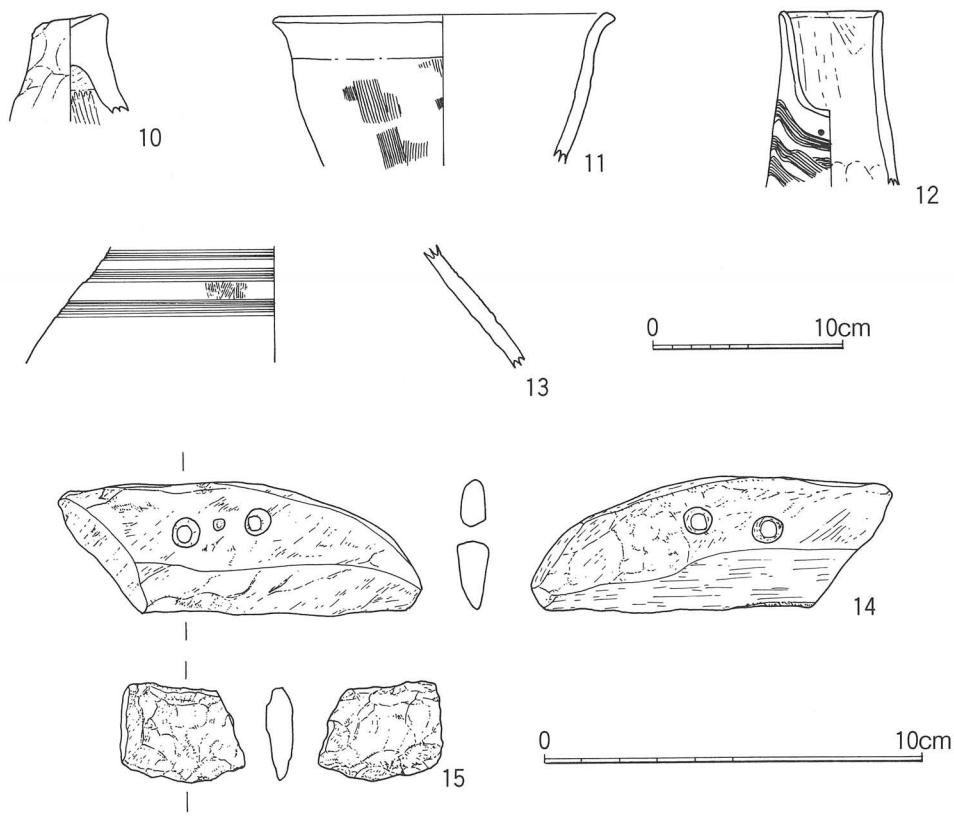


fig.12 SK201 出土遺物

SK202～204は、調査地の南端、後述するSB201の西側に連なって検出した土坑である。SK202は長径1.4m、短径0.95mの楕円形を呈している。検出面から、20cmの深さがあり、全体に緩やか浅い落ち込みのものである。小さな土器片が僅かに出土した。SK203は、直径0.8m、検出面から約10cmで、浅く平らな底の中央に、直径30cm、深さ25cmのピット上の落ち込みがある。遺構内からは、16、17が出土した。16は、復元した口縁径14.4cm、残存高3.6cmの広口壺の口縁部である。17は、器種は不明であるが底部のみの破片である。SK204は、SK202とSK203に切り込まれている。直径1.2m、検出面からの深さが0.3mのすり鉢型の落ち込みである。埋土からは、18が出土している。18は、甕の口縁部である。直に立ち上がる体部に外方に肥厚させ、口縁端部には刻み目が施されている。頸部以下には3条のヘラ描沈線文が描かれている。SK202とSK203は同時存在した可能性があるが、SK204は両者より古いことが遺物からも伺える。

SK209は調査地中央の東端で検出した土坑である。調査地の周囲に打ち込まれたケーシングオーガの作業により、影響を受けて東端と南端が地中に引き込まれたようになっている。もともとは直径0.6mの丸い土坑であったと思われる。埋土からは19、20が出土している。壺の底部と考えられる。

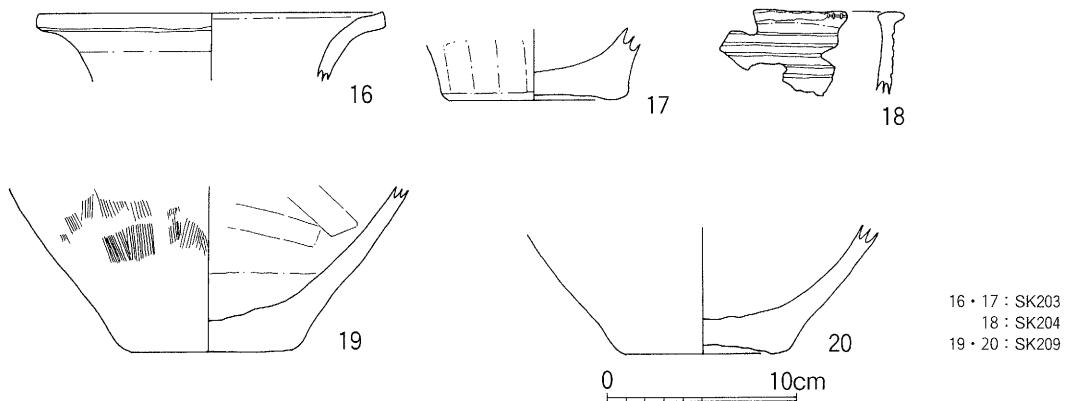


fig.13 SK203・204・209 出土遺物

第28次調査の結果、建物の規模や、建物を使用する用途に必ずしも住居として限定できないため、竪穴住居とはせずに竪穴建物と表記する。竪穴建物は、全部で3棟見つかった。

#### SB201

SB201は調査区の南東隅で検出した。北端部が地下施設に搅乱されており、東は調査区の境となっているため、規模を確定する周壁溝が検出できていない。このため正確な規模や形状は不明である。西半分で検出できた周壁溝から、推定すると長径5.1m以上×短径5.0m以上の東西に長い楕円形もしくは、多角形が考えられる。検出面からの深さ10～15cmを測る。南半分は、第28次調査の3区調査地であるが、調査区の端に当たり、調査当時も全体に黒く、所々に焦土が存在する箇所であり、精査を繰り返し行なったが、周壁溝は検出されなかつたため、その存在を明らかには出来なかつたものである。建物内で検出した遺構は、西側で幅20cm、床面からの深さ10cmの周壁溝と、直径約30cmの柱穴を6か所で検出している。柱が6本であることと、周壁溝に緩い屈曲が2か所存在することから、建物の平面形としては、六角形の可能性がある。建物の中央には、長径1.4m×短径1.1mの楕円形の中央土坑を検出した。深さは床面から20cmを測る。建物内の埋土から、21～23が出土した。21は壺の肩部と考えられる。頸部直下には2条の櫛描直線文が施されている。22は、壺の頸部に3条の突帯が貼り付けられており、突帯には刻み

目が施されている。23は、サヌカイト製の石鏃である。先端と下半部の一部が欠損しているため、規模は判然としないが、基部形状は凹基式である。

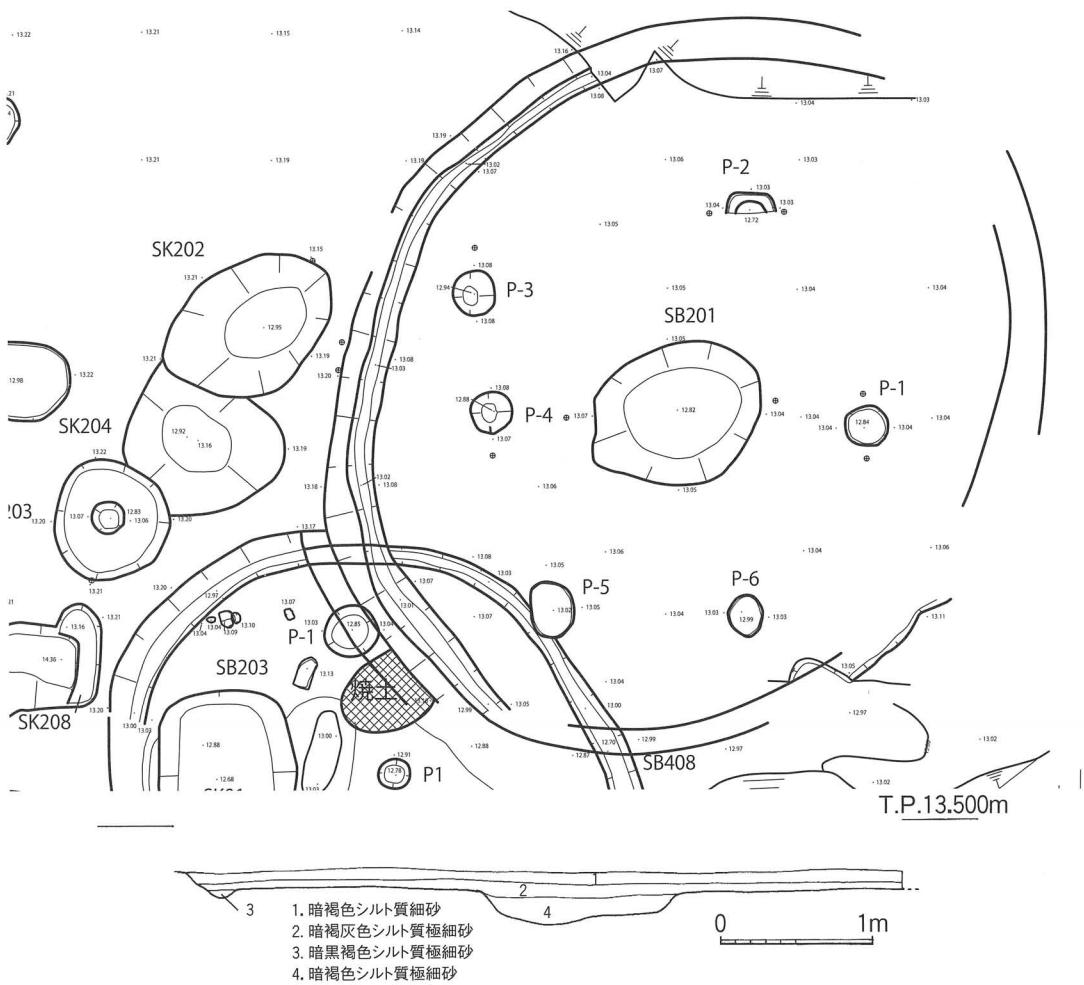


fig.14 SB201遺構図

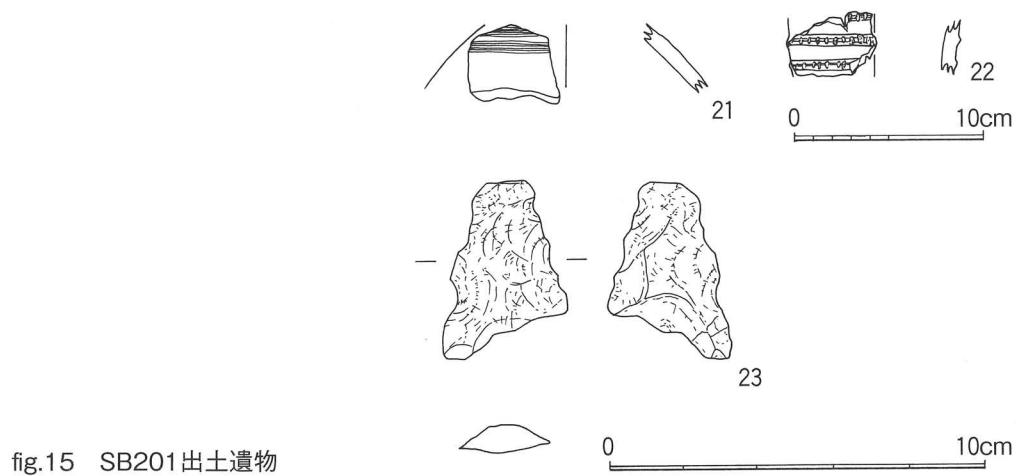


fig.15 SB201出土遺物

## SB202

SB202は、第28次調査4区SB502東半分の続きである。今回の調査により、全体を調査することができた。規模は、南北5.2m、東西6.0m、深さ10~15cmを測る円形の竪穴建物である。床面のピットは、今

回5基検出したので、合計22基が建物内に存在している。主柱穴については、第28次調査4区SB502のP-7、P-2、P-3、P-17と今回検出した第33次調査SB202P-4、P-3の合計6本と考えられる。柱間の芯々距離は、1.6~2.0mを測る。近接してピットが検出されることから建て替えが行われた可能性が高い。第28次調査の調査時には、南端に溝が切りあうように検出されたが、今回の調査でその続きとなる溝を検出することができなかった。建物跡の周辺の精査を行ない、その痕跡を調べたが確認できなかった。

#### 玉作り関連遺物

今回この建物跡を発掘調査するにあたって、第28次調査の調査結果から玉作り関連の遺物が埋土中に含まれていることが、判っていたため、埋土の掘削土については全て、2mmと1mmの篩に2回かけた上で、残った石を選別作業した。その結果、多くの石材が出土した。碧玉製の管玉未製品、多数の碧玉剥片、珪化木製の石針、結晶片岩の石鋸など、玉作りに関連する遺物が出土した。

24、25は、碧玉の荒割材である。24には、小口面に擦切施溝による切断の痕跡が見られる。また、剥離面を擦った痕跡がわずかにみられる。25は、荒割材としては最終段階の円柱状に仕上げる直前までの工程と考えられる。26~28は、管玉の破碎品である。穿孔工程で破碎したもので、打製石針と考えられる擦痕が穿孔内面に見られる。29、30は管玉の表面を円柱状にしていく工程であり、形状としてほぼ整いつつあるものである。31は、面を持つ扁平な玉製品である。おそらく、勾玉を意識して製作したものと考えられるが、一般的な勾玉の形状とは違っている。端部に一側面から穿たれた穿孔が一か所見られ

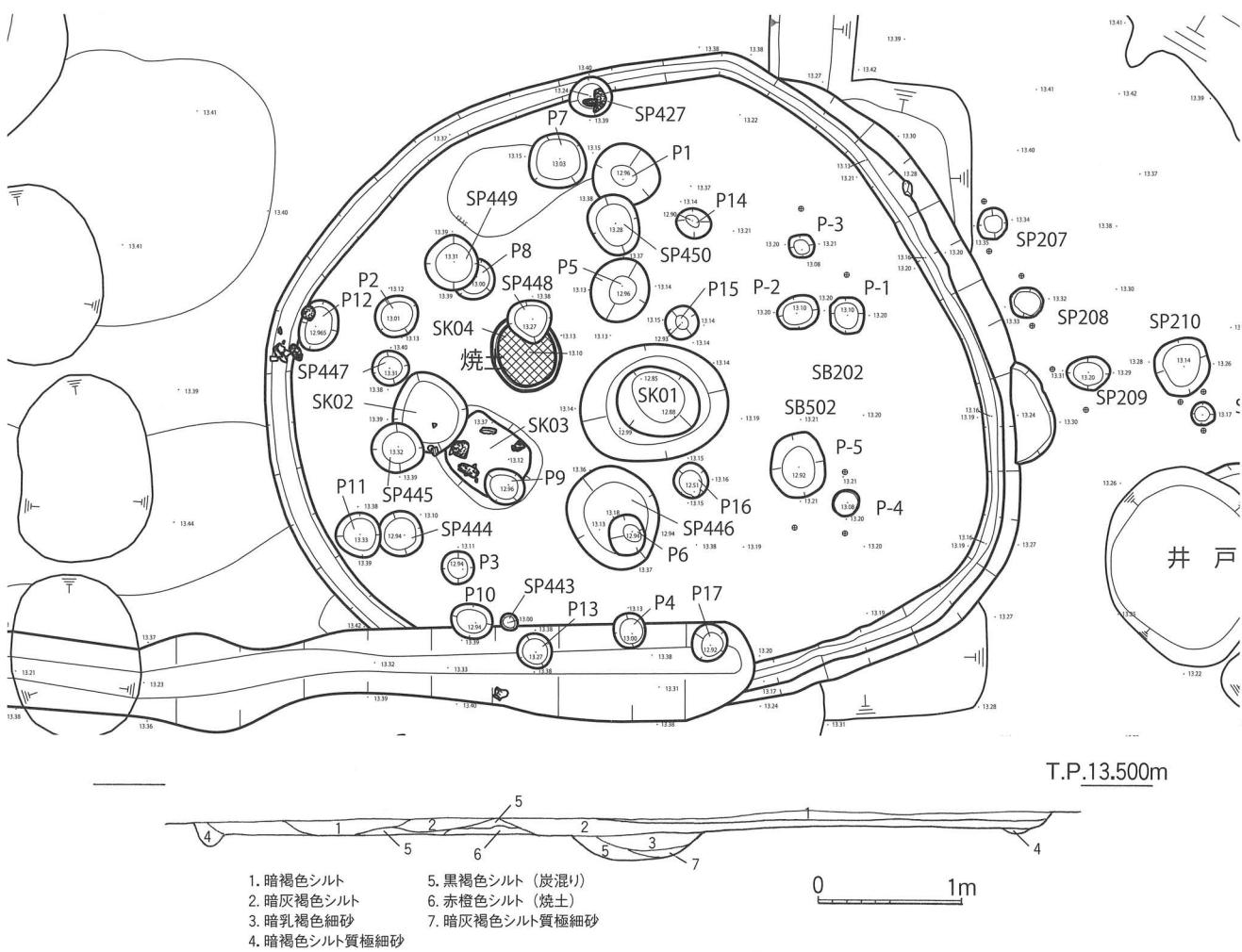


fig.16 SB202遺構図

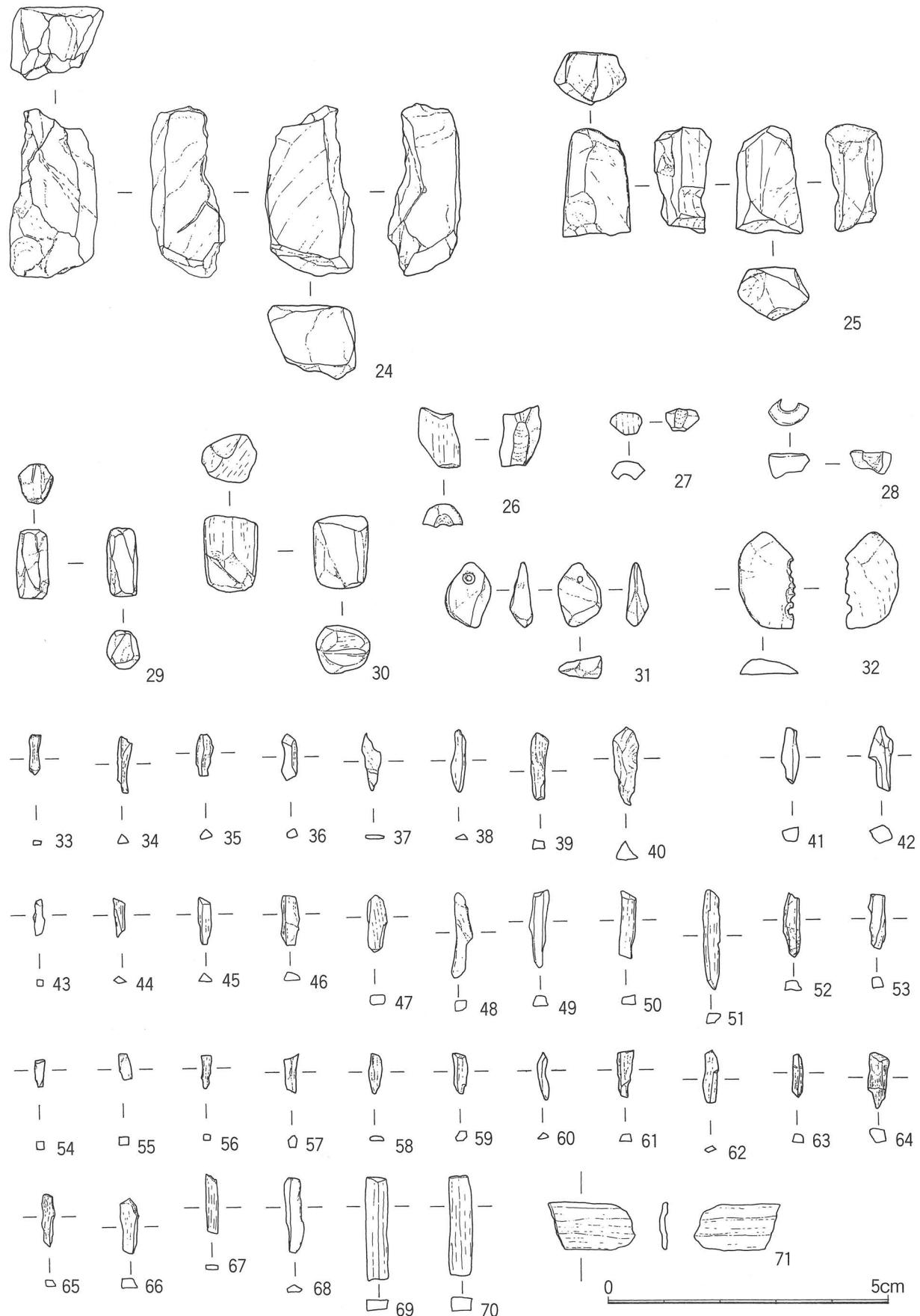


fig.17 SB202出土 玉作り関連遺物

る。32は、石英脈の透明な円礫である。片面は、自然面を残し、反対面は大剥離面となっている。真っ直ぐな端辺には、小さな刻みが並んでいるが、石材の特性による亀裂のようである。33~70は、珪化木の柱状碎片である。玉作りに必要な、穿孔工具として使用される石針の未使用品の可能性がある。第28次調査では、頁岩製の石針が1点出土している。今回、土壤洗浄・選別作業では、多くの珪化木の破片が出土しており、中には珪化木に鉄分が沈着して、赤褐色になったものが見られる。珪化木が、工具の部材として、大量に建物内に持ち込まれていたと考えられる。71は、結晶片岩製の石鋸である。長辺は両方とも使用により磨耗している。

玉作り関連以外の遺物としては、72~74がある。72は、小片ではあるが、壺の肩部と考えられる。表面に櫛描波状文と直線文が施文されている。73は、サヌカイト製の石鏸である。全長2.2cm、幅1.8cm、厚さ0.3cmで基部の形状は凹基式である。74は、サヌカイトの石核である。大きく割りとった面が4面あり、建物内でサヌカイトについても加工を行なっていたものと考えられる。なお、サヌカイトの薄片についても、珪化木同様、多く検出されている。

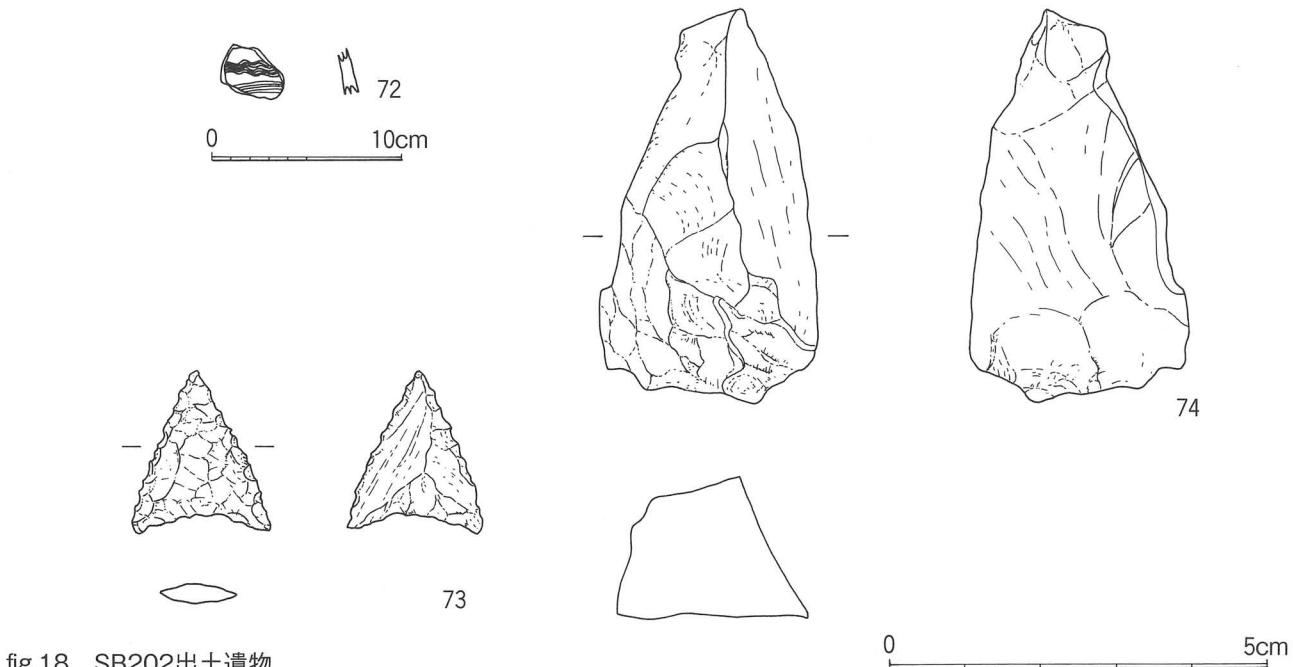


fig.18 SB202出土遺物

### SB203

SB203は、東半分をSB201に切り込まれた状態で検出された。南半分は、第28次調査の3区調査地であるが、調査区の端に当たり、調査当時も、黒く焼土が存在する範囲であり、精査を繰り返し行なったが、周壁溝は検出されなかったため、その存在を明らかとは出来なかった。建物内の周囲には、幅15~30cm、検出面からの深さ15~23cmの周壁溝が巡らされている。また、高温の火を受けた焼土塊と、隣接して直径40cmの主柱穴が検出された。第28次調査の3区には、今回、検出できた建物の主柱穴に相対すると考えられるものがあることから、建物規模は南北3.5m以上×東西4.2m以上と考えられる。焼土塊の西に近接して、台石が据え付けられていた。SB202(第28次調査4区SB502)と、第28次調査4区SB501にも同様の焼土塊が検出されている。検出状況から考えると、柱に近接していることから、防火のためにも何がしかの上部構造がある炉のようなものの存在が想起され、78の台石があることからも工房とし

ての機能が想定される。しかしながら、土壌洗浄・選別作業を行なったが、金属溶滓やSB202で見られる石材屑などは出土しなかった。出土遺物としては、75～78がある。77は、壺の頸部に櫛描直線文が2帶、施されている。

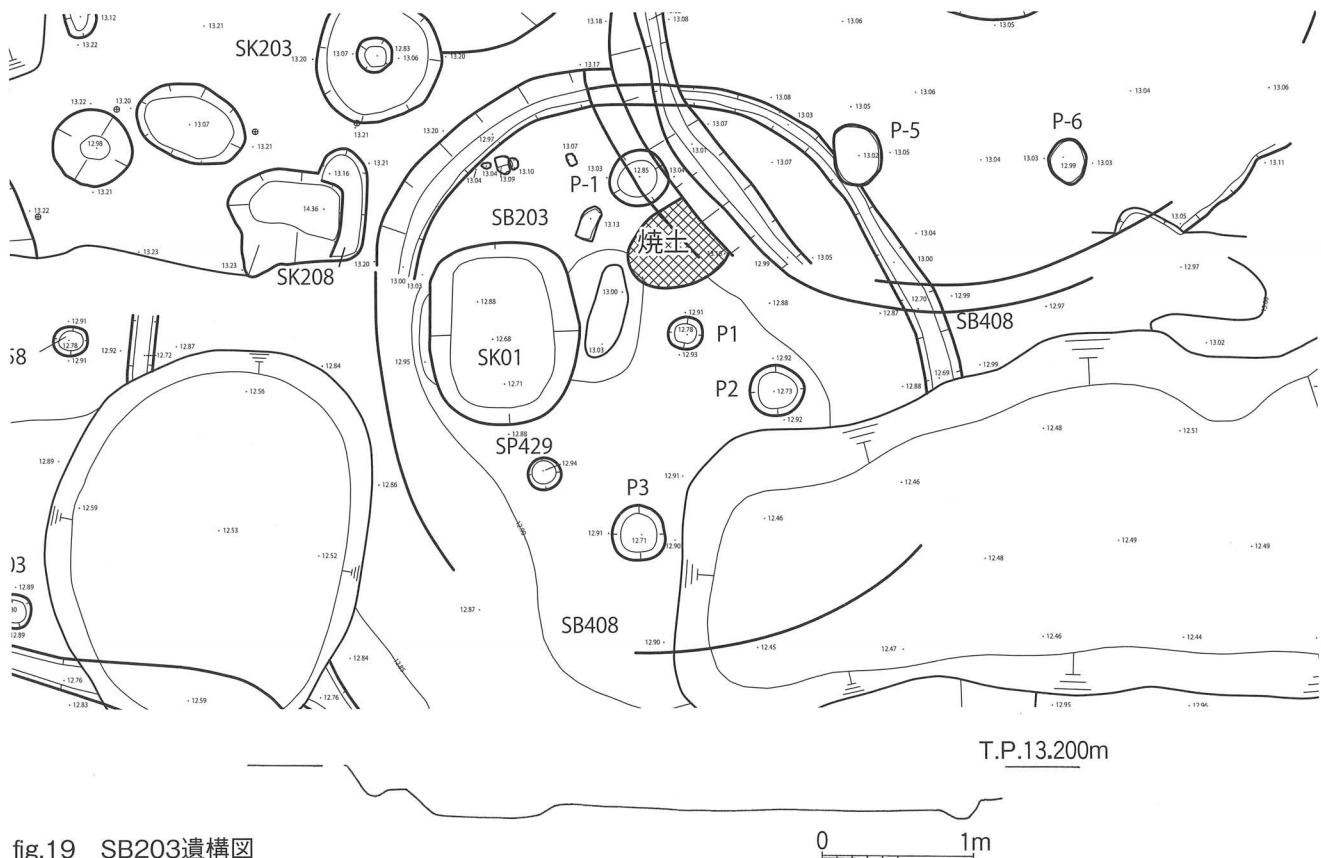


fig.19 SB203遺構図

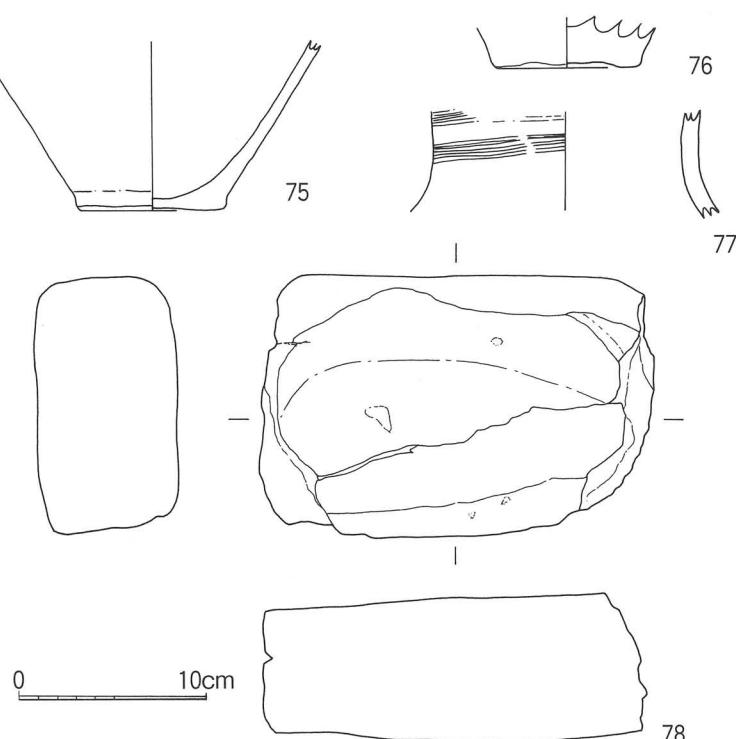


fig.20 SB203出土遺物

### 第3節 第3遺構面（弥生時代前期末～中期前半）

#### 第3遺構面の遺構と遺物（第28次調査第5遺構面に相当）

第3遺構面としては、発掘調査では全面を削平されていたために、第2遺構面と同時に検出と遺構の掘削を行なった。しかしながら、第28次調査の第5遺構面の遺構とした4区SR401に続くものであり、出土遺物の時期も同様であることからこの溝だけを第2遺構面と区別して、第3遺構面とした。

#### 溝 SD201

SD201は、遺物を多く出土した溝である。第28次調査では自然の流路の扱いであるSRで遺構名を用いているが、流れの規模が小さく、ある程度、人間の生活に利用された流れであると考えたため、今回の調査では溝とした。溝の幅は0.8～1.5m、検出面からの深さは0.35mを測る。断面形状から、底に抉り取られた崩れがあることから、一時的に急激に流れた小規模な土石流があったものと考えられる。出土遺物は、堆積過程として最終的に埋る段階で多く出土する。79は、広口壺の口縁部である。口縁内面に3本の貼付突帯に刻み目を施し、開口部を設けている。見込み周縁には三角刺突文が施されている。81は、口縁部が緩やかに外反する大型把手付きの鉢である。

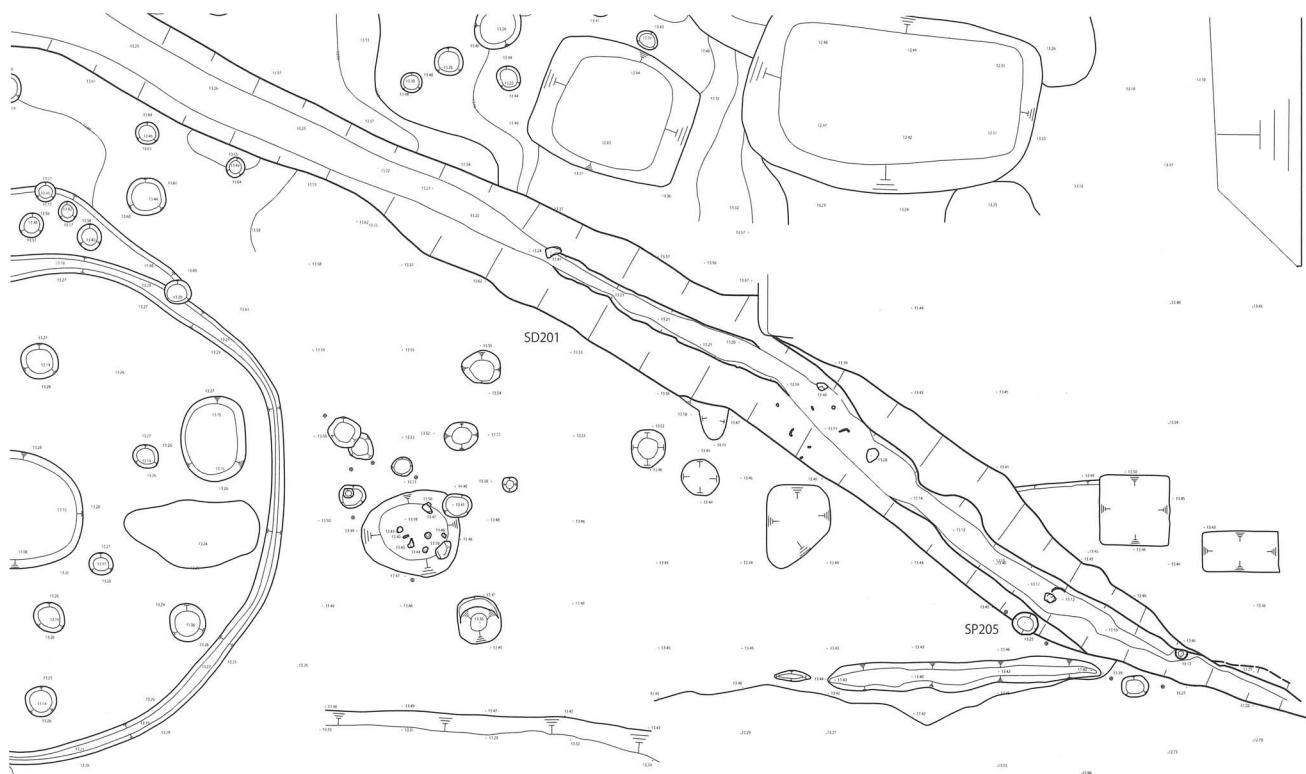


fig.21 第3遺構面・SD201遺構図 (S=1:100)

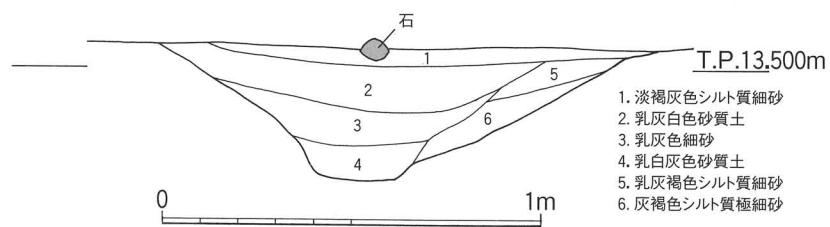


fig.22 SD201断面図 (S=1:20)

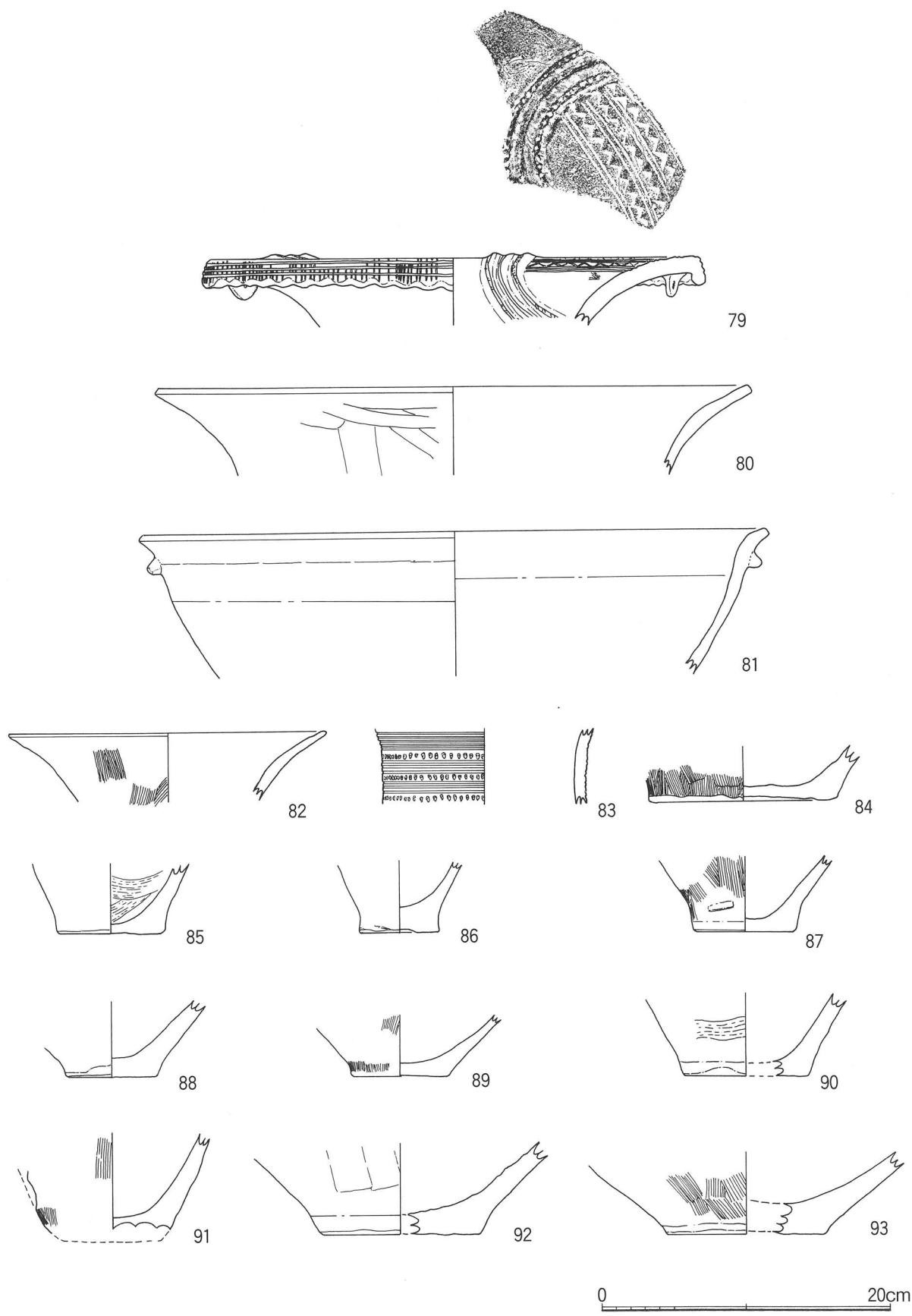


fig.23 SD201出土遺物

## 第3章 第28次調査に伴う流路出土の弥生時代の遺物

### 第1節 第4遺構面の流路(弥生時代中期)

第28次発掘調査では、旭通4丁目の街区中央に南北に流れる幾筋かの流路を検出した。第33次調査はそれらの流路の東に位置しており、この流れのほとりで生活していたと思われる。また、第33次調査にも関連する遺物が多いことから、流路内の遺物について報告する。

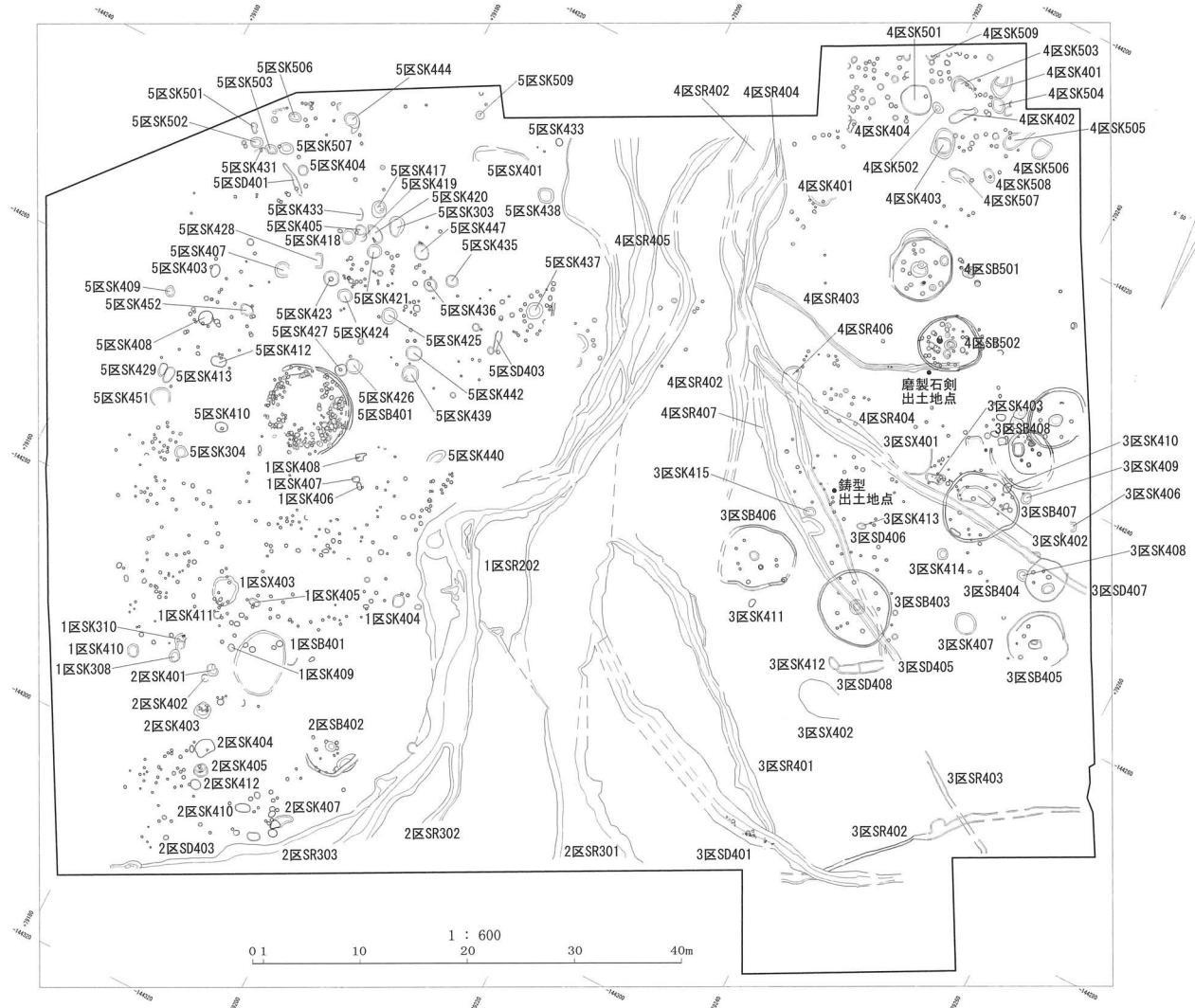


fig.24 第28・33次調査 弥生時代中期遺構面全体図 (S=1:600)

#### 2区SR303出土遺物

この流路は、街区の西南端部で検出したものである。大きく南北に流れる主流から、西へ流れを分けて流れたものである。94~99、101、107は広口壺の口縁部である。94、95、97には頸部下方にヘラ描き沈線文を施している。99の口縁端部は、下方向に拡張して面をもち、端面中央には櫛描波状文、上端及び下端部には刻目を施している。頸部下方には2帯の櫛描直線紋が施されている。101は、口縁端面に1条のヘラ描き沈線文が施されている。頸部外面は、縦方向のハケメ調整の後、6帯の櫛描直線文を施している。107は短く外反する口縁部で端部は上下に拡張し、端面にヘラ描き沈線と上下の端部に刻目文を施している。100、108は甕の底部である。102~104は甕の口縁部である。102は口縁端部を外反させ、

体部外面には、縦方向のハケメ調整の後、5帯の櫛描直線文が施されている。103、104は、体部が張り、逆L字形の口縁部で、口縁端部には刻目文が施されている。肩部には、7条のヘラ描き沈線文を施している。105は、直口鉢もしくは高坏の口縁部と考えられる。106は水差形土器である。口頸部外面には、8条の凹線文が施され、肩部下方には櫛状工具による連続刺突文が施文されている。109は鉢の底部である。110は蓋である。口縁周縁に1条の沈線が施され、二孔一対の穿孔が上面から穿たれている。

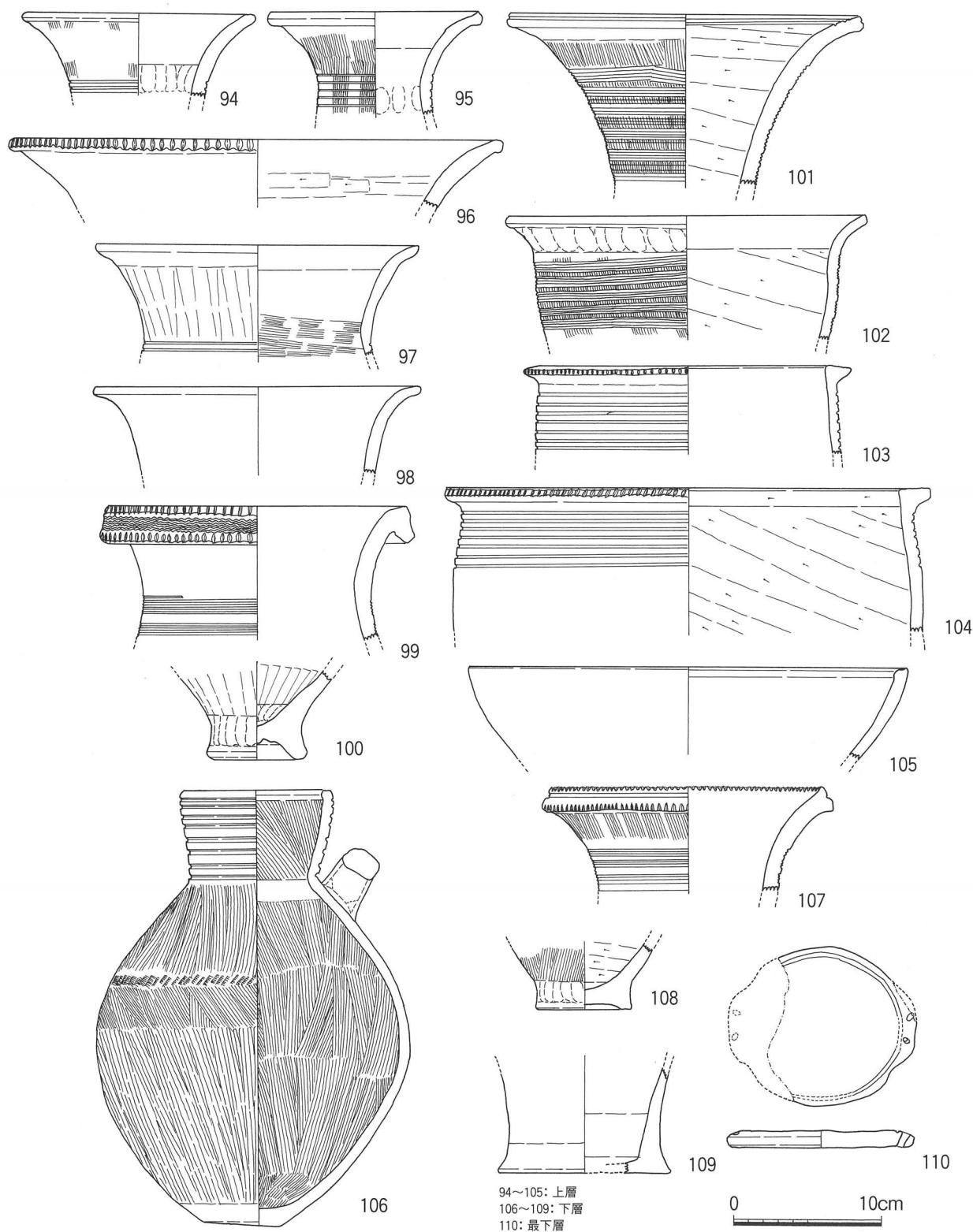


fig.25 2区SR303 出土遺物

石器は、石鏃と石庖丁が出土している。

石鏃は、全部で8点出土している。全てサヌカイト製である。111～115は、基部の形状が凹基式のものである。111と112は浅いタイプであるのに対して、113～115は深い抉りのものである。116と117は、基部の形状が円基式のものである。118は、基部の形状が平基式のものである。

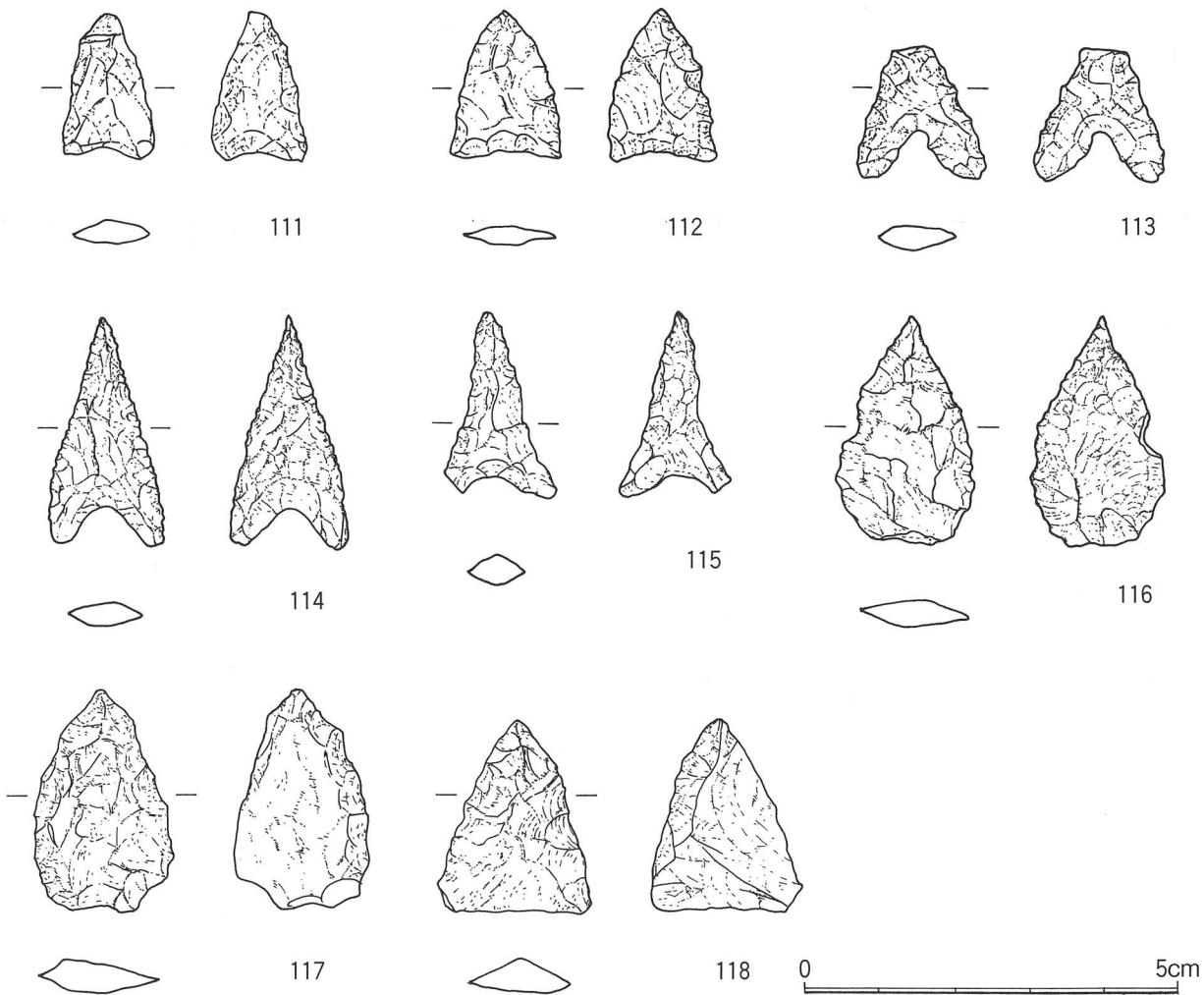


fig.26 2区SR303 出土石鏃

石庖丁は、全部で7点出土している。規模を表記する際に、最大長は、石庖丁の刃渡り方向を長さとし、刃に対して縦断する方向を幅として表記する。

119は、石庖丁としての特徴である部分が少ないが、表面を丁寧に仕上げており、背部と考えられる端辺は丸みをもって納められている。石材は片岩である。

120、122～125は粘板岩製の石庖丁である。色は黒色であり、緻密な材質のものである。120は、弧背直線刃である。穿孔されている最大幅でも2.8cmと細手のものである。123は、直背弱凸刃である。小口の部分は直になっており、半月形の形状が多い中で、四角い形状をしたものである。124は、弧背弱凸刃である。このタイプも、直線状に刃を付けるものが多いのに対し、弧状に刃を付けるものは少量である。

121は頁岩製である。小片であり、片面は剥離により形状を残していない。僅かに刃部が残されていることから石庖丁の破片とした。

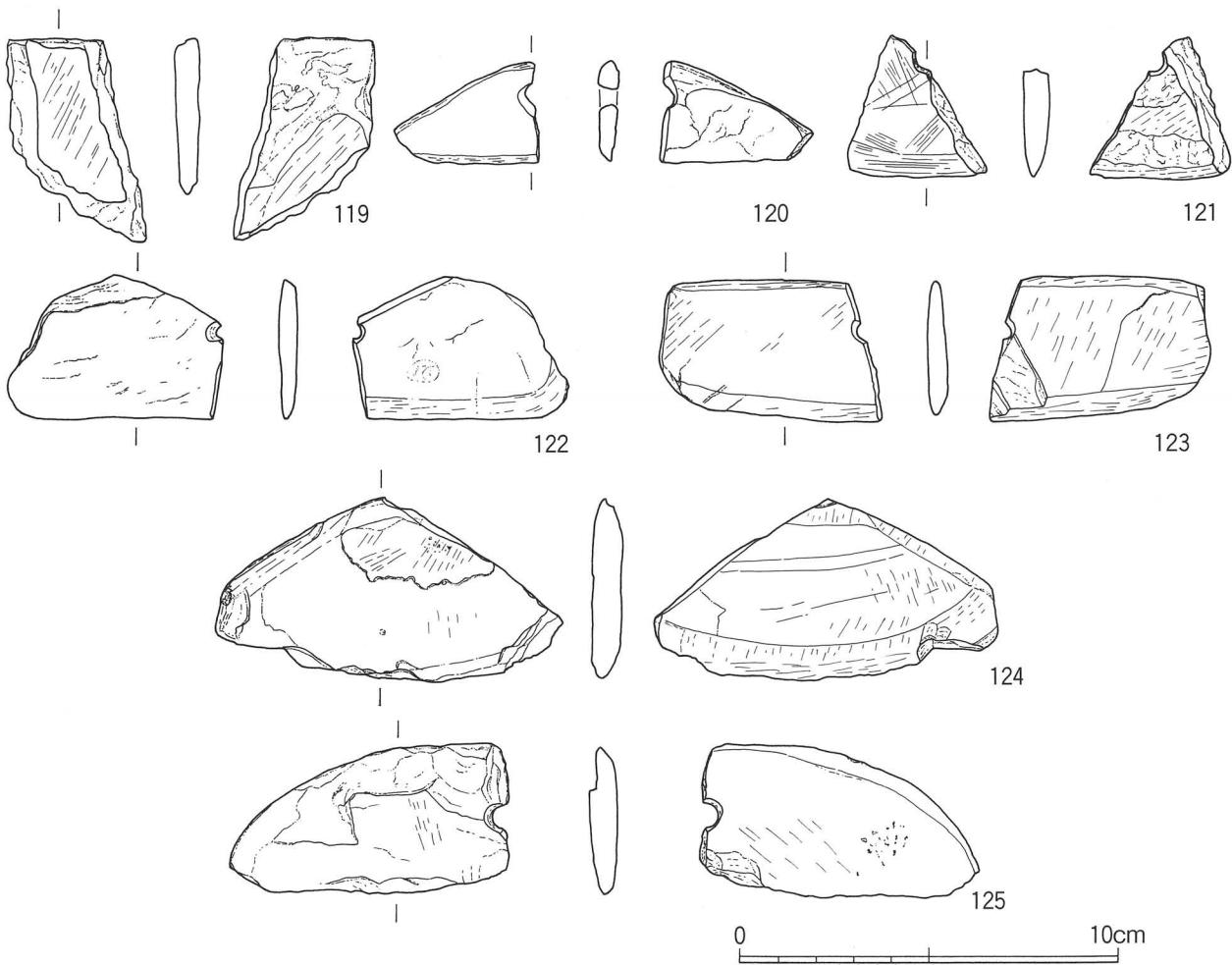


fig.27 2区SR303 出土石庖丁

#### 4区SR405 遺物出土状況

4区SR405は、4区の西端である今回調査した旭通4丁目街区のほぼ中央を南北に流れる流路である。4区で複数の流れがまとまって、1・2区の南の方では再び複数に流れが分岐している。このため、堆積土層は複雑なものとなっており、上層から第1層、第2層、一番出土土器を多く含む土層を第3層とした。その第3層も上から順番にa、b、c、dに4区分して遺物のとりわけを行なった。流路内からの出土遺物であるため、小片のものが多く、表面も摩滅しているものがほとんどである。

#### 4区SR405第2層 出土遺物

第2層からは126～139の遺物が出土した。126は、有段口縁壺である。口縁端部と有段端部に刻目を施している。127は、外反する口縁で、端部は下方に拡張し、端面の中ほどに高まりを持つ広口壺である。端面の上下端と端面の高まり頂部に刻目を施している。また、この高まりを挟んで上下に櫛描波状文が施文されている。129は、台付鉢である。139は、杓子形土製品である。身部は椀状に広がりを持って立ち上がり、柄部は身部の立ち上がりのままで角度を変えていない。身部に比べると、柄部はかなり小さいものである。138は、庄内期の甕である。体部外面には水平なタタキ目が残されており、内外面ともにヘラケズリを行なっている。このことから、第2層は弥生時代終末期に埋没した堆積層と考えられる。

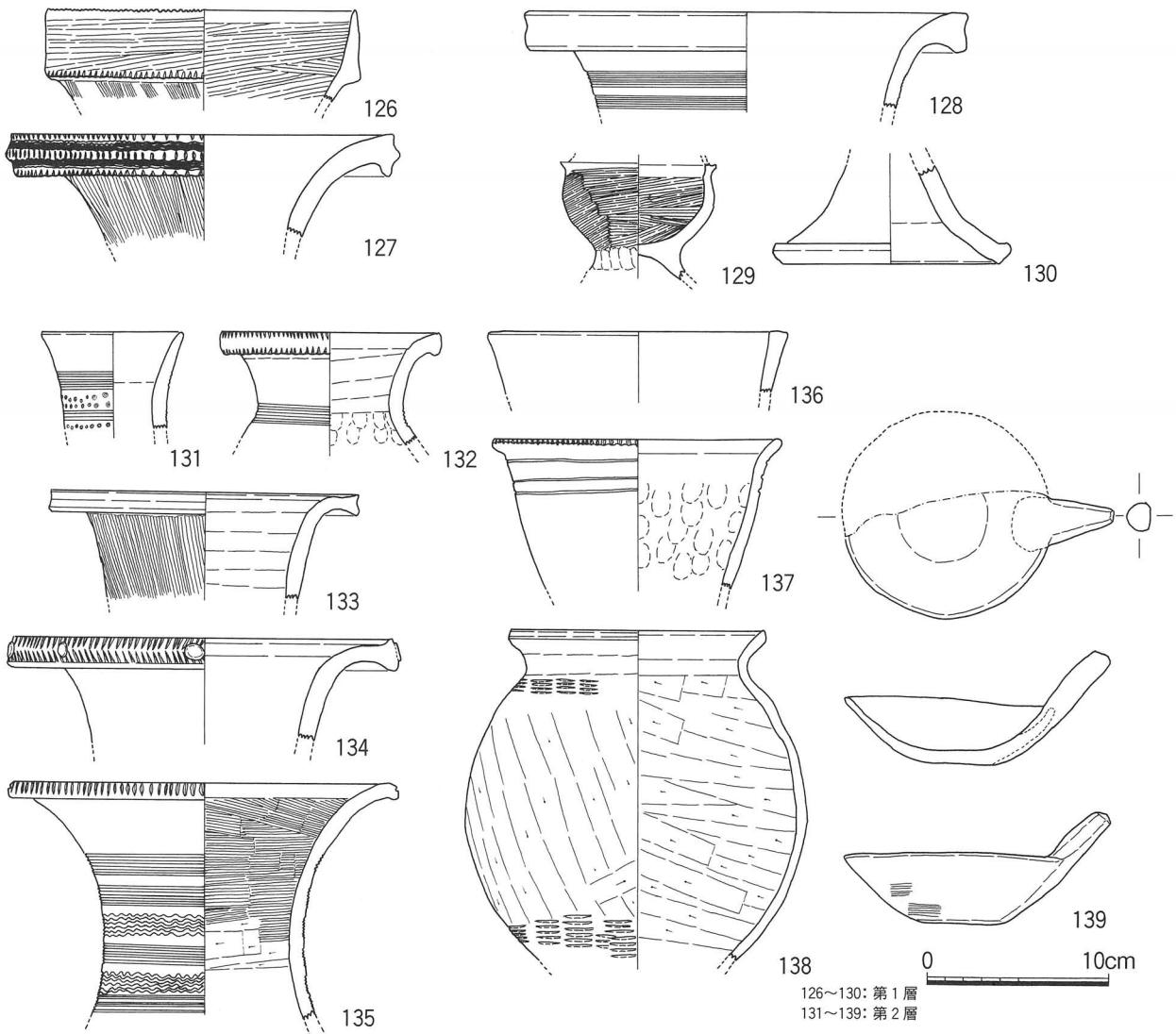


fig.28 4区SR405 第1・2層 出土遺物

#### 4区SR405第3層a 出土遺物

第3層aからの出土遺物として図化したものは、140～159の弥生土器がある。140は、口縁端部に刻目を施す広口壺である。頸部には縦方向のハケメ調整がなされており、頸部下半には4条の櫛描直線文が2帯施されている。144には、口縁端面の下段に楕円刺突文、上端部に刻目を施す広口壺である。頸部には櫛描直線文が2帯施されている。146は、体部中央に黒斑をもつ長頸の広口壺である。147は、口縁端面に櫛描波状文を施し、頸部には7条の櫛描直線文と6条の半円形文(扇形文)を組み合わせた、いわゆる擬流水文を施している。150は、頸部から口縁の開きが大きいことから、広口壺とした。口縁内面の周縁には、4条の半円形文(扇形文)が連なって施されている。154は、口縁端部の上面をつまみ上げたように尖らせており、その上端部に刻目を施す広口壺である。155は、無頸壺もしくは深手の鉢の一部と考えられる。156～159は、甕の口縁部である。143は、頸部に8条の櫛描直線文が3帯施されている。158には、口縁下端部に刻目を施し、頸部には2条の櫛描直線文を1帯施している。

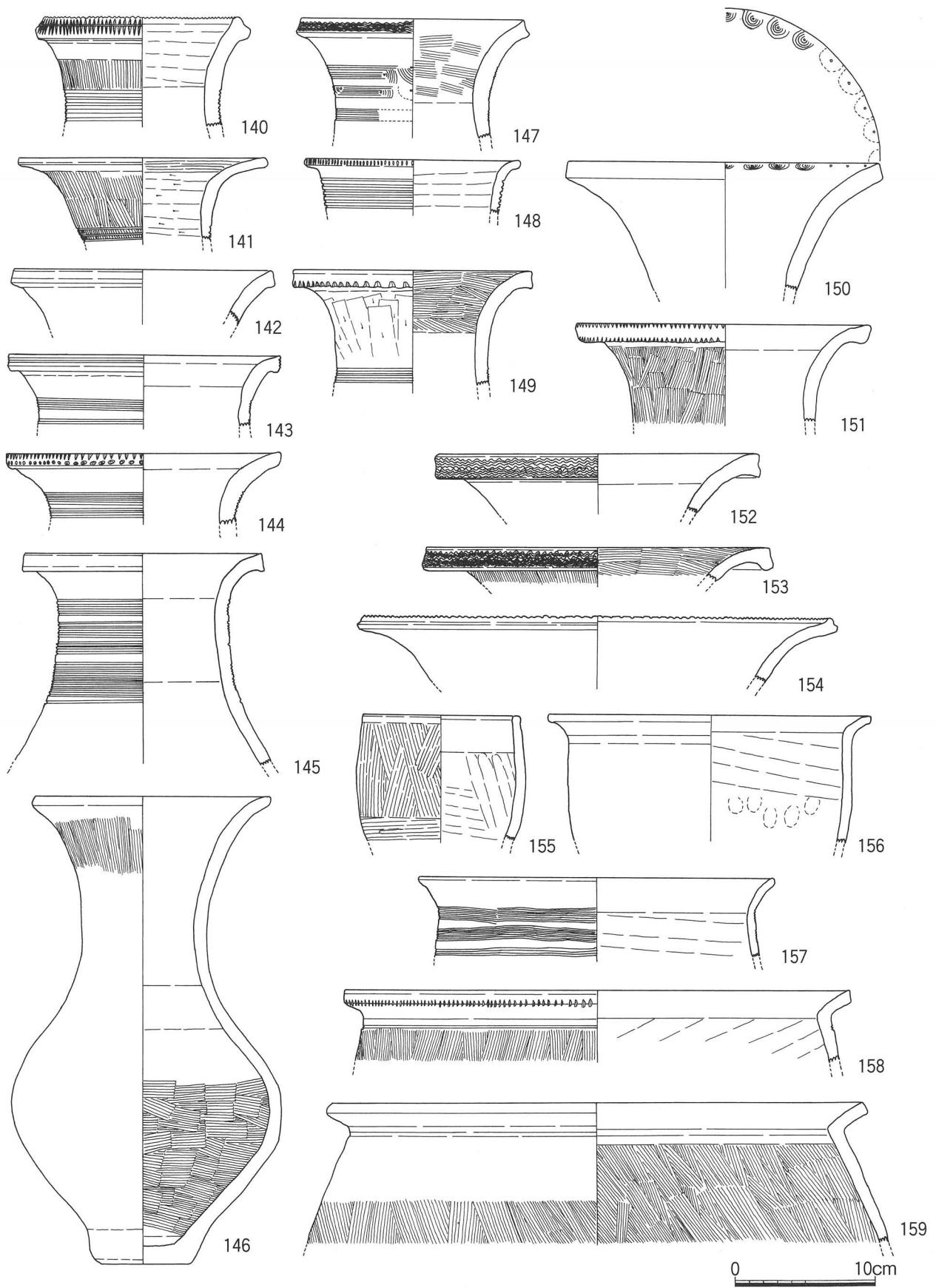


fig.29 4区SR405 第3層a出土遺物

#### 4区SR405第3層b 出土遺物

aの下に堆積している層である。図化できたのは、160～170である。

160は、広口壺の口縁部である。口縁端部上端には、刻目が施され、口縁端部内面の周縁には、7条の半円形文(扇形文)が連続して施文されている。161、162、169、170は、甕の口縁部から体部にかけての破片である。161は、いわゆる如意形口縁であるが、口縁端部を強くナデしたことにより、頸部に膨らみを持っている。162には、頸部に1条の沈線を施している。169には、6条の櫛描直線文を3帯施し、6条の櫛描波状文を1帯、その下に6条の櫛描直線文を1帯施文している。170は、口縁端部に刻目があり、頸部に4条のヘラ描き沈線文が施されている。163、164、166、167は広口壺である。166は、口縁端面に4条の櫛描直線文を施し、下端部には刻目が施されている。また、頸部には6条のヘラ描き沈線が施されている。167は、全体に摩滅が著しいが、頸体部に僅かに段差が見られる小型の広口壺である。165は、口頸部が直に立ち上がり、口縁端部が僅かに外反する形状であり、直口壺と考えられる。頸部には5条の櫛描直線文が2帯施されている。168は、小型の鉢である。全体に摩滅が著しく、施文や調整については不明である。

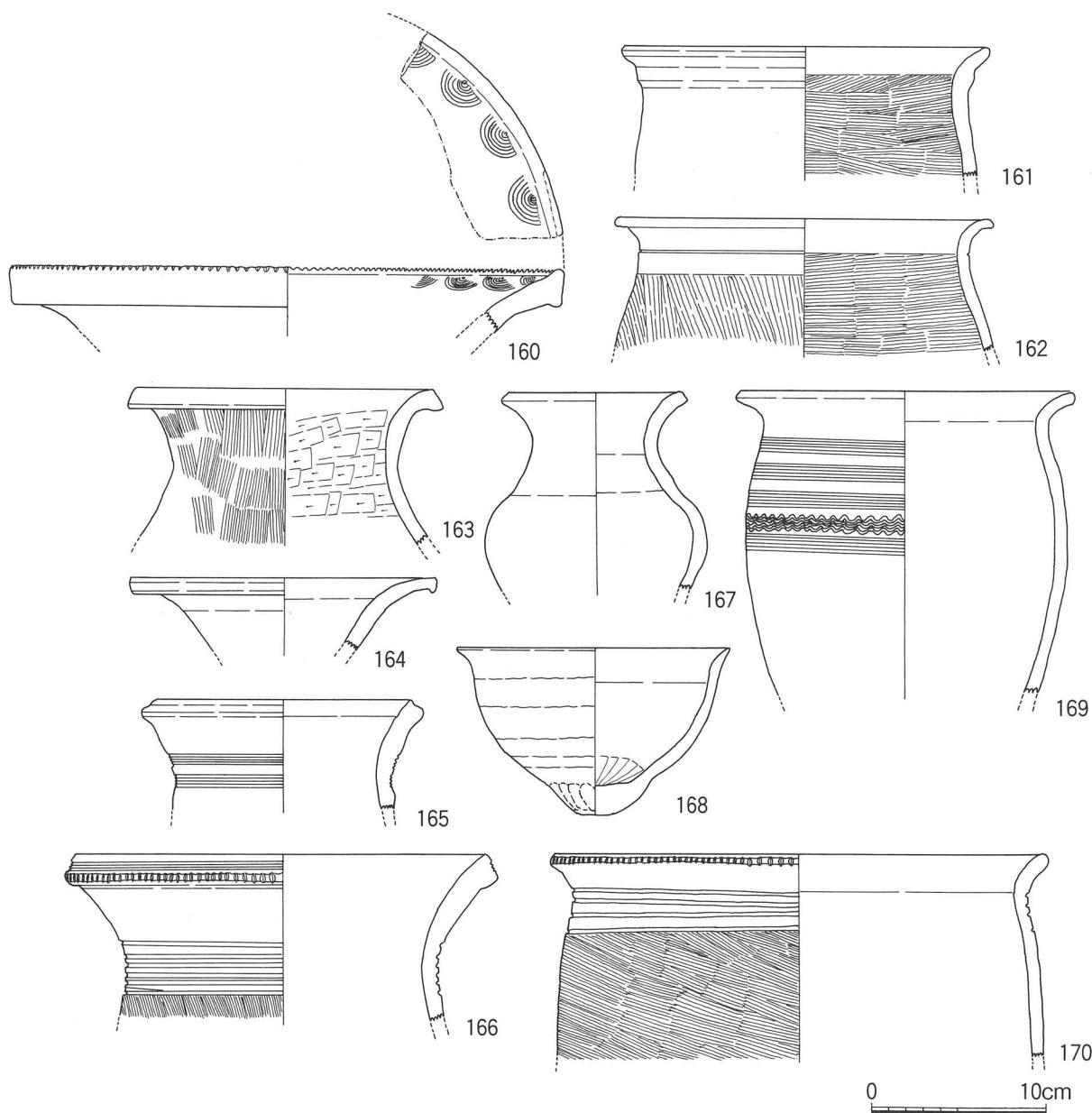


fig.30 4区SR405 第3層b出土遺物

#### 4区SR405第3層c・d 出土遺物

さらに下層のc層からは171、173～183が出土した。171は、体部から直に口縁部が立ち上がる直口壺である。口縁端面には4条の櫛描波状文、頸部には8条の櫛描直線文、頸部から体部にかけて8条の櫛描波状文が2帯、体部には8条の櫛描直線文1帯と8条の櫛描波状文が2帯施されている。173は、口縁部の破片であるため、器種の特定が出来ないが、甕もしくは鉢と考えられる。10条の櫛描直線文が3帯施されている。174、175、179は広口壺の口縁部である。174の口縁端面には、ヘラ描斜格子文が施されている。175、179の口縁端面には、櫛描波状文が施され、175の頸部から体部にかけて櫛描直線文が連続して施文されている。180は、壺の底部である。176～178、181、182は甕の口縁部から体部にかけての破片である。176の口縁部直下ではヘラ描沈線文が3条施されている。177と181は逆L字状口縁を持つ甕である。

172は、d層から出土した図化できた唯一の広口壺である。頸部から体部上半にかけて5帯の櫛描直線文が施されている。

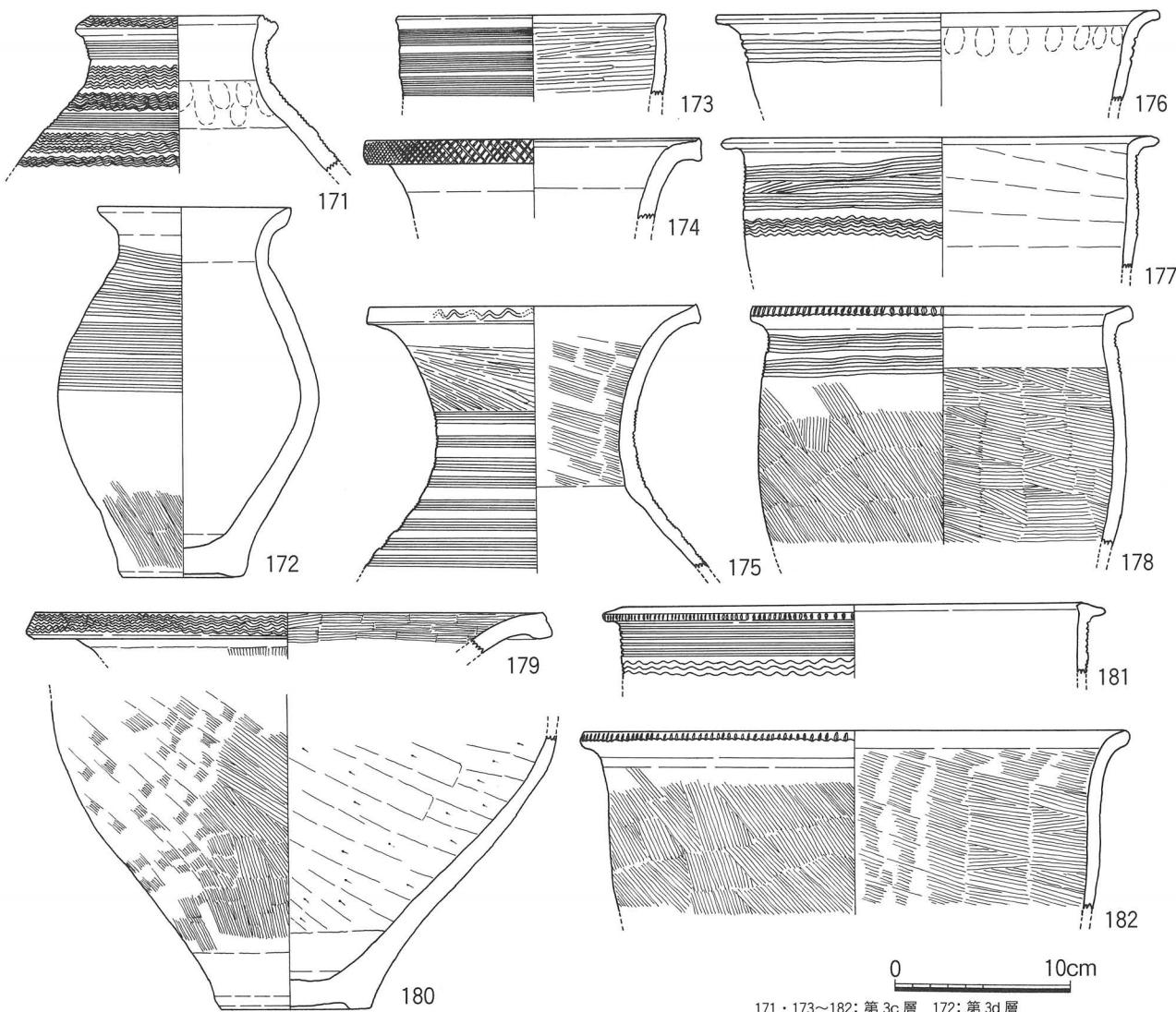


fig.31 4区SR405 第3層c・d出土遺物

#### 4区SR405出土石器

石鏃は、183～206が出土した。材質は全てサヌカイト製である。基部の形状や規模、重量などは遺物

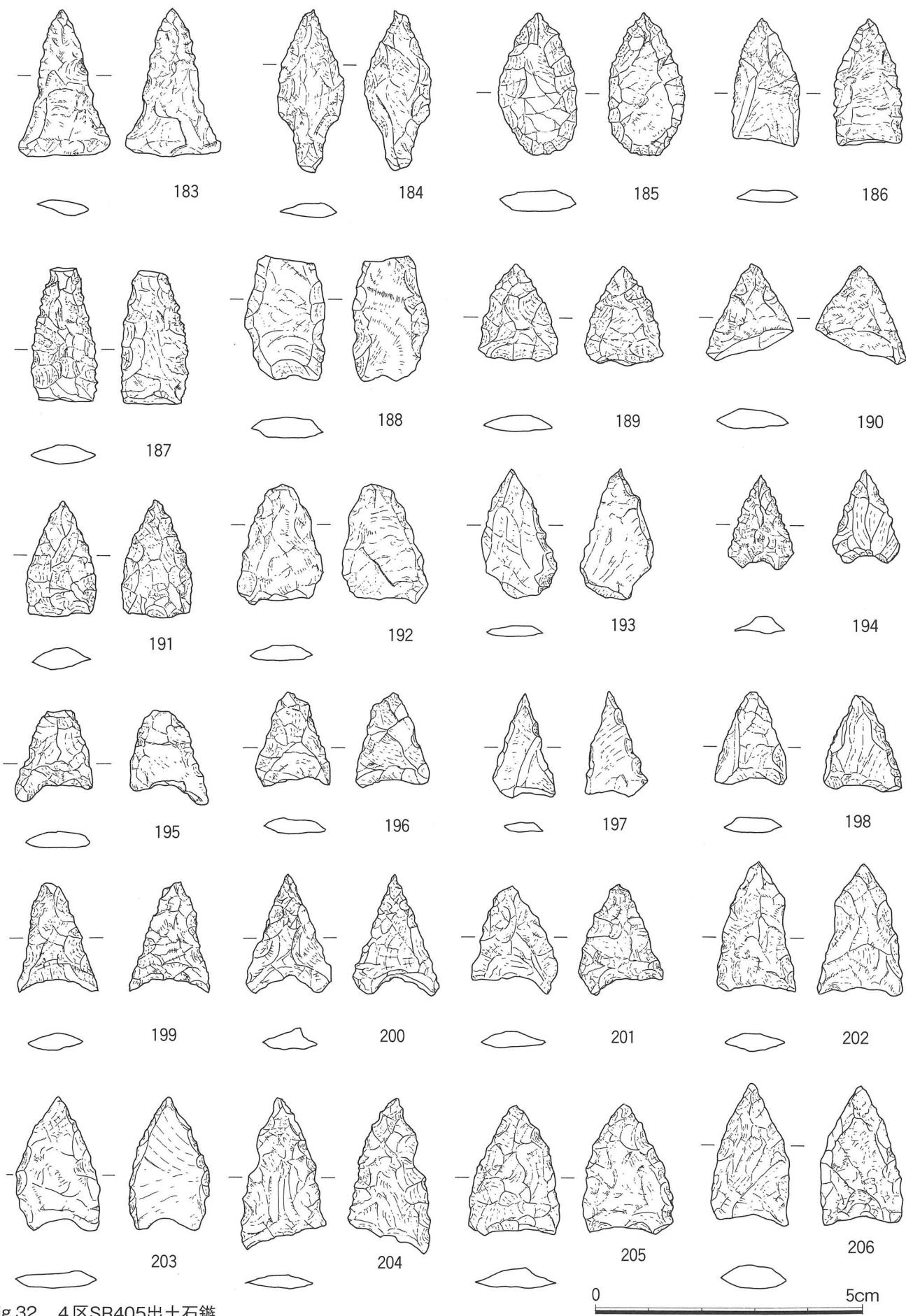


fig.32 4区SR405出土石鎌

観察表に掲載した。

石庖丁は、207～217が出土した。重量や形状の分類については観察表に記入している。使用されている石材は、207～209は黒色系、211は灰色、213は緑灰色の粘板岩である。210、214、215は緑色系の片岩である。212は灰白色の頁岩、216は灰白色の砂岩、217は灰白色の結晶片岩である。216は、穿孔されていないが、両端辺に抉りが設けられていることから、紐を横方向に巻いて手に装着したものと考えられる。217は、弧背直線刃であるが、分厚く、表面も整っていないことから、製作過程のものと考えられる。

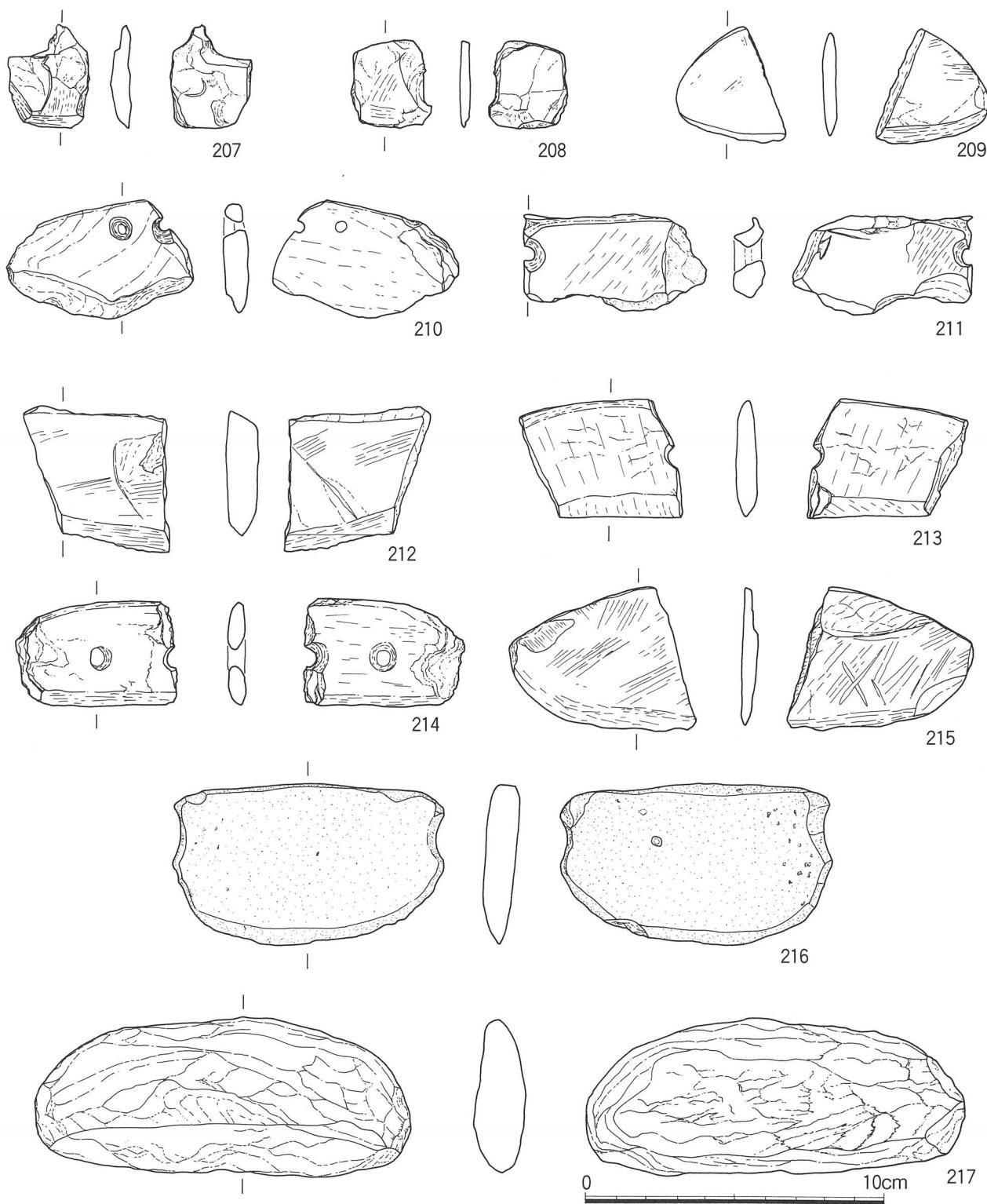


fig.33 4区SR405出土石庖丁

石斧は、218～222が出土している。破片のものもあるが、残された形状から全てが、磨製大型蛤刃石斧である。218は、砂岩製のもので、柄装着部分を境として両側が欠損したものと考えられる。219～222は、いずれも安山岩製のものである。219は、刃部の反対側の破片と考えられる。220は、中央部分が丁寧に磨かれていることから、側面の表面が剥離したものと考えられる。221と222は、刃部のみが欠損したものである。重量や規模などは観察表に掲載している。

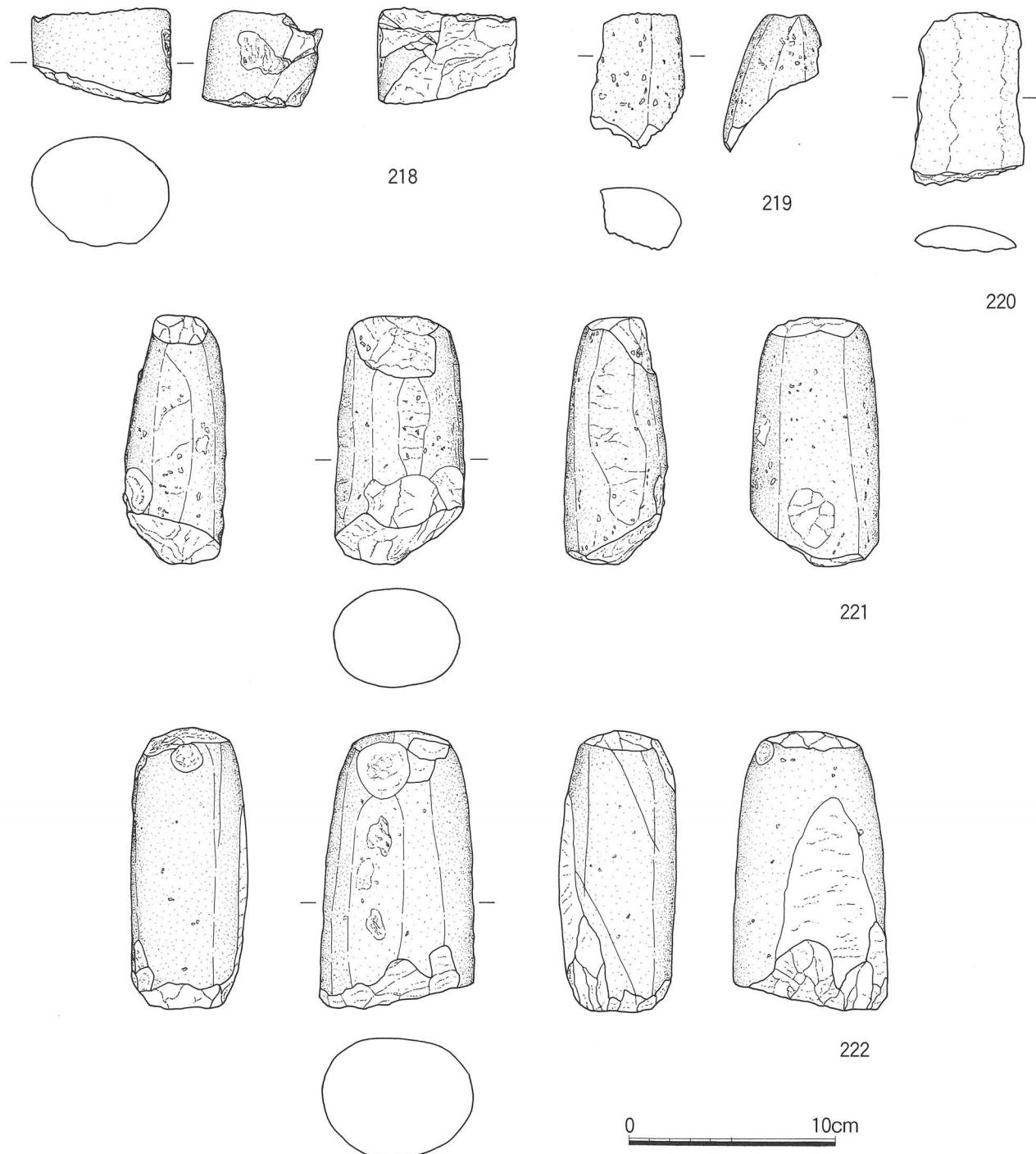


fig.34 4区SR405出土石斧

### 1区SR202出土遺物

1区SR202は、4区SR405の下流に当たる流路である。当該地区の流路の主流となるため、多くの遺物が出土している。223～249の遺物が出土している。詳細は観察表に委ねたい。

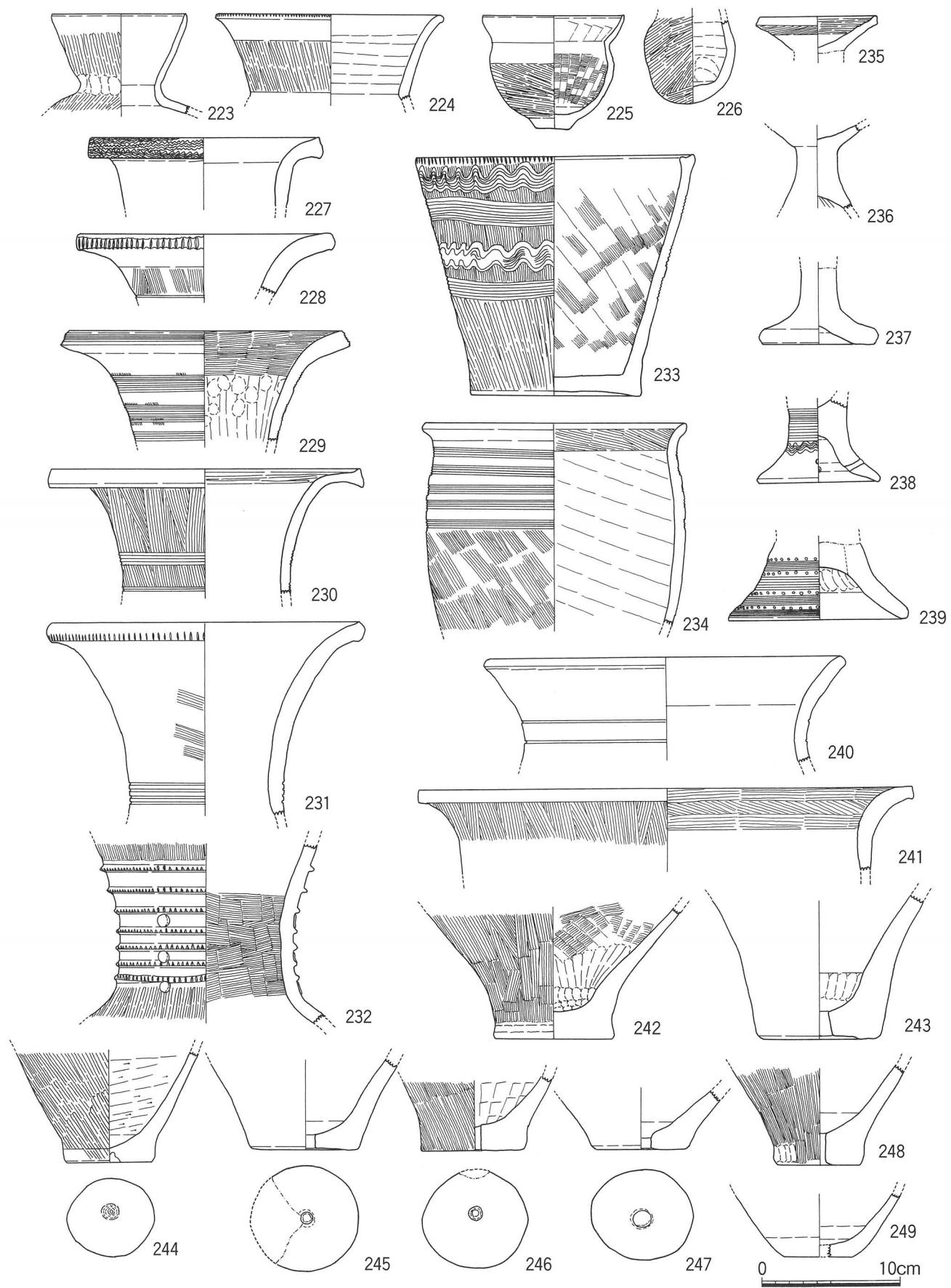


fig.35 1区SR202出土遺物

## 1・2区SR401出土遺物

1・2区のSR401は、SR202を掘削した結果、肩が広がることが判明したものである。よって、同じ流路であるが、初期堆積のものがSR401であり、最終堆積がSR202である。図化できた遺物は、250～260である。250～255は、広口壺の口縁部である。250は口縁端面に1条のヘラ描沈線を施した上に、9個一単位の刻目を施している。頸部には7条のヘラ描沈線を施している。251は、大きく外反する頸部と上下に拡張する口縁端部を有している。口縁下端部には、刻目が施されている。253も、大きく外反する頸部と上下に拡張する口縁端部を有しており、口縁上下端部に、刻目が施されている。口縁部端面にと口縁部内面の見込み部分には、4条一単位の櫛描波状文が施されている。253には、口縁端面と口縁内面の見込み部に櫛描による扇形文が施されている。口縁端面のものは85度の開きで、口縁内面は80度とやや狭い

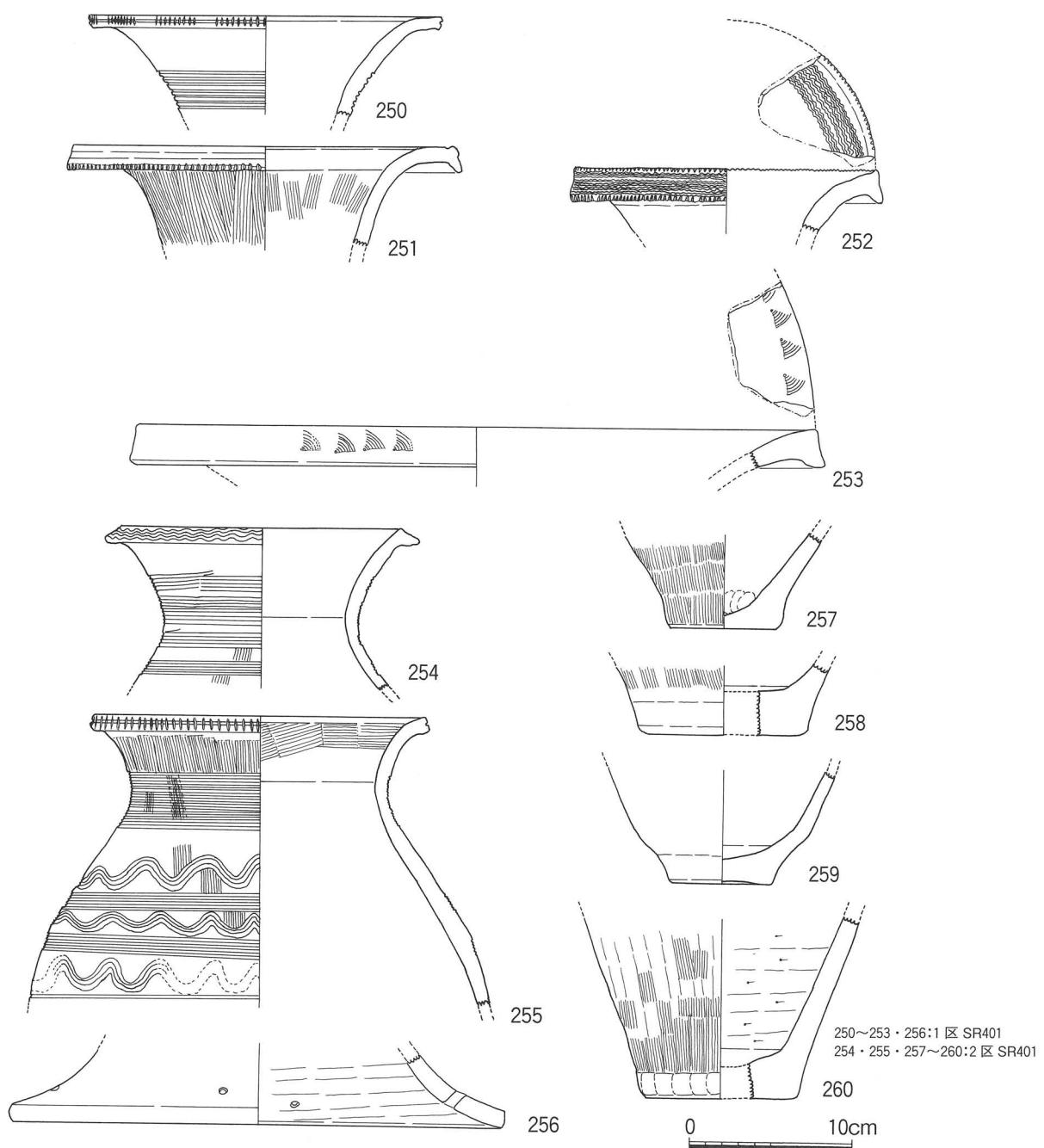


fig.36 1・2区SR401出土遺物

開きとなっている。254は口縁端部を外方へ拡張し、端面には櫛描波状文が施文されている。255は、口縁端面に1条のヘラ描沈線を施した上に、9個一単位の刻目を施している。頸部には7条の櫛描直線文3帯を近接して施し、体部には、4条の櫛描波状文と7条の櫛描直線文を交互に施文している。256は、脚裾部の破片である。二孔一対の穿孔が穿たれている。257～260は、壺の底部である。

1区SR202とSR401から出土した石鏃は、261～274である。265は、チャート製であるが、その他は全てサヌカイト製である。基部の形状や規模については、観察表に掲載した。

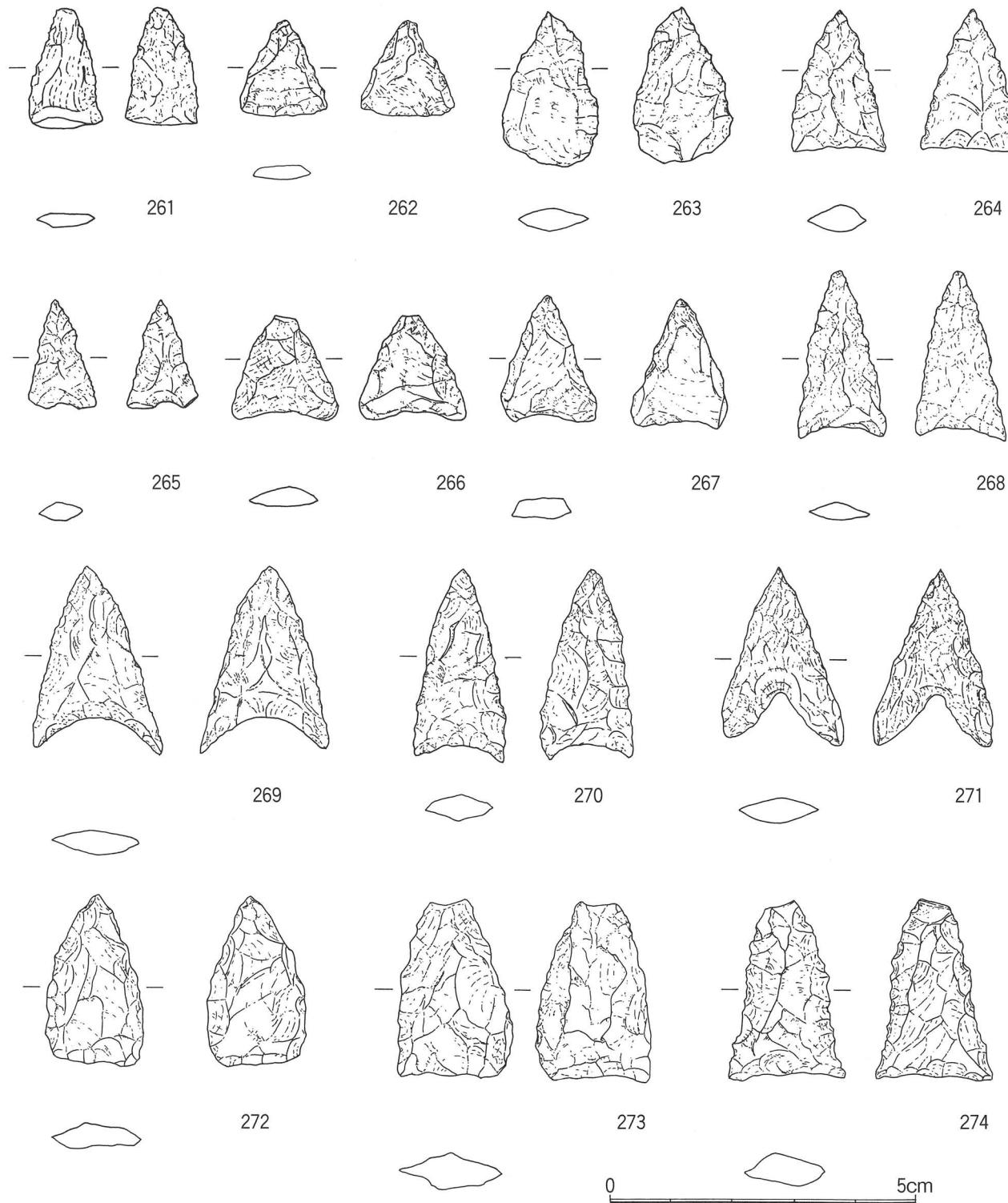


fig.37 1区SR202・401出土石鏃

#### 第4遺構面 流路出土石器

第4遺構面では、玉作りなどの工房跡が検出されていることから、流路内からの工具に関わる石器について掲載した。石錐は、275～284である。石錐には、頭部と錐部の境が明瞭であり、頭部が幅広で摘みやすい形状のものが、275、277、280～282である。それに対し、錐部と頭部の境が不明瞭で、頭部の先に棒状の回転棒を装着して使用したと思われるものが、278、279、283、284である。276の形状は、この二つのタイプに分けることが出来ない。頭部先端が緩やかに捻じ曲げられたような形状をしており、柄などを装着するものではないので、直接手で摘んで使用したものと考えられる。

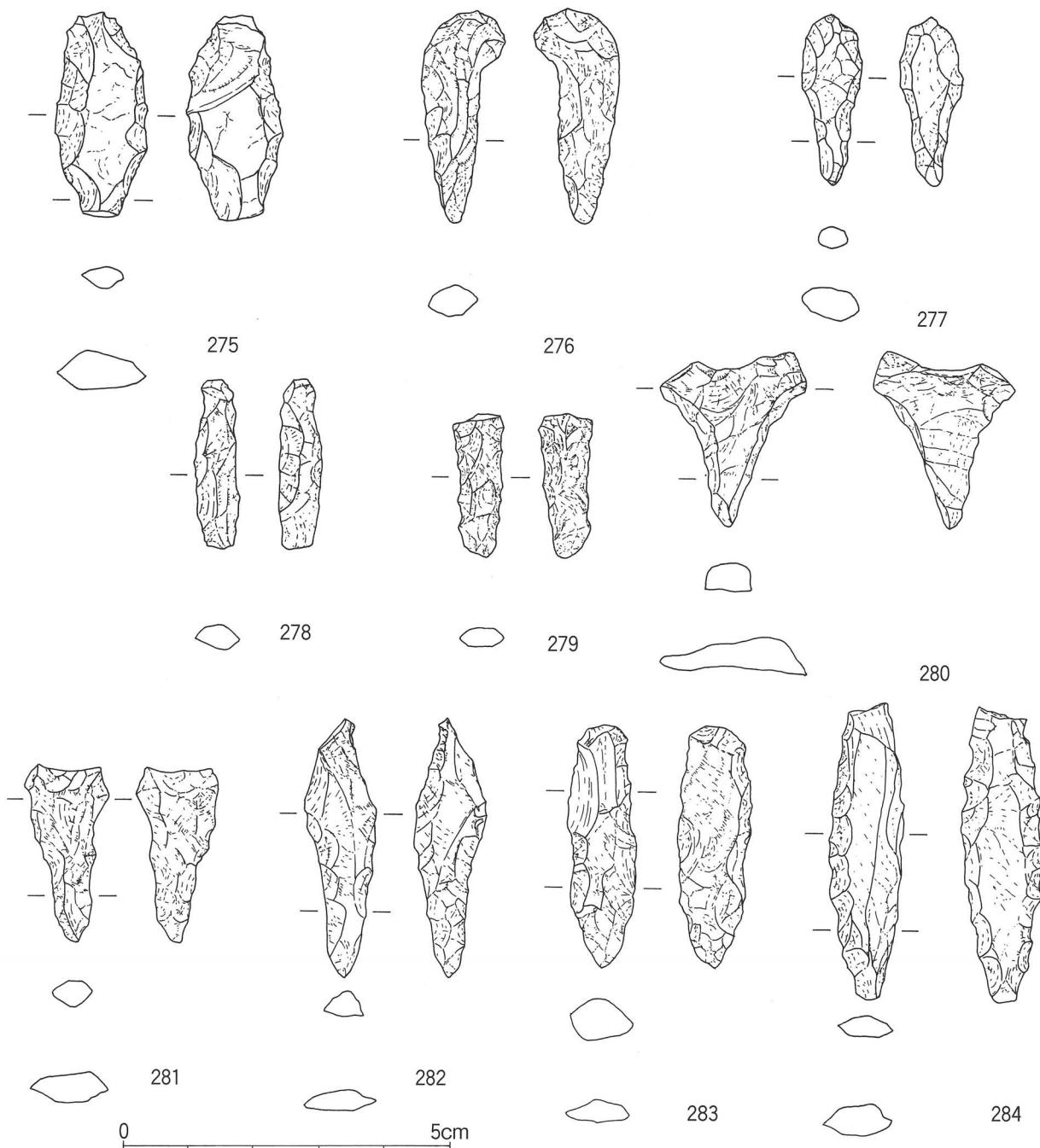


fig.38 第4遺構面 流路内出土 石錐

流路内からは、285～292の石庖丁が出土している。285、286、291は粘板岩製で、その他は片岩製である。規模や形状に関しては、観察表に掲載している。

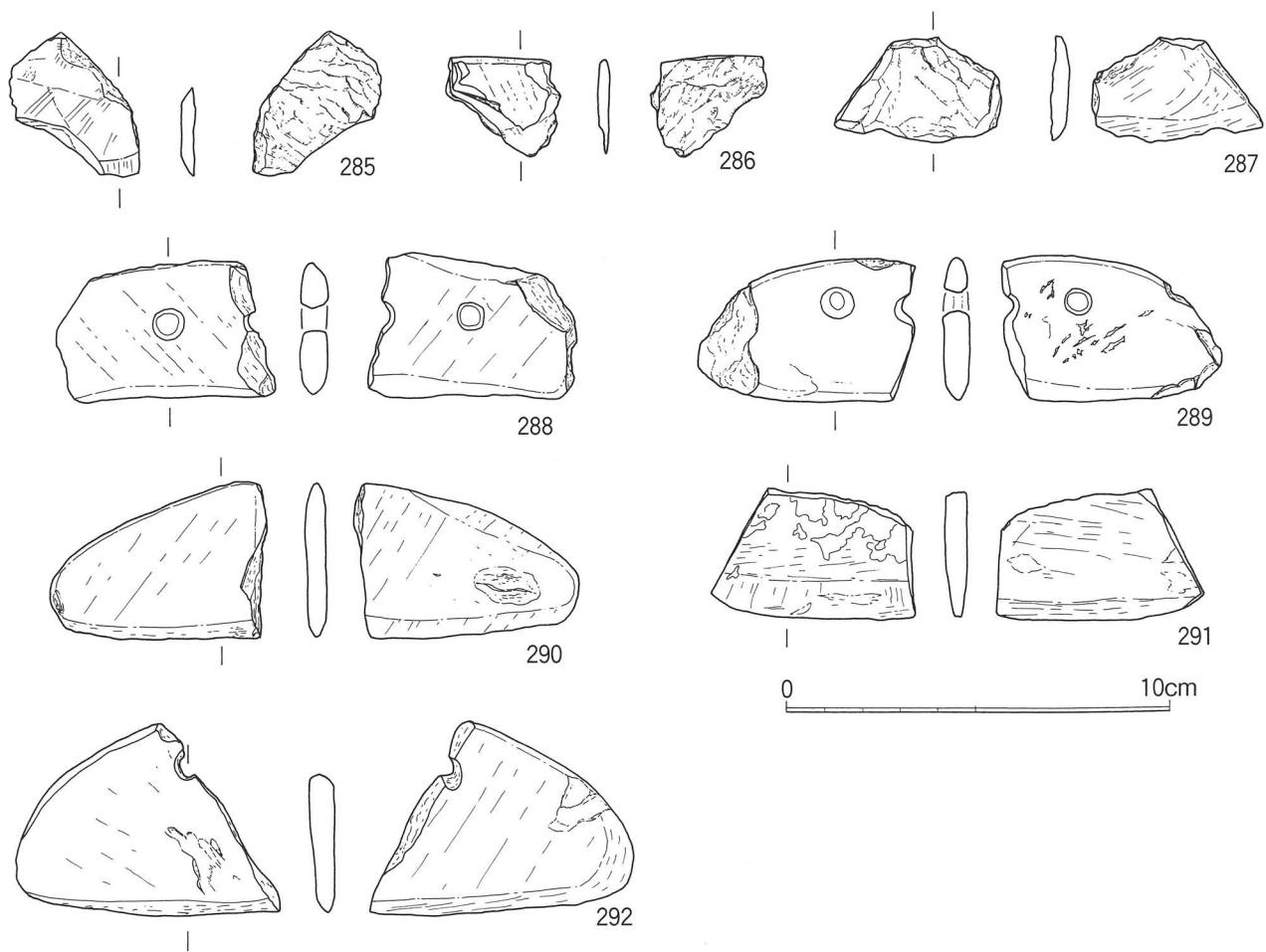


fig.39 第4遺構面 流路内出土 石庖丁

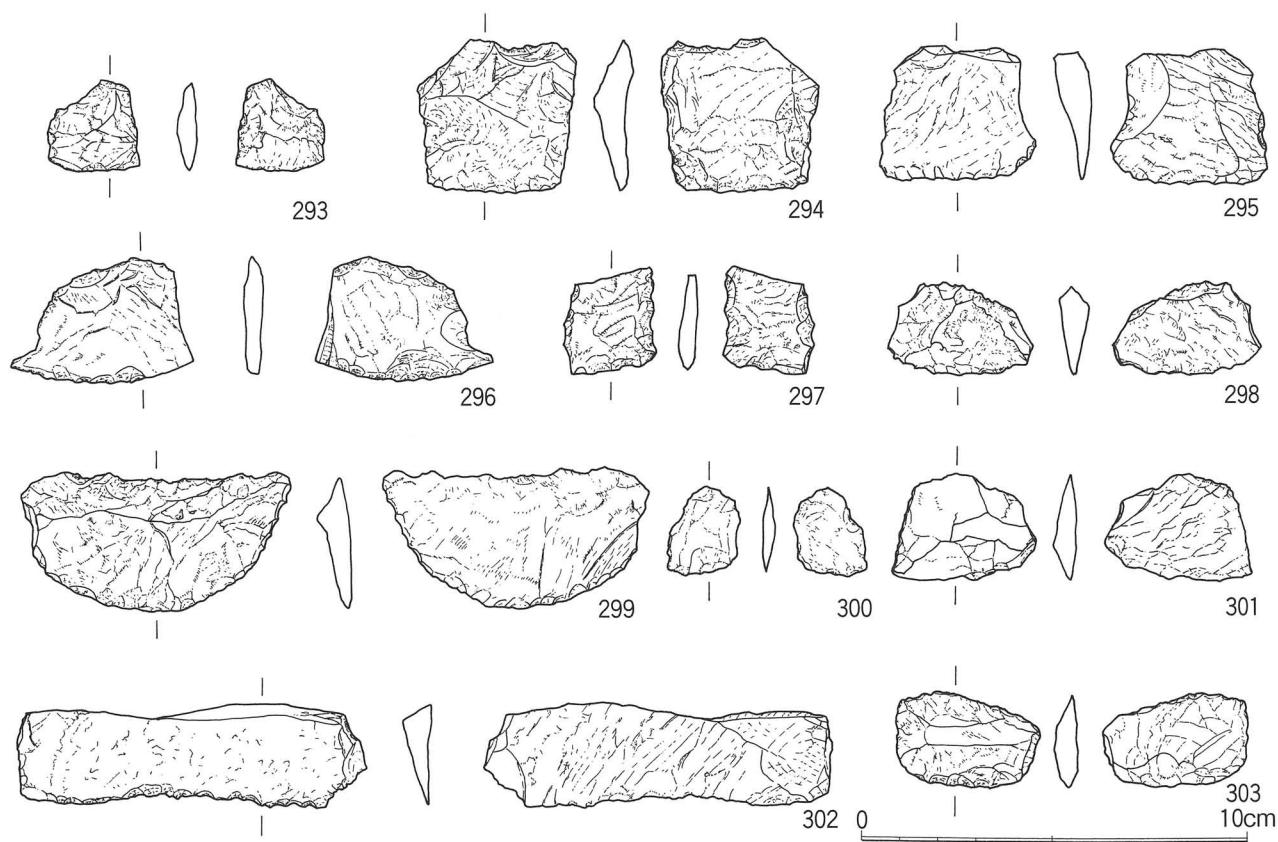


fig.40 第4遺構面 流路内出土 スクレーパー

その他の石器として、スクレーパーが流路内から出土している。流路であるため、上流あるいは当地区においての下層の資料も混在するものと考えられるため、時期については不明とせざるを得ない。全てサヌカイト製である。規模や形状については、観察表に掲載した。

#### 第28次調査出土 三角刺突文土器

第33次調査のSD201から、広口壺の口縁内面の見込み部分に三角刺突文を施す79が出土していることから、同様の施文したものを第28次調査において、出土したものを作成して掲載したい。第28次調査においては、304～311の8点の土器に三角刺突文が見られる。304は、小型の鉢もしくは甕の口縁部である。口縁端部の上面の平坦面に6条の櫛描直線文とその内側に三角刺突文を施している。305は、小型の鉢である。口縁端部外面に刻目と体部に櫛描直線文とその下段に5帯の三角刺突文の列が施されている。306、307は、壺の頸部の破片である。内面に、貼付突帯や沈線で区切り、数帯の三角刺突文の列を施している。309～311は広口壺の口縁内面見込み部施文された三角刺突文である。308は、壺の体部外面に三角刺突文の列と櫛描直線文を組み合わせた施文構成となっている。

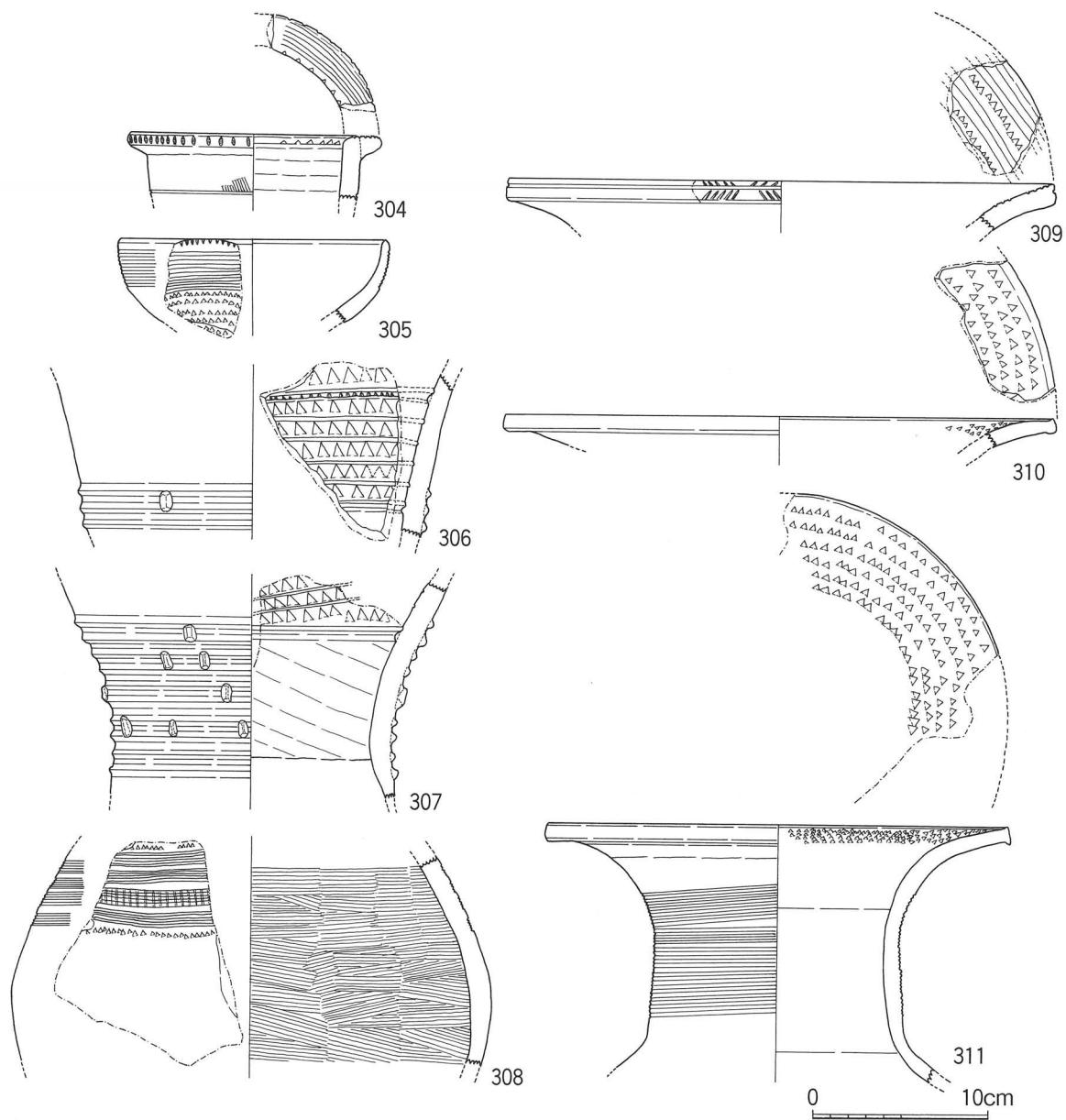


fig.41 第28次調査出土 三角刺突文土器

## 第2節 第5遺構面の流路（弥生時代中期）

第33次調査において、第28次調査での第5遺構面の流路の続きを検出していることから、同遺構面の流路内から出土した遺物について、報告する。

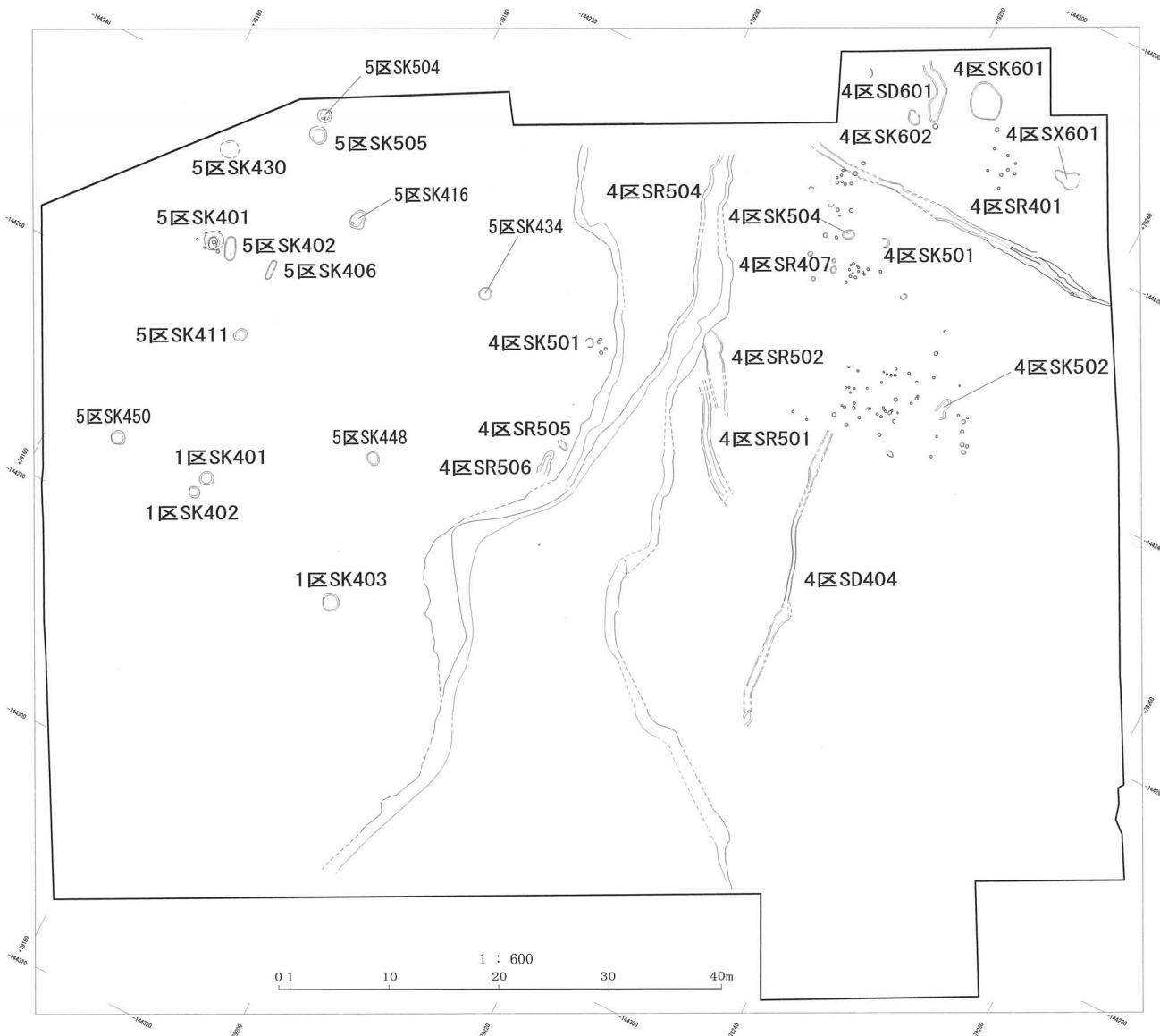


fig.42 第28・33次調査 弥生時代中期前半遺構面全体図 (S=1:600)

第33次調査の第3遺構面で検出したSD201の続きが、第28次調査の4区SR401である。この遺構は、規模も小さく、一過性の流水により形成された小流路と考えられる。第28次調査の4区SR401の中から出土し、図化できたのは312の壺の底部である。摩滅が著しいが、体部下半の外面に横方向へのヘラミガキが施されている。

4区SR501・502は、本流となる4区SR504から分岐した小流路である。313・314はSR501から出土した。313は、大きく外反する口縁をした広口壺の口縁部である。外面には、縦方向のハケメ調整のうち部分的にナデ消している。314は、小型の甕である。外面は、縦方向のハケメ調整、内面は、斜め方向のハケメ調整を密に施している。315は、SR502から出土した甕である。逆L字形の口縁部で、口縁端面には刻目が施されている。頸部には、8条のヘラ描き沈線文が施されている。316と317は、SR504から出

土した。316は、広口壺の口縁から体部にかけてのものである。外反する口縁部の端部には、刻目が施され、頸部から体部にかけて、5条の櫛描直線文が5帯施され、5条の櫛描波状文1帯、5条の櫛描直線も3帯、5条の櫛描波状文1帯が施文されている。317は、甕の口縁部から体部にかけての破片である。体部外面の上半は、斜め方向のハケメ調整を施し、下半は斜め方向の板状工具によるナデ調整を施している。

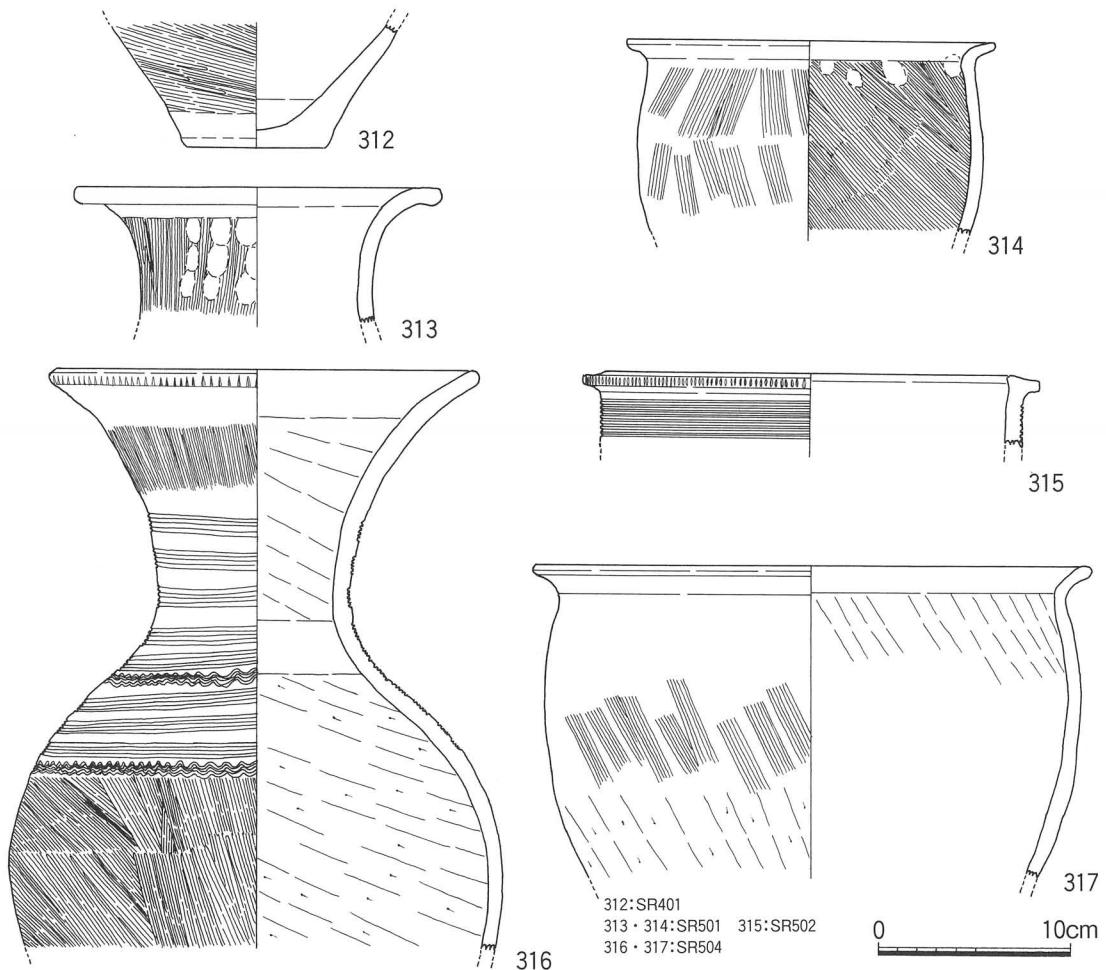


fig.43 第5遺構面 流路内出土土器

石庖丁は、318がSR501からと319がSR504から出土した。318の石材はホルンフェルス（変成岩の一種）である。形状は、弧背直線刃であり、破碎部に穿孔が1か所見られる。319の石材は砂岩である。厚みが太いことから未成品である可能性がある。

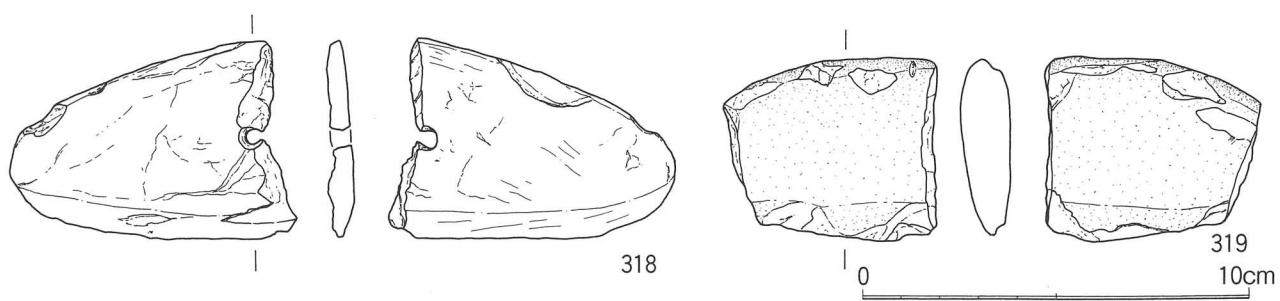


fig.44 第5遺構面 流路内出土石庖丁

石鏃は、320～322が4区SR504から出土した。320と321は、基部の形状が凹基式である。320は、形状や規模から縄文時代の石鏃である可能性がある。322は、比較的大きなものであるが、基部の形状は欠損のため不明である。

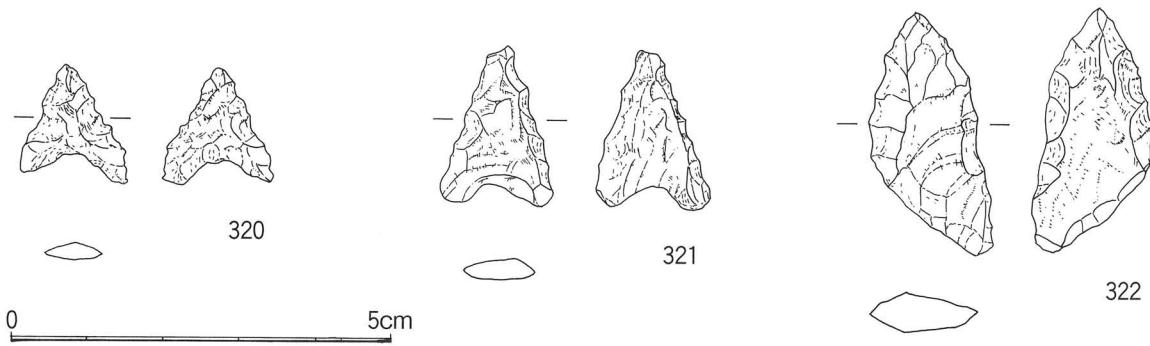


fig.45 第5遺構面 流路内出土石鏃

石錐は、323・324が4区SR504から出土した。両者ともサヌカイト製で、形状は頭部が横に広く作られた指で摘んで使用するタイプのものである。

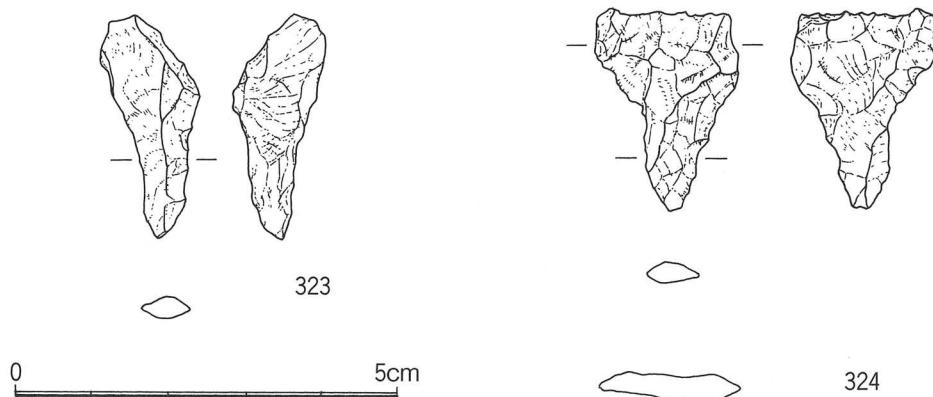


fig.46 第5遺構面 流路内出土石錐

## 参考文献

- 丸山 潔・丹治康明『楠・荒田町遺跡発掘調査報告書』1980 神戸市教育委員会
- 深井明比古・別府洋二他『神戸市西区 玉津田中遺跡－第5分冊－』1996 兵庫県教育委員会
- 福井英治編『田能遺跡発掘調査報告書』1982 尼崎市教育委員会
- 山田清朝他『兵庫県加古川市 美乃利遺跡』1997 兵庫県教育委員会
- 大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センター研究報告第5号 『弥生土器集成と編年 - 播磨編 - 』2007
- 増田孝彦・田代 宏『京都府遺跡調査概報第55冊』「奈具岡遺跡」1993 財團法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 河野一隆・野島 永『京都府遺跡調査概報第76冊』「奈具岡遺跡第7・8次」1997 財團法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 奥村清一郎・野島 永他『京都府遺跡調査報告書第36冊』「市田齊当坊遺跡」2004 財團法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 島根県立古代出雲歴史博物館『輝く出雲ブランド 古代出雲の玉作り』2009

遺物観察表1

fig.	番号	遺構名	器種	法量 口径(cm) 器高(cm)	胎土	色調 (外面) (内面)	備考	R番号	実測番号
5	1	SK103	弥生土器 甕	復元口径25.5 9.4	密 径1~3mmの大砂粒を含む。	淡赤褐色 淡赤褐色		015	61
	2	SD101	弥生土器 壺	底径6.6 6.5	密 径1mmの大砂粒を含む。	乳褐色 乳褐色		006	59

fig.	番号	遺構名	器種	法量 口径(cm) 器高(cm)	胎土	色調 (外面) (内面)	備考	R番号	実測番号
8	3	SB101	弥生土器 瓜口壺縁部	復元口径25 3.1	密 径1~2mmの大砂粒を若干含む。	灰赤褐色 乳赤褐色		027	90
	4	SB101	周壁溝 西端	碧玉製 未成品	碧玉	1.4	1.4	0.4	0.92

fig.	番号	遺構名	器種	法量 口径(cm) 器高(cm)	胎土	色調 (外面) (内面)	備考	R番号	実測番号
9	5	SB101	弥生土器 土製円板	4.3 1.2	密 径1以下の大砂粒を若干含む。	淡赤褐色 淡赤褐色		007	91
	6	SB101-PI	弥生土器 土製円板	41.3	密 径1~2mmの大砂粒を多く含む。	淡赤褐色 淡赤褐色		016	92
12	7	SB101	周壁溝 西端	刃器	サスカト	3.3	3.1	0.6	7.24
	8	SB101	周壁溝 西端	石器	珪化木	3.2	2.3	0.9	6.87
15	9	SB101	周壁溝 西端	石鋸	結晶片岩	10.6	5	0.8	51.45
	10	SK201	弥生土器 蓋	重つまみ部径4 5.5	密 径2~4mmの大砂粒を含む。	淡褐色 乳白褐色		030	82
18	11	SK201	弥生土器 甕	復元口径9 8	蜜 径2~3mmの大砂粒を含む。	淡褐色 乳白褐色		030	81
	12	SK201	弥生土器 細頸壺	口径5.6 9.2	密 径1~2mmの大砂粒を多く含む。	乳赤褐色 乳灰褐色	口縁部に深い抉 りがある	024	80
21	13	SK201	弥生土器 壺肩部	5.5	密 径2mmの大砂粒を含む。	黒褐色 淡赤褐色		023	83
	14	SK201	北西隅 石庵	彎背直線刃	片岩	9.5	3.5	0.8	40.75
24	15	SK201	北西隅 鹿形石燈	サスカト	3.3	2.5	0.7	7.94	

fig.	番号	遺構名	器種	法量 口径(cm) 器高(cm)	胎土	色調 (外面) (内面)	備考	R番号	実測番号
13	16	SK203	弥生土器 匂口壺縁部	復元口径18.4 3.6	密 径1~2mmの大砂粒を含む。	淡灰赤褐色 乳赤褐色		046	88
	17	SK203	弥生土器 底部	底径10 3.7	蜜 径1~2mmの大砂粒を若干含む。	淡黑褐色 乳白褐色		046	85
16	18	SK204	弥生土器 甕	精緻 4.4	精緻	乳茶灰色 乳茶灰色		047	84
	19	SK209	弥生土器 底部	底径8.8 8.8	密 径2~3mmの大砂粒を含む。	乳赤褐色 乳白褐色		082	86
20	20	SK209	弥生土器 底部	底径9.3 6.7	やや粗い 径1~3mmの大砂粒を多く含む。	乳赤褐色 灰褐色		082	87

fig.	番号	遺構名	器種	法量 口径(cm) 器高(cm)	胎土	色調 (外面) (内面)	備考	R番号	実測番号
15	21	SB201	弥生土器 壺肩部	3.4	密 径1~2mmの大砂粒を若干含む。	乳褐色 乳白褐色		032	78
	22	SB201	弥生土器 壺頸部	復元頭部径8 3.3	密 径1mmの大砂粒を若干含む。	赤褐色 乳赤褐色		032	77
17	23	SB201	周壁溝 南端	石鋸	サスカト	2.3	1.7	0.35	1.04
	24	SB202	西端	荒削材	碧玉	3.1	1.6	1.3	6.26

fig.	番号	遺構名	地区	遺物名	形態	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	水中・ 体積	比重	R番号	実測番号
17	24	SB202	南半上層	西端	荒削材	碧玉	3.1	1.6	1.3	6.26		50	16	
	25	SB202	南半上層	西端	荒削材	碧玉	1.9	1.2	0.9	2.72		50	17	
26	26	SB202	南半上層	西端	管玉 未製品	碧玉	1.25	0.6	0.7	0.71		50	15	
	27	SB202	南半上層	西端	管玉 未製品	碧玉	1.4	1	0.9	1.65		50	14	
28	28	SB202	北半下層	西端	管玉 破片品	碧玉	1.1	0.8	0.4	0.32		69	11	
	29	SB202-P5	西端	管玉 破片品	碧玉	0.4	0.4	0.3	0.07		91	13		
30	30	SB202	南半上層	西端	管玉 未製品	碧玉	0.4	0.7	0.3	0.09		49	12	
	31	SB202	北半下層	西端	管玉 未製品	碧玉	1.2	0.8	0.4	0.4		69	10	
32	32	SB202	北半上層	西端	水晶 未製品	水晶	1.7	0.9	0.3	0.56		58	18	

fig.	番号	遺構名	地区	遺物名	形態	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	水中・ 体積	比重	R番号	実測番号
17	33	SB202	南半上層	西端	石針加 工度要	珪化木	0.7	0.2	0.1	0.03		52	23	
	34	SB202	南半上層	西端	石針 未製品	珪化木	1	0.3	0.2	0.05		52	24	
	35	SB202	南半上層	西端	石針加 工度要	珪化木	0.75	0.3	0.2	0.06		52	25	
	36	SB202	南半上層	西端	石針加 工度要	珪化木	0.8	0.3	0.2	0.07		52	26	
	37	SB202	南半上層	西端	石針加 工度要	珪化木	1.1	0.35	0.1	0.03		52	27	
	38	SB202	南半上層	西端	石針加 工度要	珪化木	1.2	0.25	0.1	0.04		52	28	
	39	SB202	南半上層	西端	石針 未製品	珪化木	1.2	0.35	0.15	0.1		52	29	
	40	SB202	南半上層	西端	石針加 工度要	珪化木	1.4	0.45	0.3	0.21		52	30	
	41	SB202	北半上層	西端	石針 未製品	珪化木	0.9	0.3	0.25	0.11		59	21	
	42	SB202	北半上層	西端	石針 未製品	珪化木	1.2	0.5	0.3	0.12		59	22	
	43	SB202	南半下層	西端	石針 未製品	珪化木	0.7	0.2	0.1	0.03		64	50	
	44	SB202	南半下層	西端	石針加 工度要	珪化木	0.7	0.3	0.15	0.02		64	51	
	45	SB202	南半下層	西端	石針加 工度要	珪化木	0.85	0.25	0.15	0.05		64	52	
	46	SB202	南半下層	西端	石針 未製品	珪化木	0.9	0.35	0.15	0.09		64	53	
	47	SB202	南半下層	西端	石針 未製品	珪化木	1.05	0.35	0.2	0.1		64	54	
	48	SB202	南半下層	西端	石針加 工度要	珪化木	1.6	0.3	0.2	0.12		64	55	
	49	SB202	南半下層	西端	石針 未製品	珪化木	1.4	0.35	0.2	0.13		64	56	
	50	SB202	南半下層	西端	石針 未製品	珪化木	1.2	0.3	0.15	0.11		64	57	
	51	SB202	南半下層	西端	石針 未製品	珪化木	1.8	0.3	0.2	0.14		64	58	
18	52	SB202	北半下層	西端	石針	珪化木	1.2	0.3	0.2	0.09		72	31	
	53	SB202	北半下層	西端	石針	珪化木	0.95	0.25	0.15	0.1		72	32	
	54	SB202	北半下層	西端	石針	珪化木	0.5	0.2	0.15	0.03		72	33	
	55	SB202	北半下層	西端	石針 未製品	珪化木	0.45	0.2	0.2	0.03		72	34	
	56	SB202	北半下層	西端	石針 未製品	珪化木	0.6	0.2	0.1	0.03		72	35	
	57	SB202	北半下層	西端	石針	珪化木	0.7	0.25	0.25	0.05		72	36	
	58	SB202	北半下層	西端	石針	珪化木	0.7	0.25	0.1	0.01		72	37	
	59	SB202	北半下層	西端	石針加 工度要	珪化木	0.7	0.25	0.2	0.05		72	38	
	60	SB202	北半下層	西端	石針加 工度要	珪化木	0.85	0.2	0.1	0.02		72	39	
	61	SB202	北半下層	西端	石針 未製品	珪化木	0.8	0.3	0.15	0.05		72	40	
	62	SB202	北半下層	西端	石針加 工度要	珪化木	0.9	0.25	0.15	0.04		72	41	
	63	SB202	北半下層	西端	石針	珪化木	0.75	0.2	0.2	0.04		72	42	
	64	SB202	北半下層	西端	石針	珪化木	1	0.4	0.25	0.09		72	43	
	65	SB202	北半下層	西端	石針	珪化木	0.9	0.25	0.15	0.04		72	44	
	66	SB202	北半下層	西端	石針 未製品	珪化木	1	0.3	0.2	0.06		72	45	
	67	SB202	北半下層	西端	石針加 工度要	珪化木	1.1	0.2	0.1	0.03		72	46	
	68	SB202	北半下層	西端	石針加 工度要	珪化木	1.3	0.3	0.15	0.08		72	47	
	69	SB202	北半下層	西端	石針 未製品	珪化木	1.8	0.45	0.2	0.29		72	48	
	70	SB202	北半下層	西端	石針 未製品	珪化木	1.8	0.45	0.25	0.31		72	49	
	71	SB202	北半下層	西端	石鋸	結晶 片岩	16	0.85	0.1	0.28		75	97	
18	72	SB202	南半上層	西端	銘生土器 胴部	2.5							038	79
	73	SB202	南半上層	西端	銘生土器 頭部	2.3	1.7							

遺物觀察表2

fig.	番号	遺構名	器種	法 量 口徑(cm) 器高(cm)	胎土	色 調 (外 面) (内 面)	備考	R番号	実測 番号
20	75	SB203	弥生土器 底部	底径8.6 8.9	やや粗い 径1~4mmの砂粒を多く含む。	淡褐色 淡褐色		085	74
	76	SB203	弥生土器 底部	復元口徑7.6 2.7	密 径1~2mmの砂粒を含む。	淡赤褐色 乳褐色		080	75
	77	SB203	弥生土器 壺頸部	復元頂部径14 4.8	精緻 径2~4mmの砂粒を含む。	乳赤褐色 乳赤褐色		083	76
	78	SB203	台石				重量 最大幅 最大厚 水中 体積	R番号	実測 番号
				20.6	13.7	7.7	4.2kg		86 89

fig.	番号	遺構名	器種	法 量 口徑(cm) 器高(cm)	胎土	色 調 (外 面) (内 面)	備考	R番号	実測 番号
23	79	SD201	弥生土器 広口壺	復元口徑35 4.7	密 径1~3mmの砂粒を多く含む。	乳褐色 乳褐色	口縁内面に塗貼付安哥 口縁外部下部に耳状突起	018	62
	80	SD201	弥生土器 壺	復元口徑43 10	密 径1~2mmの砂粒を多く含む。	乳赤褐色 乳赤褐色	口縁外部下部に把手あり	018	63
	81	SD201	弥生土器 底部	底径13.2 3.8	やや粗い 径2~4mmの砂粒を多く含む。	乳褐色 乳白褐色		018	64
	82	SD201	弥生土器 底部	底径不明 6.7	やや粗い 径2~4mmの砂粒を多く含む。	淡赤褐色 乳褐色	底部剥離	026	65
	83	SD201	弥生土器 底部	底径6.4 5.3	密 径2~3mmの砂粒を含む。	乳白褐色 乳白褐色		025	66
	84	SD201	弥生土器 底部	底径11 6.4	やや粗い 径2~4mmの砂粒を多く含む。	淡赤褐色 乳白褐色		018	67
	85	SD201	弥生土器 底部	底径6.8 4.3	密 径1~2mmの砂粒を多く含む。	暗赤褐色 明赤褐色		018	68
	86	SD201	弥生土器 底部	復元口徑7.6 4.9	やや粗い 径2~4mmの砂粒を含む。	淡赤褐色 乳赤褐色		018	69
	87	SD201	弥生土器 底部	復元口徑7.2 5.3	密 径1~3mmの砂粒を含む。	乳赤褐色 淡褐色		018	70
	88	SD201	弥生土器 底部	底径5.6 5	やや粗い 径1~4mmの砂粒を含む。	赤褐色 淡褐色		018	71
28	89	SD201	弥生土器 底部	復元口徑11.4 5.7	密 径1~4mmの砂粒を含む。	乳赤褐色 乳赤褐色		018	72
	90	SD201	弥生土器 底部	復元口徑8.8 5.8	密 径1~3mmの砂粒を含む。	乳褐色 淡褐色		018	73
	91	SD201	弥生土器 広口口縁部	復元口徑6 6.1	密 径1~3mmの砂粒を含む。	淡赤褐色 乳白褐色		018	93
	92	SD201	弥生土器 広口口縁部	復元口徑22 4.8	密 径1~2mmの砂粒を多く含む。	淡赤褐色 乳白褐色		018	94
	93	SD201	弥生土器 広口壺部	復元頂部径14.4 5.3	密 径1~2mmの砂粒を含む。	淡赤褐色 乳白褐色		018	95

fig.	番号	遺構名	器種	法 量 口徑(cm) 器高(cm)	胎土	色 調 (外 面) (内 面)	備考	R番号	実測 番号
25	94	2区SR 303上層	弥生土器 広口壺	15.8 5.5	密 径1~2mmの砂粒を多く含む。	茶灰褐色 茶灰褐色		785	246
	95	2区SR 303上層	弥生土器 壺	14.6 7	密 径1~2mmの砂粒を多く含む。	乳灰褐色 暗乳褐色		777	240
	96	2区SR 303上層	弥生土器 広口壺	33.4 4.8	密 径1~2mmの砂粒を含む。	乳灰褐色 乳灰白色		817	219
	97	2区SR 303上層	弥生土器 広口壺	21.8 7.4	密 径1~2mmの砂粒を多く含む。	乳黄褐色 乳黄褐色		782	248
	98	2区SR 303上層	弥生土器 広口壺	22.1 6	密 径1~2mmの砂粒を多く含む。	乳黄褐色 乳黄褐色		778	192
	99	2区SR 303上層	弥生土器 広口壺	21.1 8.8	密 径1~5mmの砂粒を多く含む。	乳赤褐色 乳赤褐色		786	191
	100	2区SR 303上層	弥生土器 壺	底径6.7 5.5	やや粗い 径1~3mmの砂粒を多く含む。	暗乳灰褐色 乳褐色		817	336
	101	2区SR 303上層	弥生土器 広口壺	24 11.7	密 径1~2mmの砂粒を含む。	乳茶灰褐色 乳茶灰褐色		778	186
	102	2区SR 303上層	弥生土器 壺	24.4 8.5	密 径1~2mmの砂粒を多く含む。	乳茶灰色 乳茶灰色		776	190
	103	2区SR 303上層	弥生土器 壺	22 6	密 径1~2mmの砂粒を多く含む。	乳茶灰色 乳茶灰色		782	189
29	104	2区SR 303上層	弥生土器 壺	32.3 9.7	密 径1~3mmの砂粒を多く含む。	乳茶灰色 乳茶灰色		776	187
	105	2区SR 303上層	弥生土器 鉢	29.6 6.2	やや粗い 径1~3mmの砂粒を多く含む。	乳茶灰褐色 乳茶灰色		778	249
	106	2区SR 303下層	弥生土器 水差形形	10.3 29.5	密 径1~2mmの砂粒を多く含む。	茶灰色 乳灰褐色		954	34
	107	2区SR 303下層	弥生土器 広口壺	19.6 7.1	密 径1~2mmの砂粒を多く含む。	乳茶灰色 乳茶灰色		957	221
	108	2区SR 303下層	弥生土器 壺	底径6.4 4.1	密 径1~3mmの砂粒を多く含む。	乳茶褐色 乳茶褐色		954	328
	109	2区SR 303下層	弥生土器 鉢	底径11.6 6.5	密 径1~2mmの砂粒を多く含む。	乳茶灰色 乳茶灰色		953	330
	110	2区SR 303下層	弥生土器 蓋	底径12.5x10.7 1.2	やや粗い 径1~4mmの砂粒を多く含む。	乳褐色 乳褐色		942	329

fig.	番号	遺構名	地区	遺物名	形態	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	比重	R番号	実測 番号
26	111	SR303	28次 2区	石鐵	凹基無莖	サヌカイト	2	1.3	0.3	0.88		782	109
	112	SR303	28次 2区	石鐵	凹基無莖	サヌカイト	2	1.5	0.2	0.85		818	112
	113	SR303	28次 2区	石鐵	凹基無莖	サヌカイト	2	1.3	0.3	0.88		779	108
	114	SR303	28次 2区	石鐵	凹基無莖	サヌカイト	3.2	1.6	0.3	1.26		958	114

fig.	番号	遺構名	地区	遺物名	形態	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	比重	水 中 体積	比 重	R番号	実測 番号
26	115	SR303	28次 2区	石鐵	凹基無莖	サヌカイト	2.5	(1.4)	0.4	0.84				785	110
	116	SR303	28次 2区	石鐵	円基無莖	サヌカイト	3.1	1.85	0.35	1.89				958	115
	117	SR303	28次 2区	石鐵	円基無莖	サヌカイト	3	1.9	0.4	2.07				801	113
	118	SR303	28次 2区	石鐵	平基無莖	サヌカイト	2.6	(2.1)	0.45	1.94				786	111

fig.	番号	遺構名	地区	遺物名	形態	素材	最大長	最大幅	最大厚	重量	比重	R番号	実測 番号	
27	119	SR303	28次 2区	石唐丁	破片	片岩	(3.8)	(5.5)	0.7	16.03	5.8	2.76	801	227
	120	SR303	28次 2区	石唐丁	弧背直線刃	粘板岩	2.8	3.9	0.55	6.4	2.4	2.67	801	29
	121	SR303	28次 2区	石唐丁	破片	頁岩	(3.7)	(3.9)	0.75	9.24	3.68	2.51	776	226
	122	SR303	28次 2区	石唐丁	弧背直線刃	粘板岩	3.8	5.7	0.5	19.1	7.1	2.69	938	30
	123	SR303	28次 2区	石唐丁	直背凸刃	粘板岩	3.7	5.7	0.55	19.65	7.2	2.73	776	28
	124	SR303	28次 2区	石唐丁	弧背直線刃	粘板岩	4.9	9.3	0.8	48.28	19.4	2.49	958	32
	125	SR303	28次 2区	石唐丁	弧背直線刃	粘板岩	4	7.5	0.8	30.08	11.2	2.69	938	31

fig.	番号	遺構名	器種	法 量 口徑(cm) 器高(cm)	胎土	色 調 (外 面) (内 面)	備考	R番号	実測 番号					
28	126	4区SR405	弥生土器 第3層上	底径5.2	密	乳褐色 暗赤褐色							1813	216
	127	4区SR405	弥生土器 第3層上	底径5.2	密	乳赤褐色 乳赤褐色							1836	266
	128	4区SR405	弥生土器 第3層上	底径5.5	密	乳赤褐色 乳赤褐色							1834	275
	129	4区SR405	弥生土器 第3層上	底径6	密	乳褐色 茶褐色							1867	272
	130	4区SR405	弥生土器 第3層上	底径6	密	乳褐色 乳褐色							1836	227
	131	4区SR405	弥生土器 第2層下層	底径5.5	密	乳赤褐色 乳赤褐色							1865	225
	132	4区SR405	弥生土器 第2層下層	底径6	密	乳褐色 乳褐色							1877	226
	133	4区SR405	弥生土器 第2層下層	底径5.9	密	乳褐色 乳褐色							1870	267
	134	4区SR405	弥生土器 第2層下層	底径5.8	密	乳橙褐色 乳橙褐色							1905	270
	135	4区SR405	弥生土器 広口壺	底径13	密	暗赤褐色 乳赤褐色							1957	214
29	140	4区SR405	弥生土器 第3層a	底径7.6	密	乳茶灰褐色 暗乳茶灰褐色							1918	298
	141	4区SR405	弥生土器 第3層a	底径6	密	乳茶灰褐色 乳茶灰褐色							1982	223
	142	4区SR405	弥生土器 第3層a	底径4.1	密	乳灰褐色 乳灰褐色							1836	263
	143	4区SR405	弥生土器 第3層a	底径5	密	乳灰褐色 乳灰褐色							1951	203
	144	4区SR405	弥生土器 第3層a	底径4.8	密	乳茶灰褐色 乳茶灰褐色							1951	244
	145	4区SR405	弥生土器 第3層a	底径14.8	密	乳赤褐色 乳赤褐色							1932	285
	146	4区SR405	弥生土器 第3層a	底径33.5	密									

遺物觀察表3

fig.	番号	遺構名	器種	法量 口径(cm) 高さ(cm)	胎土	色調 (外觀) (内面)	備考	R番号	実測 番号
29	155	4区SR405 第3層a	弥生土器 無頸壺or鉢	11.2 9	密 徑1~2mmの砂粒を多く含む。	乳茶褐色 乳茶褐色		1980	204
	156	4区SR405 第3層a	弥生土器 広口壺	19.2 5	密 徑1~2mmの砂粒を多く含む。	乳灰褐色 乳灰褐色		1951	203
	157	4区SR405 第3層a	弥生土器 甕	25.2 5.5	密 徑1~2mmの砂粒を多く含む。	乳灰褐色 乳灰褐色		1921	309
	158	4区SR405 第3層a	弥生土器 甕	35.7 5	密 徑1~2mmの砂粒を多く含む。	乳茶灰色 乳茶灰色		1961	235
	159	4区SR405 第3層a	弥生土器 甕	38.2 10	密 徑1~2mmの砂粒を多く含む。	乳赤褐色 乳褐色		1980	234

fig.	番号	遺構名	器種	法量 口径(cm) 高さ(cm)	胎土	色調 (外觀) (内面)	備考	R番号	実測 番号
30	160	4区SR405 第3層b	弥生土器 広口壺	32 3.7	密 徑1~2mmの砂粒を多く含む。	乳灰褐色 乳灰褐色		1978	264
	161	4区SR405 第3層b	弥生土器 直口壺	21.4 7.5	密 徑1~2mmの砂粒を多く含む。	乳赤灰褐色 乳赤褐色		1930	290
	162	4区SR405 第3層b	弥生土器 甕	22 7.6	やや粗い 徑1~6mmの砂粒を多く含む。	乳黑褐色 暗乳褐色		1941	331
	163	4区SR405 第3層b	弥生土器 広口壺	18.3 8.7	密 徑1~2mmの砂粒を多く含む。	乳褐色 乳褐色		1936	283
	164	4区SR405 第3層b	弥生土器 広口壺	17.8 4.3	密 徑1~2mmの砂粒を多く含む。	乳茶灰色 乳茶灰色		1959	292
	165	4区SR405 第3層b	弥生土器 直口壺	16.4 6.4	密 徑1~1mmの砂粒を含む。	乳褐色 乳灰褐色		1865	262
	166	4区SR405 第3層b	弥生土器 広口壺	25 9.5	やや粗い 徑1~6mmの砂粒を多く含む。	乳灰褐色 乳灰褐色		1972	286
	167	4区SR405 第3層b	弥生土器 小型広口壺	10.6 11.6	密 徑1~2mmの砂粒を多く含む。	茶褐色 茶褐色		1978	36
	168	4区SR405 第3層b	弥生土器 鉢	15.8 9.8	密 徑1~2mmの砂粒を多く含む。	乳茶褐色 乳茶褐色		1978	38
	169	4区SR405 第3層b	弥生土器 甕	19.6 18.5	密 徑1~2mmの砂粒を多く含む。	淡茶褐色 淡茶褐色		1969	37
	170	4区SR405 第3層b	弥生土器 甕	28.8 11.8	密 徑1~2mmの砂粒を多く含む。	茶褐色 茶褐色		1931	288

fig.	番号	遺構名	器種	法量 口径(cm) 高さ(cm)	胎土	色調 (外觀) (内面)	備考	R番号	実測 番号
31	171	4区SR405 第3層c	弥生土器 直口壺	11.4 8.4	密 徑1~2mmの砂粒を多く含む。	乳灰白色 乳灰白色		1974	250
	172	4区SR405 第3層d	弥生土器 広口壺	11 21.2	密 徑1~3mmの砂粒を多く含む。	乳褐色 暗乳褐色		1996	35
	173	4区SR405 第3層c	弥生土器 鉢	15.2 4.7	密 徑1~2mmの砂粒を多く含む。	乳灰褐色 乳灰褐色		1976	252
	174	4区SR405 第3層c	弥生土器 広口壺	19 4.5	密 徑1~2mmの砂粒を多く含む。	乳赤褐色 乳茶灰色		1963	256
	175	4区SR405 第3層c	弥生土器 広口壺	18.8 15	密 徑1~3mmの砂粒を多く含む。	乳黃褐色 乳黃褐色		1958	64
	176	4区SR405 第3層c	弥生土器 甕	25.1 5.2	密 徑1~2mmの砂粒を多く含む。	乳灰褐色 乳灰褐色		1953	261
	177	4区SR405 第3層c	弥生土器 甕	24.7 7.6	密 徑1~2mmの砂粒を多く含む。	乳茶灰褐色 乳茶灰褐色		1973	315
	178	4区SR405 第3層c	弥生土器 甕	21.5	密 徑1~2mmの砂粒を多く含む。	乳茶灰褐色 乳茶灰褐色		1975	255
	179	4区SR405 第3層c	弥生土器 広口壺	29.7 2.4	密 徑1~2mmの砂粒を多く含む。	乳茶灰色 乳赤褐色		1977	260
	180	4区SR405 第3層c	弥生土器 甕	底径8.8 17.7	密 徑1~3mmの砂粒を多く含む。	乳黃黃色 乳黃黃色		1958	65
	181	4区SR405 第3層c	弥生土器 甕	28.3 4	密 徑1~2mmの砂粒を含む。	乳灰褐色 乳灰褐色		1975	281
	182	4区SR405 第3層c	弥生土器 甕	31.1 10.3	密 徑1~2mmの砂粒を多く含む。	乳灰褐色 乳赤褐色		1963	253

fig.	番号	遺構名	器種	材質	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	R番号	実測 番号
32	183	4区SR405 第3層	石鐵 平基無蓋	サヌカイト	2.7	1.8	0.3	1.03		1932	S152
	184	4区SR405 第3層	石鐵 有蓋	サヌカイト	3.1	1.25	0.3	1.09		1951	S163
	185	4区SR405 西	石鐵 凹基無蓋	サヌカイト	2.75	1.5	0.4	1.95		1904	S142
	186	4区SR405 第3層	石鐵 平基無蓋	サヌカイト	2.5	1.2	0.35	1.1		1951	S162
	187	4区SR405 西	石鐵 凹基無蓋	サヌカイト	(2.5)	1.3	0.35	1.36		1885	S136
	188	4区SR405 第3層	石鐵 平基無蓋	サヌカイト	(2.3)	1.6	0.5	1.86		1950	S158
	189	4区SR405 西	石鐵 凹基無蓋	サヌカイト	1.8	1.5	0.3	0.76		1835	S137
	190	4区SR405 第3層	石鐵 平基無蓋	サヌカイト	(1.8)	1.6	0.4	0.95		1955	S164
	191	4区SR405 西	石鐵 平基無蓋	サヌカイト	2.1	1.35	0.4	1.16		1835	S141
	192	4区SR405 第3層	石鐵 平基無蓋	サヌカイト	2.3	1.6	0.3	1.28		1918	S150
	193	4区SR405 第3層	石鐵 凹基無蓋	サヌカイト	2.4	1.4	0.2	1.02		1950	S157
	194	4区SR405 東	石鐵 凹基無蓋	サヌカイト	1.8	1.4	0.35	0.45		1867	S134
	195	4区SR405 西	石鐵 凹基無蓋	サヌカイト	(1.7)	(1.5)	0.3	0.69		1835	S138
	196	4区SR405 西	石鐵 凹基無蓋	サヌカイト	1.8	1.4	0.25	0.71		1868	S143
	197	4区SR405 中腹上層	石鐵 凹基無蓋	サヌカイト	2	(1.2)	0.2	0.61		S170	
	198	4区SR405 西	石鐵 凹基無蓋	サヌカイト	1.8	1.4	0.3	0.79		1835	S139
	199	4区SR405 西	石鐵 凹基無蓋	サヌカイト	2	1.6	0.3	0.72		1835	S140

fig.	番号	遺構名	器種	材質	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	R番号	実測 番号
32	200	4区SR405 第3層	石鐵 凹基無蓋	サヌカイト	2.3	1.7	0.5	0.9		1942	S154
	201	4区SR405 第3層	石鐵 凹基無蓋	サヌカイト	2.1	1.6	0.3	0.79		1947	S156
	202	4区SR405 第3層	石鐵 凹基無蓋	サヌカイト	2.4	1.55	0.35	1.13		1950	S159
	203	4区SR405 第3層	石鐵 平基無蓋	サヌカイト	2.7	1.55	0.4	1.56		1951	S160
	204	4区SR405 西	石鐵 凹基無蓋	サヌカイト	2.9	(1.6)	0.25	1.07		1855	S144
	205	4区SR405 第3層	石鐵 平基無蓋	サヌカイト	2.5	1.7	0.4	1.63		1942	S155
	206	4区SR405 第3層	石鐵 平基無蓋	サヌカイト	2.7	1.5	0.5	1.78		1939	S153

fig.	番号	遺構名	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	比重	水 中 体積	R番号	実測 番号
33	207	4区SR405 第3層	石庖丁	(2.7)	(3.5)	(0.7)	5.61	2.09	2.68	1981	S235
	208	4区SR405 第3層	石庖丁	(2.8)	(3)	0.35	4.16	1.56	2.67	1932	S233
	209	4区SR405 第3層	石庖丁	(3.6)	(3.9)	0.5	8.27	3.4	2.43	1920	S231
	210	4区SR405 第3層	石庖丁 弧背鋸刃	3.8	6.2	0.8	28.6	9.8	2.92	1977	S36
	211	4区SR405 第3層	石庖丁 穿孔ヶ所	3.3	6.1	1.05	35.53	14	2.54	1945	S34
	212	4区SR405 第3層	石庖丁	(4.8)	4.5	1.1	35.6	15	2.38	1943	S234
	213	4区SR405 第3層	石庖丁	4	4.9	0.7	27.12	9.2	2.95	1938	S33
	214	4区SR405 第3層	石庖丁 直背鋸刃	3.5	5.4	0.6	21.68	7.3	2.97	1968	S35
	215	4区SR405 第3層	石庖丁 直背鋸刃	(6.2)	(4.9)	0.6	20.1	7.2	2.79	1920	S232
	216	4区SR405 第3層	石庖丁 直背鋸刃	5.4	9.1	1	70.3	31.3	2.25	1990	S270
	217	4区SR405 第3層	石庖丁 弧背鋸刃	12.6	5.2	1.7				1971	S199

fig.	番号	遺構名	器種	法量 口径(cm) 高さ(cm)	胎土	色調 (外觀) (内面)	備考	R番号	実測 番号	
34	223	1区	弥生土器 壺	9.8 6.7	密 徑1mm以下の砂粒を含む。	乳茶灰色 乳茶褐色			156	69
	224	1区	弥生土器 直口壺	16.2 6	やや粗い 徑1~2mmの砂粒を多く含む。	乳赤褐色 乳赤褐色			44	334
	225	1区	弥生土器 小型丸底壺	10.2 8.3	密 徑1mm以下の砂粒を含む。	茶褐色 茶褐色			84	70
	226	1区	弥生土器 広口壺	6.3	徑1~2mmの砂粒を多く含む。	赤褐色 赤褐色			14	50
	227	1区	弥生土器 広口壺	16.8 5	密 徑1~2mmの砂粒を多く含む。	乳灰褐色 乳灰褐色			44	231
	228	1区	弥生土器 広口壺	18.4 4.6	密 徑1~2mmの砂粒を多く含む。	乳褐色 乳褐色			68	232
	229	1区	弥生土器 広口壺	20.7 8	密 徑1~2mmの砂粒を多く含む。	乳茶灰色 乳茶灰色			72	229
	230	1区	弥生土器 広口壺	22.7 9	密 徑1~2mmの砂粒を多く含む。	茶褐色 茶褐色			156	57
	231	1区	弥生土器 広口壺	22.8 13.9	密 					

遺物観察表4

fig.	番号	遺構名	器種	法 量 器高(cm)	胎土	色 調 (外 面) (内 面)	備考	R番号	実測 番号		
35	246	1区 弥生土器 SR202	底径7.2~7.6 腹 5.2	密 直径~3mmの大粒を多く含む。	乳褐色 暗乳褐色			64	76		
	247	1区 弥生土器 SR202	底径5.7~7.1 腹 3.7	密 直径~2mmの大粒を多く含む。	乳褐色 乳褐色			50	165		
	248	1区 弥生土器 SR202	底径6.0 腹 6.8	密・やや粗い 直径~5mmの大粒を多く含む。	赤褐色 暗茶褐色			86	78		
	249	1区 弥生土器 SR202	底径5.0 腹 4.5	密・精良 直径~5mmの大粒を多く含む。	暗茶褐色 暗茶褐色			85	73		
fig.	番号	遺構名	器種	法 量 器高(cm)	胎土	色 調 (外 面) (内 面)	備考	R番号	実測 番号		
36	250	1区 弥生土器 SR401	広口壺 21.4 6.2	密 直径~2mmの大粒を多く含む。	茶灰褐色 茶灰褐色			311	380		
	251	1区 弥生土器 SR401	広口壺 23.9 6.2	密 直径~2mmの大粒を含む。	乳茶灰色 暗乳褐色			339	230		
	252	1区 弥生土器 SR401	広口壺 19 4	密 直径~2mmの大粒を多く含む。	乳赤褐色 乳茶灰色			329	233		
	253	1区 弥生土器 SR401	広口壺 42.2 2.4	密 直径~2mmの大粒を多く含む。	乳褐色 乳褐色			335	258		
	254	2区 弥生土器 SR401	広口壺 19 9.7	密 直径~2mmの大粒を多く含む。	乳灰白色 乳灰白色			910	158		
	255	2区 弥生土器 SR401	広口壺 20.5 17.6	密 直径~2mmの大粒を多く含む。	乳褐色 乳褐色			910	157		
	256	1区 弥生土器 SR401	脚幅部 4.5	密 直径~3mmの大粒を多く含む。	暗赤褐色 暗赤褐色			329	259		
	257	2区 弥生土器 SR401	壺 底径6.5 5.6	密 直径~2mmの大粒を多く含む。	乳灰褐色 乳灰褐色			910	162		
	258	2区 弥生土器 SR401	壺 底径 6.9	やや粗い 直径~3mmの大粒を多く含む。	乳茶灰色 乳褐色			910	161		
	259	2区 弥生土器 SR401	壺 底径9.2 11	やや粗い 直径~3mmの大粒を多く含む。	乳赤褐色 乳灰褐色			910	160		
	260	2区 弥生土器 SR401	壺 11	密 直径~3mmの大粒を多く含む。	乳茶灰色 乳赤褐色			910	159		
fig.	番号	遺構名	器種	材質	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	R番号	実測 番号
37	261	1区 平基無茎 SR202	石鏃 サヌカイト	2	1.2	0.2	0.59			45	S73
	262	1区 平基無茎 SR202	石鏃 サヌカイト	1.6	1.5	0.2	0.7			68	S79
	263	1区 内基無茎 SR202	石鏃 サヌカイト	2.6	1.6	0.3	1.42			47	S74
	264	1区 平基無茎 SR202	石鏃 サヌカイト	2.4	1.6	0.5	1.37			64	S76
	265	1区 凹基無茎 SR202	チャート (1.8)	1.2	0.3	0.58				68	S77
	266	1区 凹基無茎 SR202	石鏃 サヌカイト	(1.7)	1.8	0.3	0.88			76	S80
	267	1区 凹基無茎 SR202	石鏃 サヌカイト	2.2	1.6	0.3	1.04			98	S81
	268	1区 凹基無茎 SR202	石鏃 サヌカイト	2.8	1.45	0.25	1.05			44	S72
	269	1区 凹基無茎 SR202	石鏃 サヌカイト	3.1	2.1	0.4	1.7			74	S78
	270	1区 凹基無茎 SR202	石鏃 サヌカイト	3.2	1.55	0.4	1.83			49	S75
	271	1区 凹基無茎 SR202	石鏃 サヌカイト	2.9	2	0.4	1.39			327	S83
	272	1区 平基無茎 SR401	石鏃 サヌカイト	2.8	1.65	0.35	2.23			339	S87
	273	1区 平基無茎 SR401	石鏃 サヌカイト	(2.9)	1.8	0.6	2.88			327	S85
	274	1区 平基無茎 SR401	石鏃 サヌカイト	(3)	1.9	0.5	2.22			336	S86
fig.	番号	遺構名	器種	材質	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	R番号	実測 番号
38	275	1区 ツマミタイプ SR201	石錐 サヌカイト	(2.2)	1.4	0.8	2.85			21	S71
	276	1区 ツマミタイプ SR201	石錐 サヌカイト	3.3	1.2	0.5	2.47			28	S122
	277	1区 ツマミタイプ SR202	石錐 サヌカイト	2.7	0.9	0.5	1.06			156	S82
	278	1区 棒状タイプ SR401	石錐 サヌカイト	2.6	0.7	0.4	0.9			334	S129
	279	1区 棒状タイプ SR401	石錐 サヌカイト	(2.3)	0.6	0.25	0.73			339	S130
	280	1区 ツマミタイプ SR401	石錐 サヌカイト	2.7	(2.3)	0.5	2.87			330	S128
	281	4区 ツマミタイプ 第3層	石錐 サヌカイト	2.7	1.3	0.5	1.51			516	S169
	282	4区 ツマミタイプ 第3層	石錐 サヌカイト	4	1.1	0.35	1.67			1943	S145
	283	4区 棒状タイプ 第3層	石錐 サヌカイト	3.7	1	0.7	2.55			1981	S148
	284	4区 棒状タイプ 第3層	石錐 サヌカイト	4.6	1.1	0.5	2.99			1974	S146
fig.	番号	遺構名	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	水中・ 体積	比重	R番号	実測 番号
39	285	2区東 石庖丁 SR302	石庖丁 破片	(3.4)	(3.9)	(0.4)	5.02	1.87	2.68	815	S225
	286	1区東 石庖丁 SR202	石庖丁 破片	(2.9)	(2.7)	0.3	3.47	1.28	2.71	14	S219
fig.	番号	遺構名	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	水中・ 体積	比重	R番号	実測 番号
40	287	1区中央 石庖丁 SR401	石庖丁 破片	(4.5)	(2.8)	(0.5)	7.32	2.52	2.9	330	S224
	288	1区東 石庖丁 SR202	石庖丁 弱直背凹刃	3.6	5.4	0.8	25.84	8.9	2.9	341	S26
	289	1区東 石庖丁 SR202	石庖丁 彎背弱凸刃	5.6	3.8	0.7	24.56	8.8	2.79	48	S24
	290	1区東 石庖丁 SR202	石庖丁 彎背直線刃	4.2	5.5	0.6	22.83	8	2.85	55	S27
	291	1区中央 石庖丁 SR401	石庖丁 破片	(5.4)	(3.5)	0.5	16.9	6.8	2.49	327	S223
	292	1区東 石庖丁 SR202	石庖丁 弱直背直線刃	5.1	6.6	0.7	31.59	11.4	2.77	48	S25
fig.	番号	遺構名	器種	材質	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考	R番号	実測 番号
41	293	2区西 スクリーパー 削器 SH303下層	サヌカイト	2.4	2.3	0.55	3.79			935	S248
	294	2区西 スクリーパー 削器 SH303下層	サヌカイト	4.1	4.2	0.9	16.5			939	S247
	295	4区西 スクリーパー 第3層	サヌカイト	3.5	4.1	0.9	11.64			1951	S261
	296	4区北 スクリーパー 刃器 SR401	サヌカイト	3.1	4.7	0.5	8.13			1741	S258
	297	4区西 スクリーパー 削器 SR405東	サヌカイト	(2.6)	2.2	0.5	4.11			1867	S262
	298	4区西 スクリーパー 刃器 SH403下層	サヌカイト	2.4	3.9	0.8	5.32			1883	S263
	299	4区西 スクリーパー 刃器 SH403下層	サヌカイト	3.5	7	0.8	22.25			1986	S260
	300	1区東 スクリーパー 刃器 SR202北	サヌカイト	2.3	1.8	0.3	1.21			73	S215
	301	1区東 スクリーパー 刃器 SR202北	サヌカイト	3.6	2.8	0.6	5.99			73	S213
	302	4区西 スクリーパー 刃器 SH403第層	サヌカイト	2.7	9.2	0.8	23.84			1981	S259
	303	1区東 スクリーパー 刃器 SR202北	サヌカイト	3.8	2.5	0.7	6.87			73	S212
fig.	番号	遺構名	器種	法 量 器高(cm)	胎土	色 (外 面) (内 面)	備考	R番号	実測 番号		
42	304	5区 弥生土器 鉢?	密 直径~3mmの大粒を多く含む。	14.5 3.6		乳褐色 乳褐色				495	
	305	5区 弥生土器 鉢	密 直径~2mmの大粒を多く含む。	15.5 4.8		暗灰褐色 暗灰褐色				501	
	306	1区 弥生土器 広口壺	密 直径~3mmの大粒を多く含む。	8.6		乳赤褐色 乳赤褐色				486	
	307	4区 弥生土器 広口壺	密 直径~3mmの大粒を多く含む。	12		乳赤褐色 乳赤褐色				487	
	308	4区 弥生土器 壺	密 直径~3mmの大粒を多く含む。	12.3		乳褐色 乳褐色				496	
	309	1区 弥生土器 広口壺	密 直径~2mmの大粒を多く含む。	31.4 2.8		乳茶褐色 乳茶褐色				489	
	310	3区 弥生土器 広口壺	密 直径~2mmの大粒を多く含む。	31.6 1.7		乳茶灰色 乳茶灰色				294	
	311	4区 弥生土器 広口壺	密 直径~2mmの大粒を多く含む。	26.5 14		暗乳赤褐色 乳赤褐色				143	
fig.	番号	遺構名	器種	法 量 器高(cm)	胎土	色 (外 面) (内 面)	備考	R番号	実測 番号		
43	312	4区 弥生土器 壺	密 直径~2mmの大粒を多く含む。	6.3		乳茶灰色 乳茶灰色				95	
	313	4区 弥生土器 広口壺	密 直径~2mmの大粒を多く含む。	19.2 7		乳灰白色 乳灰白色				197	
	314	4区 弥生土器 壺	密 直径~2mmの大粒を多く含む。	19.2 10		乳茶褐色 乳茶褐色				144	
	315	4区 弥生土器 壺	密 直径~2mmの大粒を多く含む。	23.8 3.7		乳茶灰色 乳茶灰色				280	
	316	4区 弥生土器 広口壺	密 直径~2mmの大粒を多く含む。	22.6 30.6		暗乳褐色 乳灰褐色				63	
	317	4区 弥生土器 壺	密 直径~2mmの大粒を多く含む。	29.4 16.5		乳灰褐色 乳灰褐色				271	
fig.	番号	遺構名	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	水中・ 体積	比重	R番号	実測 番号
44	318	4区 石庖丁 弱直背凸刃	5.2	7.2	1	45.92	16.9	2.72	1919	S37	
	319	4区 石斧 破片	(5.5)	(4.9)	1.3	45.9	20	2.3	2000	S236	
fig.	番号	遺構名	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	水中・ 体積	比重	R番号	実測 番号
45	320	4区 石錐 凹基無茎	1.55	1.45	0.3	0.44				1999	S193
	321	4区 石錐 凹基無茎	2.1	1.5	0.3	1				1999	S194
	322	4区 石錐 凹基無茎	3.3	1.45	0.6	2.87				1999	S195
fig.	番号	遺構名	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	水中・ 体積	比重	R番号	実測 番号
46	323	4区 石錐 ツマミタイプ	2.6	1	0.55	1.2				2004	S191
	324	4区 石錐 ツマミタイプ	2.7	1.85	0.4	1.48				2003	S192

## 第4章 まとめ

第33次発掘調査は、旭通4丁目の街区のほぼ全域を調査した第28次調査の東辺中央部分に残された200m<sup>2</sup>ほどの調査であるため、第28次調査を補完する調査結果となった。第28次調査の調査結果で明らかになっていたように、旭通4丁目街区のほぼ中央を南北に流れる大きな流路をはさんで、西と東とでは土地利用の変遷が違っていた。今回の調査においても、西側の縄文時代早期から連綿と続く遺構面とは違い、後世の削平や搅乱もあいまって、第1遺構面は弥生時代後期末～古墳時代前期、第2遺構面は弥生時代中期、第3遺構面は弥生時代前期末～弥生時代中期前半の3面の遺構面が検出された。それぞれの遺構面では、第28次調査で検出していた遺構の続きや、同様に群を構成する遺構を検出した。それぞれの遺構面で、遺構のつながりを確認して、まとめとしたい。

### 第1遺構面（弥生時代後期末～古墳時代前期）

第1遺構面では、第28次調査の4区SB301の東側半分に当たる方形の竪穴住居が検出できた。今回の調査で建物の規模が南北5.3m、東西4.2mの南北方向に長い長方形の建物であることが判明した。柱は4本柱で、建物の形状を反映して南北方向の柱間が長く、東西方向は短くなっている。出土遺物は、あまり多くはないが、碧玉製の破碎品や、結晶片岩製の石鋸が出土している。下層に第2遺構面の玉作り関連の竪穴建物の遺構が存在することから上下の遺構で遺物が混入している可能性もあるが、石鋸が周壁溝にはまつた様に出土していることから、石鋸と碧玉の破碎品はこの面の遺物である可能性は高い。

### 第2遺構面（弥生時代中期）

第2遺構面は、第28次調査の結果からも、今回の調査区で集落として中心をなす遺構面である。竪穴建物は、第28次調査の続きで検出されたもの2棟に加え、新たに検出した1棟の合計3棟が検出された。

第28次調査では、遺構の形状が判然とせず、焼け土が散見する範囲で3区SB408としていた建物が、今回の調査により、南端で検出したSB203につながることが判明した。これは、今回新たに検出したSB201に切られて、床面でSB203の周壁溝が検出できたことにより、残りの建物の輪郭が確認できたものである。SB203では、焼土坑が検出されており、工房的な用途も考えられたため、埋土を篩いにかけて、詳細に遺物の検出作業を行なったが、金属屑や玉作りに関連するようなものは出土せず、僅かにサヌカイトの剥片が出土したのみである。このような建物内で検出した焼土坑は、第28次調査でも複数検出したものである。焼土坑と記載したが、床面から掘り込んだものではなく、建物の床面とほぼ同一レベルで炉床となる小型の炉のようなものが想定される。よって、何らかの上部構造があったものと考えられるが、炉壁など、その存在を想起されるものは今回の調査においても検出することができなかった。

SB202は、第28次調査の4区SB502の東半分である。今回の調査で、東西方向の規模が判明した。第28次調査の4区SB502の南端で東西に方向の溝である4区SR403が検出されていた。今回、建物の東半分を検出する際に、この溝の続きを検出すべく精査を行なったが、検出することが出来なかった。

### 第3遺構面（弥生時代前期末～弥生時代中期前半）

SD201は、第28次調査4区SR401の続きである。規模としては、小さな流れのものであるが、遺構の

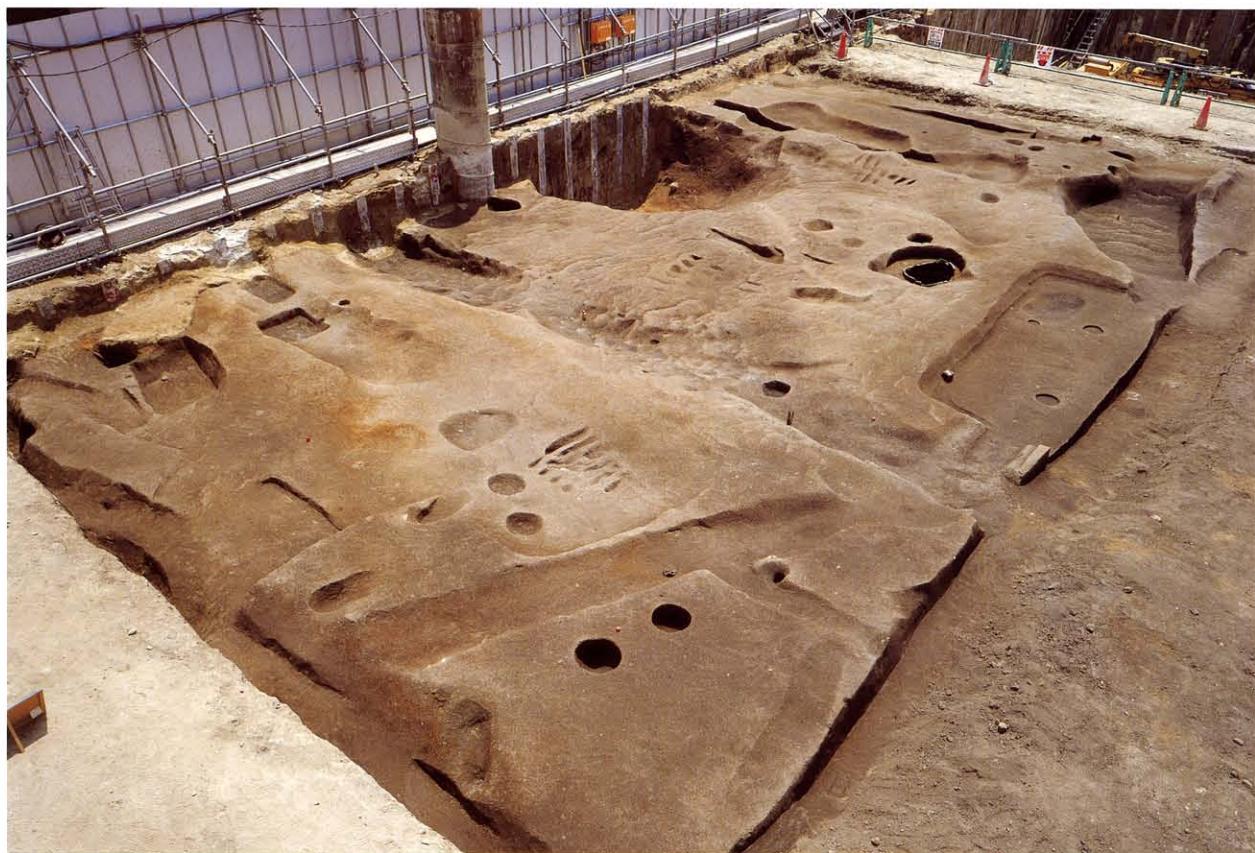
底の立ち上がりは、急激な流れによって抉り取られたように見られることから、大雨などの一過性の流れによって形成された「自然流路」として、第28次調査ではSRの遺構名をつけた経緯がある。今回も同様の抉りが見られるが、全体の流路の方向とは明らかに方向が違う。第28次調査4区SR401・第33次調査SD201の方向は座標軸の東西方向であり、その他の流路は、座標軸の南北方向を流れている。地形から考えても南北に流れることが自然であることから、人為的に掘削された「溝」が、一過性の急激な流水により、抉りが生じたものと考えられる。

#### 玉関連遺物について

SB202は、西半分である第28次調査4区SB502建物内の埋土から碧玉製品や剥片、製作道具である石針など、玉作りに関連する遺物が出土していることから、建物内の埋土を掘削開始から全て篩いにかけて、選別作業を行なった。取り上げは、南北で区別を行い、上層と下層に分けて行なった。採取した小石を選別した結果、碧玉、サヌカイト、珪化木、石英、結晶片岩などを取り上げることが出来た。含まれている製品や礫材を除いた剥片の量は、各石材の比重など、単純に比較できないが、空中重量で碧玉115.12g(29.6%)、サヌカイト112.26g(28.9%)、珪化木153.51g(39.5%)、結晶片岩2g(0.5%)、石英5.54g(1.4%)である。通常の住居址や遺構内から出土する割合からすると、サヌカイトの量が少なく、珪化木の量が多いことがわかる。また、第28次調査において、石針が1点出土していることから、消耗品である石針がどの程度含まれているのかを意識して選別した。石針と考えられるものは、全て珪化木製である。Fig.17で図化した33~70の38点は、選別したもの全てを掲載した。拡大鏡や顕微鏡による詳細観察を加えると針状剥片(33,34,35,37,38,40,44,45,48,59,60,62,67,68)、石針未製品及び途中廃棄品(36,39,41,42,43,46,47,49,50,51,55,56,61,66,69,70)、石針(52,53,54,57,58,63,64,65)に分けることができる。針状剥片は、石針に平面形状は似ているものの、薄く剥離したものであり、そのもの自体が使用に耐えうるものではなく、石針を作成中に出た剥片の可能性がある。石針未製品は、荒割り工程上、石針として使用できそうなものである。明らかに石針としたものは、先端に使用による摩滅(54,63)があるものや、石針として形状を整えるために調整されているもの(52,53,57,58,65)である。軟質の珪化木ではあるが、素材の特質である節理が針状に加工しやすいことから用いられたものと考えられる。第28次調査で出土した石針の材質は頁岩としていたが、あるいは珪化木の鉄分が沈着した部分であった可能性もある。

荒割材には、(24)以外には施溝分割した痕跡が見られず、割りとった直後から、研磨して成形作業しているものが多く見られる。石鋸(71)は、周壁溝から出土しているので、弥生時代中期の早い段階で玉作りに石鋸を使用して施溝分割していたと考えられる。また、工具の素材として珪化木が多く用いられていたことも、今回の調査で判明した。以上、近畿地方での弥生時代中期の早い段階での玉作りの資料を得ることができた。

# 写真図版



1 第1遺構面全景 (西北から)



2 第2遺構面全景 (北から)

## カラー図版2



1 第3遺構面SD201（西北から）



2 SB202出土玉未製品



3 SB202出土碧玉剥片



4 SB202出土石針・未製品



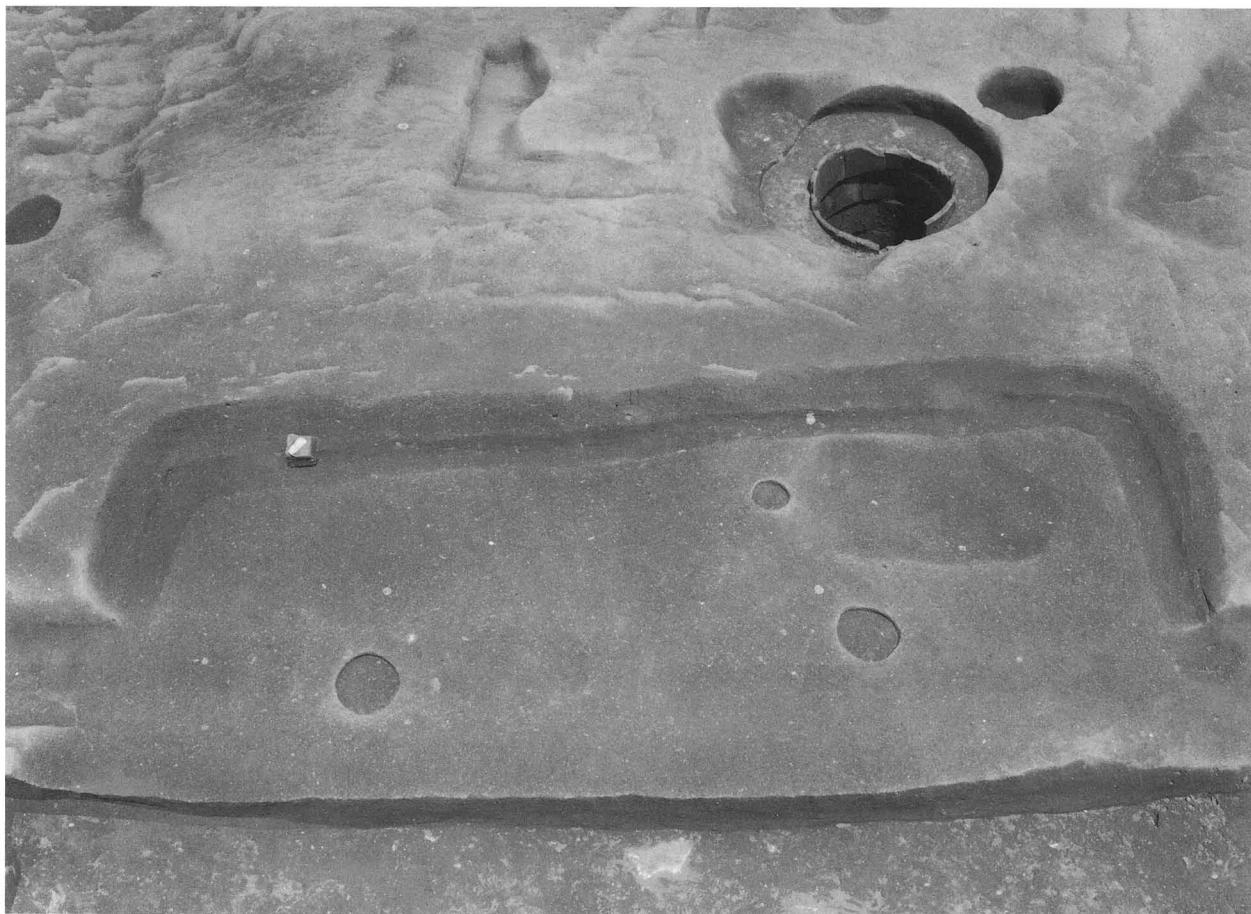
5 SB202出土珪化木剥片



1 第1遺構面全景（西北から）



2 第1遺構面全景（南から）



3 SB101（西から）

## 図版2



1 第2遺構面全景（北から）



2 第2遺構面全景（北西から）



3 SB201（南東から）



1 SB202 (西から)



2 SB203 (南東から)

図版4



1 三角刺突文 広口壺 口縁部内面



2 三角刺突文 広口壺 口縁部側面



3 SK201出土土器



4 SK201出土石庖丁



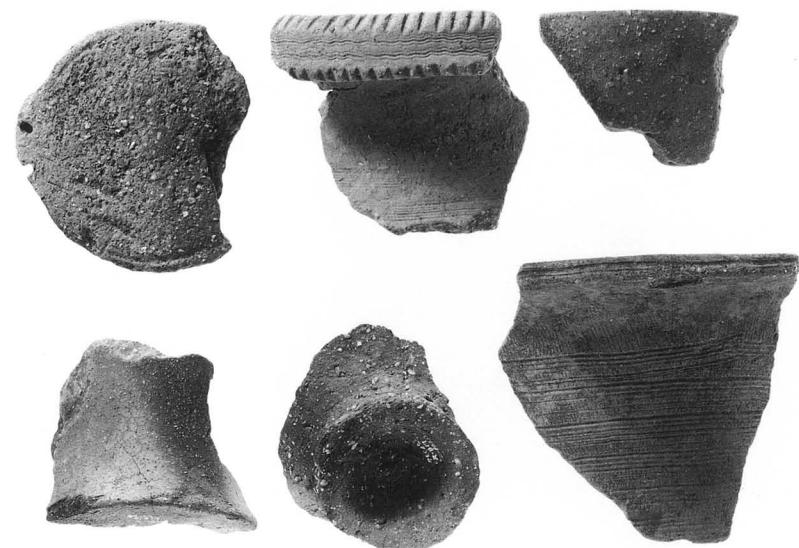
5 2区SR303出土水差形土器



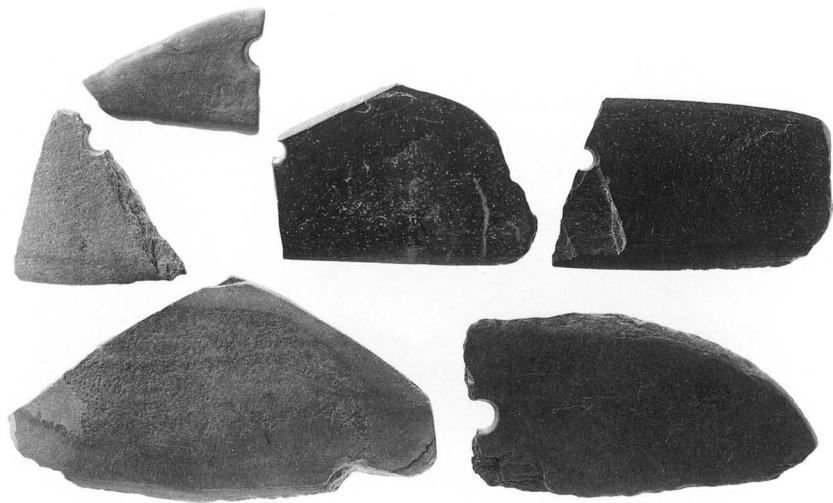
6 2区SR303出土石鏃



1 2区SR303出土土器①



2 2区SR303出土土器②



3 2区SR303出土石庖丁

図版6



1 4区SR405第2層出土杓子形土製品



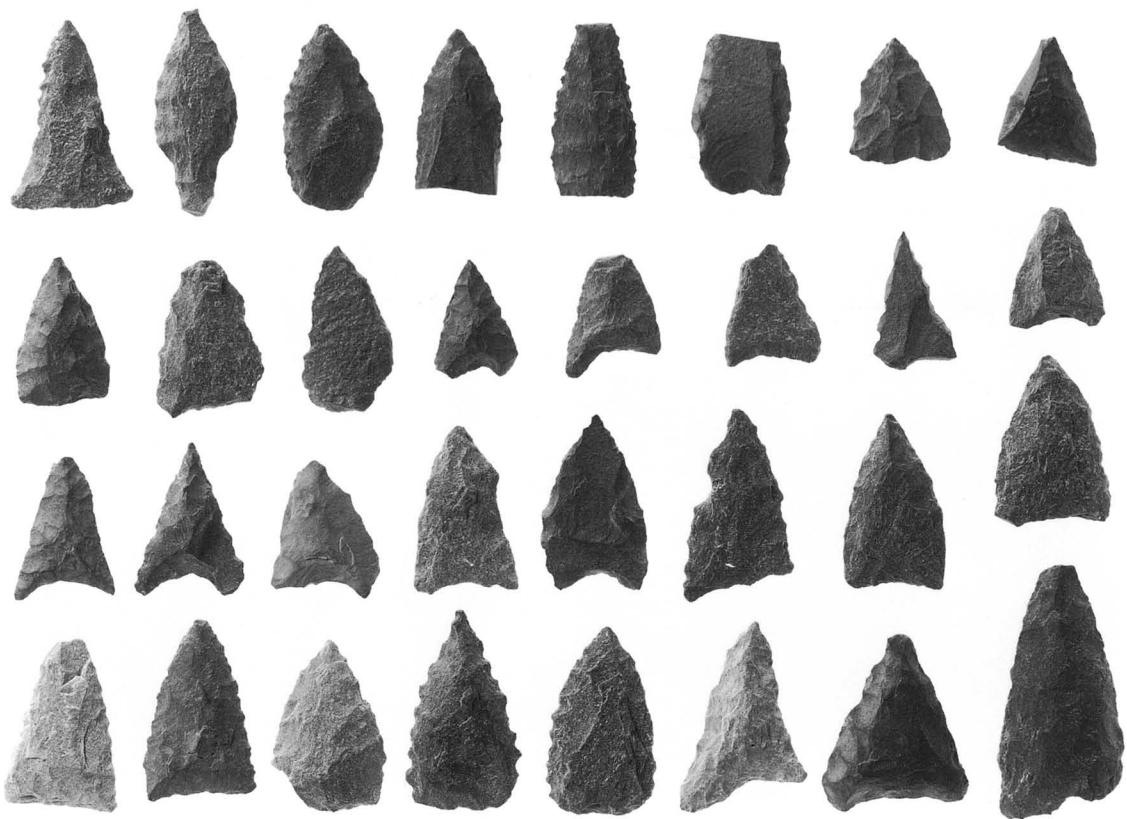
2 4区SR405第3層出土土器集合



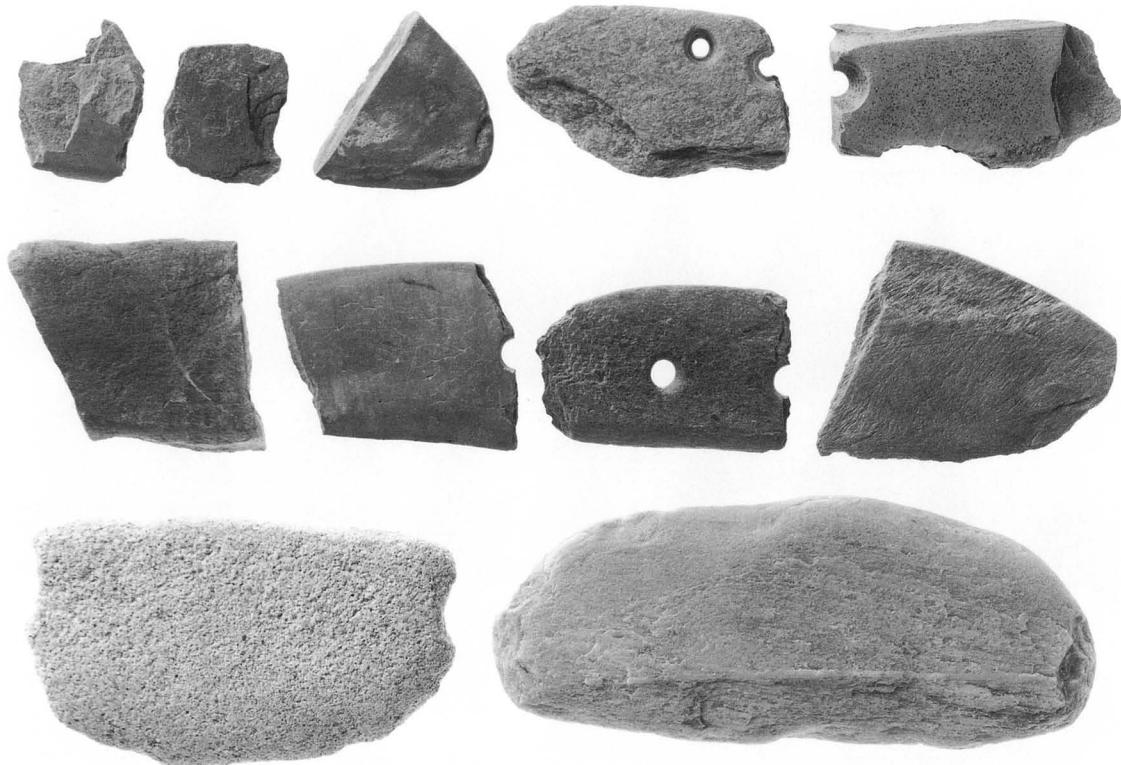
3 4区SR405第3層b出土土器



4 4区SR405第3層c出土土器



1 4区SR405出土石鏃

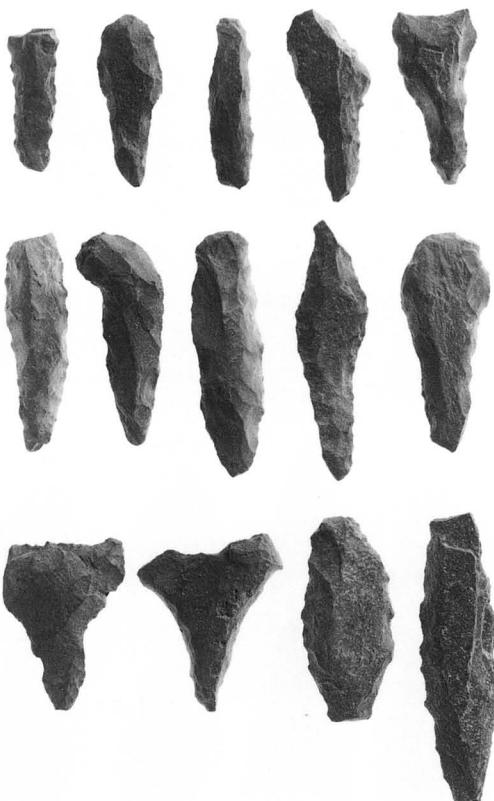


2 4区SR405出土石庖丁

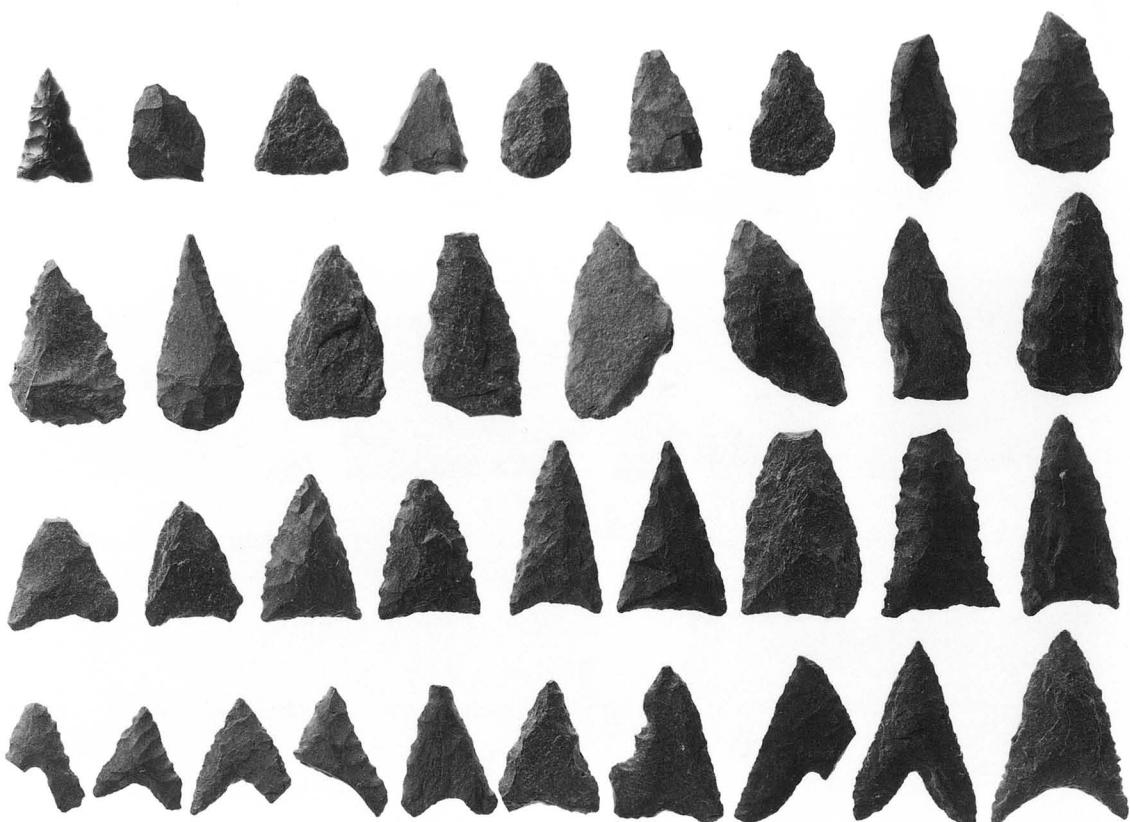
図版8



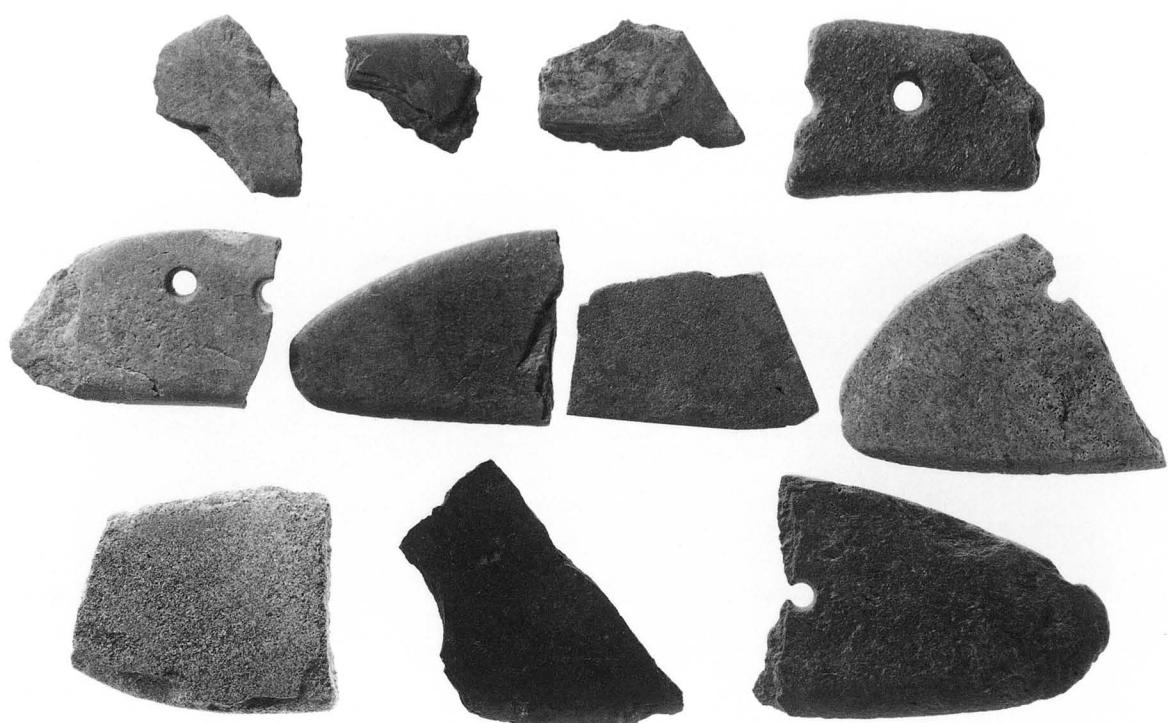
1 1区SR202出土土器集合



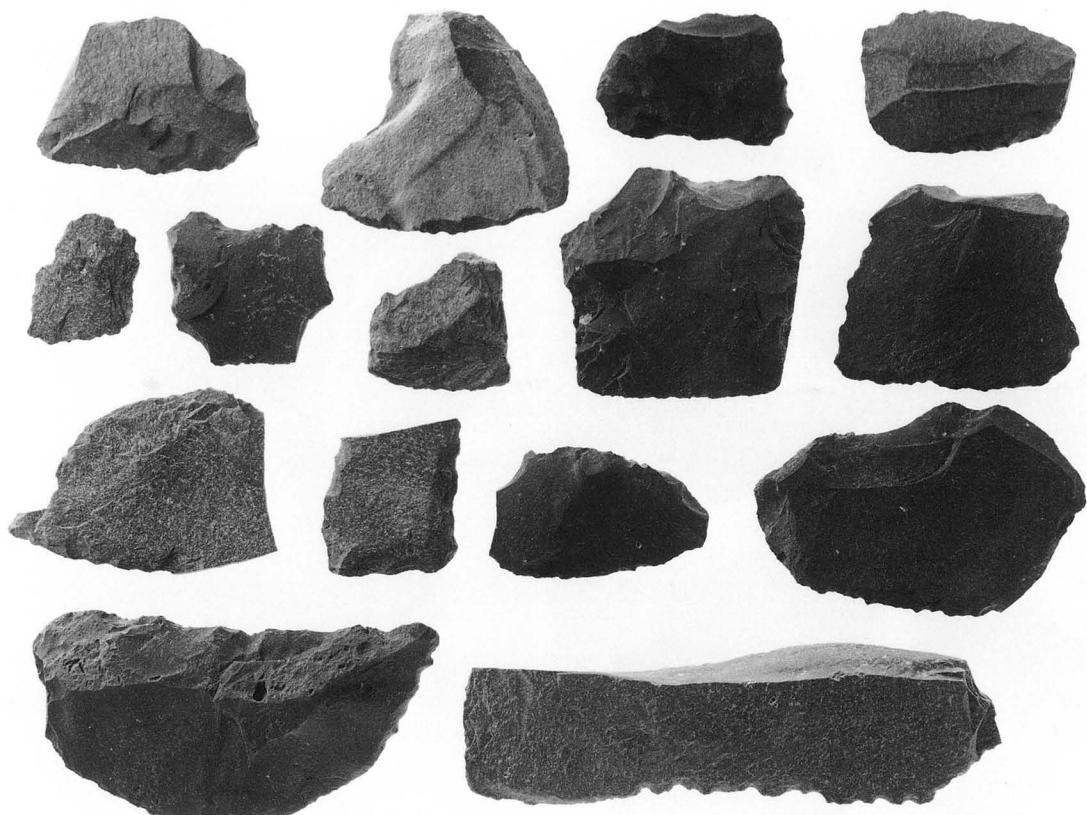
2 第4遺構面流路内出土石錐



3 1区SR202・401出土石鏃



1 第4遺構面流路内出土石庖丁

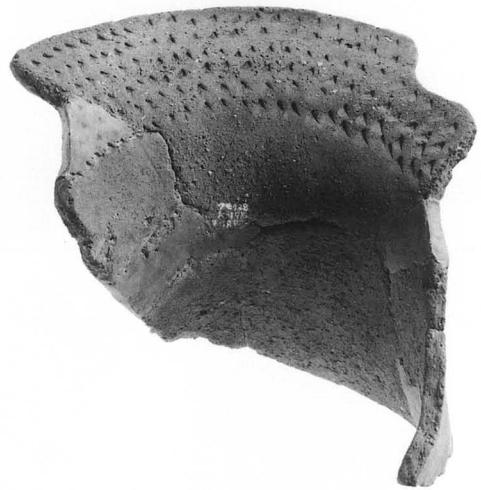


2 第4遺構面流路内出土スクレーパー

図版10



1 三角刺突文土器①



2 三角刺突文土器②



3 三角刺突文土器③



4 4区SR504出土土器

## 報 告 書 抄 錄

ふりがな	くもいいせきだい33じはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	雲井遺跡第33次発掘調査報告書							
副書名								
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	川上厚志							
編者機関	神戸市教育委員会							
所在地	〒650-8570 神戸市中央区加納町6丁目5番1号 TEL078-322-6480							
発行年	西暦2010年12月10日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くもいいせき 雲井遺跡	ひょうごけんこうべし 兵庫県神戸市 ちゅうおうくあさひどおり 中央区旭通 4丁目	28105	3-27	34度 41分 47秒	135度 11分 53秒	20100527 ~20100618	200m <sup>2</sup>	民間再開発事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
雲井遺跡	集落跡	弥生時代	竪穴建物、溝、土坑、ピット		弥生土器、石器、碧玉、石針、石庖丁		玉作り関連遺物	
要約								
弥生時代中期初頭、中期前半、弥生時代後期末～古墳時代前期3面の遺構面を確認した。 弥生時代中期の遺構として、第28次調査で検出した竪穴建物の続きからは、玉作り関連の遺物が出土した。 この玉作り関連に遺物には、多くの珪化木が含まれており、加工道具として使用されていた可能性が指摘される。								

### 雲井遺跡第33次発掘調査報告書

平成22年12月 印刷  
平成22年12月 発行

発行 神戸市教育委員会文化財課  
〒650-8570 神戸市中央区加納町6丁目5番1号  
TEL078-322-6480

印刷 デジタルグラフィック株式会社  
神戸市中央区弁天町1-1  
TEL078-371-7000

